平成30年（2018年）度

インターンシップ報告書

茨城大学人文社会科学部

目　　次

●平成 30(2018)年度　インターンシップを終えて　人文社会科学部長　内田　　聡…… 1

●平成 30(2018)年度　人文社会科学部におけるインターンシップ　教授　井澤　耕一…… 2

●インターンシップ報告書（第 1 部：公的機関インターンシップ）
◇公的機関インターンシップ体験で得た学び　准教授　添田　　仁…… 5
（都道府県）
◇茨城県庁・県機関…… 6
（市町村・県内）
◇那珂市役所…… 13
◇鉾田市役所…… 14
◇ひたちなか市役所…… 15
◇笠間市役所…… 16
◇結城市役所…… 19
◇水戸市役所…… 20
◇日立市役所…… 22
◇大洗町役場…… 24
（市町村・県外）
◇大田原市役所（栃木県）…… 25
◇銚子市役所（千葉県）…… 26
◇高山市役所（岐阜県）…… 27
（国際協力・国際交流）
◇ JICA 筑波 …… 28
◇日本国際協力センター（JICE）…… 29

●インターンシップ報告書（第 2 部：民間企業インターンシップ）
◇マスコミ系企業インターンシップの学びと意義　教授　村上　信夫…… 31
（テレビ局関係）
◇株式会社えすと…… 32
◇株式会社トラストネットワーク…… 33
◇株式会社やんかわ商店…… 34
◇行方市役所　情報政策課　なめがたエリアテレビ…… 37

（ラジオ局）
◇株式会社茨城放送…… 38
（新聞社）
◇朝日新聞水戸総局…… 40
◇読売新聞水戸支局…… 42
◇産経新聞水戸支局…… 44
◇東京新聞水戸支局…… 45
（県内企業・機関）
◇常陽藝文センター…… 47
◇ひたちなか海浜鉄道 …… 48
◇茨城大学…… 50
◇株式会社筑波銀行…… 52
◇株式会社エムティーアイ…… 53
（その他）
◇茨城県北地域おこし協力隊…… 54
◇ NPO 法人ドットジェイピー…… 57

●インターンシップ報告書（第 3 部：PBL 型インターンシップ）
◇専門科目「プロジェクト演習」におけるインターンシップ
人文社会科学部地域志向教育プログラム委員長　神田　大吾…… 63
◇水戸市役所…… 64
◇福島県富岡町役場…… 73
◇ Domaine MITO 株式会社 …… 78

●編集後記…… 84
・人文社会科学部インターンシップ担当
教授　井澤　耕一　　教授　村上　信夫　　教授　今村　一真
准教授　添田　　仁
・プロジェクト演習　　准教授　神田　大吾
・キャリアセンター
・インターンシップ　スタッフ…… 84

平成30（2018）年度 インターンシップを終えて

内田　　聡（人文社会科学部長）

2018年度も人文社会科学部および人文社会科学研究科の共通科目「インターンシップ」を実施した。まずは、快く学生を受け入れていただいた関係機関各位に心より御礼を申し上げる。

この授業は19年目となり、派遣先は企業・官公庁・団体にわたり、茨城県内外へ、年によっては海外にも広がり、履修学生も増えてきた。現在は派遣先を公的機関と民間企業の2つに明確化して実施している（他学部生も履修可）。インターンシップの意味合いをも持つ「プロジェクト実習」の履修学生と併せて、今年度はのべ75名が参加した。

インターンシップにはさまざまな手法や形態があり、企業側が主催するものもある。本学部のインターンシップは、2年次以上を対象とし、2週間で2単位の「インターンシップA」、および1週間で1単位の「インターンシップB」からなる。受講生は派遣期間終了後に本報告書に掲載されるレポートを作成するが、派遣先には終了時に評価書の作成もお願いしている。これにより、履修にともない身についた能力等の学習成果が幾分かでも可視化される。また、「プロジェクト実習」も本報告書にレポートを掲載している。

学生の就業意識も高まるなかで、本授業のバージョンアップも求められる。茨城大学における正規授業としてのインターンシップは、本学部の授業が先駆けであるが、これを全学的な取組みに拡大する試みも行われてきた。茨城大学キャリアセンターとの協力関係を強化し、事前準備を進め、ガイダンスを実施している。近年、大学の授業は変化を求められ、座学にとどまらず、学生が社会の現場に出て行き、さまざまな課題を具体的に考え行動するタイプの授業が増えつつある。学生は1～2週間のインターンシップを通し、企業や行政機関の果たしている社会的意義、組織内での社員・職員の役割分担と協力関係、コミュニケーションの重要性等を理解し、積極的に取り組んでいることが、このレポートから読み取れる。

インターンシップを実施するには、派遣先の負担はもちろん、準備や事前指導を担当する教職員の負担も決して小さくない。交通費や宿泊費といった学生本人の経済的負担も生じる。しかし、教育効果の高い授業であるため、一人でも多くの学生が履修できるよう努力していきたいと考える。

最後に、受講生の皆さんには、受入先の協力があっての授業であることを忘れず、本授業を通して現場で見て話して得たことを、周囲の人と共有しながら、自身のこれからの学修や人生に大いに生かしいくことを期待する。

2019年3月

平成30（2018）年度
人文社会科学部におけるインターンシップ

井澤　耕一（人文社会科学部教授）

1．人文社会科学部におけるインターンシップ

2000年度に当時の人文学科によって始められたインターンシップは、2007年度から、インターンシップ「水戸近郊」とインターンシップ「広域」の2つに分かれて実施されていた。しかしなら「広域」と称しながら、インターンシップの実施場所が市内であった、逆に海外インターンシップであるにも関わらず、「水戸近郊」で担当したりなどの矛盾が生じ、インターンシップを志す学生にとって、いったいどちらを選択すればよいのか一見して分かりにくい状況になっていた。

そこで私をはじめ担当教員は協議を重ね、その齟齬を解消するために、今年度から「派遣先」でグループ分けを行い、県庁や市役所などへのインターンシップを管轄する「公的機関」と、民間企業へのインターンシップを管轄する「民間企業」の2グループに分け、かつガイダンス等はなるべく2グループ共同で行うことに決定した。

ただし教務上の位置づけは、人文社会科学部の選択科目として、8月～10月を中心に実施し、1週間（実質5日間）程度であれば、1単位を授与する「インターンシップA」、2週間（実質10日間）程度であれば、2単位を授与する「インターンシップB」とする。なお昨年度より単位を授与できるのは、インターンシップに係る行事にすべて出席し、かつ本報告書にレポートを寄稿した者に限っており（一部例外あり）、実際にインターンシップに参加した数とは相違している。これについては今後も重要課題として検討していかなければならないと考えている。

2018年度は、学部のインターンシップ担当教員が中心になって実施にあたった。すなわち、公的機関インターンシップは私井澤、添田先生で、民間企業インターンシップは村上先生及び今村先生が実施の任に当たり、事務全般については学務Gの清家さんが担当した。

また一昨年度より、本学のキャリアセンターの皆様に、主に公的機関への派遣に係る事務的手続きや全学部対象のインターンシップガイダンスを主催していただいた。多くの汗をかいていただいた皆様には、特に記して謝意を表します。

(1) 全学インターンシップガイダンス（2018年5月16日・水、5月23日・水は2回）

毎年多数の学生が参加すること、また他授業との兼ね合いも踏まえて、ガイダンスを3回に分けて行った。そこでは主に以下のことを説明した：

①インターンシップの概要説明および注意点
②インターンシップ経験者による体験談
③リクルートからの講話

今年度のガイダンスへの参加者は、16日は227名以上、23日は277名以上、本学部の参加者はのべ372名に上った。

(2) 人文社会科学部インターンシップ特別ガイダンス（6月13日・水）および派遣前ガイダンス（7月27日・水）

まず6月中旬、学部独自のガイダンスを上記の日程で開催し、特にマスコミを中心としたインターンシップについて、村上先生から詳細に

説明いただいた。また7月まで、掲示による派遣希望者を募り、キャリアセンターおよび教員による受け入れ先との調整を経て、派遣が決定した学生を集めてガイダンスを行った。前述したように、昨年度から科目として履修する者のみ本ガイダンスの出席を義務付けたが、（事前調査では）出席すると記しておきながら、当日ドタキャン（すなわち履修しない）するものが少なからずおり、これも今後の解決すべき課題となろう。ガイダンスにおいては、派遣期間中の注意点、日誌・報告書の書式、学生同士で報告書を添削すること、後日担当者別に行われる報告会に必ず参加することなどを説明した。また例年と同じくキャリアセンターの菊池美也子さまを招いて、インターンシップ参加に際しての留意点やマナーについてのお話を頂いた。

(4) インターンシップの実施（7月下旬～）

今年度は、公的機関インターンシップではのべ24名（2年次生12名、3年次生12名）、民間企業インターンシップではのべ31名（2年次生12名、3年次生18名、その他1名）の学生が本科目を履修した（またプロジェクト実習として20名の学生も参加）。インターンシップ終了後、学生からはインターンシップの日誌、レポートが提出された。

(5) インターンシップ報告会（11月～）

11月から12月にかけて、担当教員ごとにゼミ形式の報告会が複数回開かれ、参加学生が本報告会で自らの体験を披露した。派遣先と仕事内容の紹介、感想および反省を発表し、それに対して担当教員や参加学生から質問をするという形式で行われたが、各人のインターンシップ経験を十分理解できる大変有意義な報告会となった。発表会後、報告会参加者全員がレポート最終稿を提出した。

最後に2018年度インターンシップにおいて改善した点及びこれから改善を要する点を記す。

① 報告書作成費について

昨年度より紙媒体での報告書の発行は、受け入れ機関・企業への送付分、参加学生への贈呈分のみにして、それ以外は地域志向教育プログラムHP（学部HPよりアクセスできる）からダウンロードしてもらう形式に改めた。しかし資料保存の観点から、やはり紙媒体は全廃せずに、少部数でもよいので発行は維持していきたいと考えている。また来年度はHPについてもっと広く周知させなければならないと考えている。

② キャリアセンターとの業務のすみわけ

今年度もキャリアセンター職員の方々に業務上の負担をかけてしまったこと、感謝とともにお詫び申し上げたい。来年度に向けて、一方が過負担にならないように、事前の十分な話し合いと調整を図っていかなければならないと考えている。

今年度のインターンシップ実施に当たっては、各方面からの協力無くしては不可能であった。まず、本年度も快く学生の受入に御協力いただいた多くの公的機関および各種民間企業、団体の皆様に感謝を申し上げたい。さらに、学生への指導を熱心に行っていただいた先生方ならびに事務的なサポートをしていただいた清家さん並びにキャリアセンターには感謝申し上げたい。本報告書作成に関しては予算施設委員会並びに学部執行部の配慮に負うところが極めて大きい。これらの内どれか一つでも欠ければインターンシップはスムーズに行われなかったにちがいない。この場をかりて改めて心から感謝する次第である。今後とも我々は歩みを止めることなくインターンシップの改良を図っていくので、皆様のさらなるご支援を茲にお願いする次第である。

（参考文献）

2017年度以前発行の『インターンシップ報告書』（茨城大学人文学部）

インターンシップ報告書
（第１部）
公的機関インターンシップ

公的機関インターンシップで得た学び

人文社会科学部准教授　添田　　仁

茨城大学人文社会科学部では、2018年度、24名の学生を公的機関へのインターンシップに派遣しました。内訳は、茨城県の機関に7名（県庁5名、他2名）、各市町村役場等に15名（県内12名、県外3名）、さらにJICA・JICEなどの国際協力・国際交流を推進する独立行政法人・一般財団法人に各1名となっています。公的機関でのインターンシップを希望する学生数は、昨年度の14名から急増し、さらに半数の12名が2年生でした。限られたデータではありますが、公的機関への就職志向が強まっていること、そして公務員試験に向けた準備の開始時期が早まっていることを示しているものと思われます。

学生の参加動機については、公務員を志望してはいるものの、その業務に対して漠然としたイメージしか持っていないために、まずは現場での経験を積みたいというものが多く見られました。しかし、一方で、地元に愛着を持ち、将来は大学で学んだことを活かして地域貢献できる人材になりたいという明確な意志を持って参加した学生もいます。とりわけ少子高齢化や人口減少、貧困や虐待など子供の生活環境をめぐる問題、さらには労働政策や災害対策、女性の待遇問題など、現実の地域社会が抱える諸課題を認識し、それらの解決に向けた自治体の取り組みについて実践的に経験することを目的として参加した学生が多かったことは注目すべきでしょう。

学生の派遣先は、政策秘書課、行財政改革推進室、税務課、商工観光課、交通政策課、労働政策課、福祉課、原子力安全対策課、介護保険課、まちづくり推進課、文化振興課、社会教育課、図書館など多岐にわたっています。派遣先では、各種の見学、広報誌や資料の作成など基盤的な業務はもちろん、なかには、高齢者の雇用促進および労働力不足の問題にかかわる政策立案、家庭児童相談室のお宅訪問、留学生来日プログラムの運営や大使館への引率、さらには貝の仕分け作業や岩石を磨く作業に従事した学生もいました。関係機関の皆様には、多彩な学びの機会をご用意いただいたことに深く感謝します。

公的機関の業務について、「受動的」「デスクワークが多い」という先入観を持って参加した学生も多いようです。それは、小説・ドラマで描かれる公務員や、市役所等のカウンター越しで話す公務員の様子を見て、それが代表的な仕事と無自覚的に考えているからです。しかし、実際には、政策の立案などのようにクリエイティブな仕事も多いことに驚いたようです。とくに大学教育で学ぶような政策アイデアの斬新さや面白さのみを重視するのではなく、現実社会に根ざした的確かつ効果的な運用を実現できる政策の立案こそ重要であることに気づいたという意見もありました。また、公務員の市民対応についても、決して画一的なものではなく、相手の方の立場や年齢層、その時々の状況に応じて、相手に寄り添うようにしながら臨機応変に対応することが求められることに驚いたという声も多くありました。インターンシップ体験は、大学生活とは別の角度から、主体的かつ柔軟に公共の業務に取り組むことの重要性に気づかせてくれる貴重な経験となったようです。

多くの学生が上記のような貴重な体験をしてきたことを報告してくれていますが、それは学生を受け入れてくださった職場の方々のご配慮に尽きます。日々の業務の他に学生を受け入れる準備等をしてくださっていることはもちろん、配属されてきた学生に気さくに声をかけていただき、試験勉強やワークライフバランスについてのアドバイスをしてくださっている様子や、仕事に向かう真摯な姿勢が学生から数多く報告されています。ご多忙のなか受け入れてくださった関係機関の皆様には、心から感謝し、重ねてお礼を申し上げます。

防災の面から県を支えること

茨城県庁　防災・危機管理部　原子力安全対策課

社会科学科　3年

鈴　木　真　由

1．参加の動機

私がこのインターンシップに参加した理由は3つあります。1つ目は、国・都道府県・市町村で働くことの違いを知り志望職種を絞るためです。実際に業務を体験し、自分の適性を確認したいと考えました。2つ目は、自分が関心を持つ分野を通して、茨城県を支える仕事について知りたかったからです。私は現在、労働経済学を学んでおり、特に女性活躍や子供の貧困問題について関心があります。大学1年生のときから継続しているボランティアサークルの活動を通して防災・減災にも興味があり、その経験をこの職場で生かすためにこれから自分がするべきことを知りたいと考えました。3つ目はプログラムの長さです。茨城県庁のインターンシップは1－2週間のプログラムであったため、私はこのインターンシップを職場の雰囲気を肌で感じ、実際に働いている方々からたくさんお話を聞くことができる貴重な機会だと捉え、参加を通して職場について深く知ろうと思いました。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城県の防災・危機管理部は防災・危機管理課、消防安全課、原子力安全対策課に分かれており、私は原子力安全対策課で5日間職場体験をしました。原子力安全対策課は、放射線監視事業や原子力災害に備えた対策事業、県民への原子力・原子力防災に関する知識の普及などをしています。

原子力安全対策課では、県のお仕事の特徴や職員の働き方などを幅広くお話をしていただき、その後、新聞切り抜き作業などの事務作業をお手伝いしました。また、出先機関を訪ね、放射線を監視する業務や緊急時のシステムについて学習をしました。広報の役割を担う出先機関の原子力科学館を見学した際には、職員の方と原子力広報の改善点を考えました。

担当者様のご厚意により、原子力安全対策課の他にも消防安全課、防災・危機管理課、女性活躍・県民協働課のお仕事に関わらせていただきました。それぞれの課で業務について詳しく説明していただき、関連施設を見学したり、HPの編集作業のお手伝いをしたりしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

5日間を通して、茨城県職員として働くために必要な能力・心構えを知ることができました。そのなかでも「変化に対応できる能力」や「企画力」、「バランスをとる能力」は、業務を体験することでその必要性を実感しました。

茨城県の職員は数年ごとに職務が変わるため、さまざまな分野を経験することができる魅力がある一方で、今まで扱ったことのない仕事に対応しなければならない大変さがあります。また防災にかかわる業務を体験して、健康状態や交通手段が多様な住民の安全を守ることの難しさを知り、それを実現するには多様な視点を持ちながら業務を遂行することが大切だと実感しました。また、より安全な環境を整えるために新しいシステムを構築する際には、市町村との連携が必要だということがわかりました。インターンシップを通して、今後の大学生活で意識するべきことを見つけることもできました。将来、より住民の方に寄り添える人材になるため、これからのボランティア活動や学習では、一つの物事をさまざまな視点で考えながら現場の声に耳を傾け、経験を積んでいきたいです。

4．後輩へのアドバイス

私はもともと希望していなかった課でのインターンシップでしたが、この1週間の職場体験をきっかけに、県で働くことについてより広い視点で考えられるようになりました。そのため後輩の皆様には、自分の希望する職場にこだわらず、広い視野をもって就職について考えていただきたいです。

また、参加する際には、インターンだからこそ得られる情報をたくさん得るためにも、あらかじめホームページ等で調べてわかることは確認し、職場の方への質問を準備することをお勧めします。

県職員として働くこと

茨城県庁　総務部　税務課

社会科学科　3年

吉　原　美　琴

1．参加の動機

私は現在、公務員を目指しており、その中でも県全体の行政に関心があるので茨城県を第一希望としています。しかし、茨城県職員の方々が日々どのような業務をしているのかを抽象的にしか想像することが出来ず、なかなか公務員試験勉強へのモチベーションが出ませんでした。そこで実際に茨城県職員として働くとともに職場の雰囲気を体感することで、今後の試験勉強に励んでいく糧とするべく茨城県のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城県総務部は総務課、行政経営課、人事課、財政課、管財課、税務課などに分かれています。その中で私は税務課に5日間インターンシップに行きました。

税務課は税金の中でも県税を取り扱う課であり、税制グループや賦課グループ、税務電算グループのように業務ごとに細かくグループ分けされています。さらに出先機関である自動車税分室や県税事務所も県内に10ヶ所かあり、県税に関する全ての業務を担当している部署となっています。

インターンシップでは、税務課に配属された職員がまず受けるという税務基礎研修が行われ、県民税や自動車税などの種類とそのあらましなどの県税の知識を身につけました。その後、電子申告の宣伝ポスターの折込みやふるさと納税のお礼状の発送作業などの事務をさせていただきました。また自動車税分室を訪れ、自動車税の税額計算や自動車2税申告書に記載された金額と算出した金額が合うかの確認などに従事しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

まず1～3日目に行われた税務基礎研修では、実際に担当なさっている職員の方から各県税を一から丁寧に教えていただいたことで、県税の知識を修得することができました。それだけではなく、徴収強化対策室の方が差押えで失敗してしまったことのような職員の方が実際に仕事している時に起きた出来事なども教えていただき、リアルな現場を知ることができたことも得たものとして大きかったです。

そして4・5日目の実習体験においては、実際に業務を行いました。私は県に務める公務員はデスクワークと電話対応しかしないものだと思っていたのですが、発送作業やポスターの折り込みなど膨大な量の事務作業も行うことに驚きました。その他にも研修だけでは味わえなかった職場の空気に触れることができました。

また昼休憩では、女性職員の方々に公務員試験勉強のアドバイスや日常生活との両立などのワークライフバランスについてなどさまざまなお話を聞かせていただきました。その中で、特に印象に残ったのが異動の話題です。県職員は、県庁内に留まらず出先機関への異動も珍しい話ではないそうです。そのような状況下で、職員の方々は年の近い同僚とのコミュニケーションを密に取るなどの新しい環境にすぐ適応できる能力を身に着けていったそうです。このような話も実際に働いている方にしか聞くことが出来ないので、そこもインターンシップに行かないと得られなかった情報であり、非常に有意義でした。

4．後輩へのアドバイス

長期のインターンシップに行くには結構な勇気がいる方も多いと思いますが、かく言う私もその一人でした。今回のインターンシップに行くかどうか何度も悩んだ上に、実際行く直前まで「うまく仕事をやっていけるのだろうか…」「職員の方が怖い人ばかりだったらどうしよう…」などと色々と不安に思っていました。しかし行ってみると、職員の方が仕事内容を丁寧に教えてくださる上に、職場の雰囲気を肌で感じることや、職員の方にお話を伺うなど実際体験することで得られるものが多かったです。

一歩踏み出す勇気が少しでもあれば、自分のこれからの長い未来を見定めるきっかけを作り出すことができます。もしインターンシップに行くか悩んでいるのなら、ぜひ勇気を出して行ってみることをおすすめします！

より良い茨城県をつくる仕事

茨城県庁　産業戦略部　労働政策課

社会科学科　3年

岩　堀　佳　菜

1．参加の動機

私が茨城県庁のインターンシップに参加した動機は主に3つあります。1つ目は、公務員として働くことについてイメージが漠然としていたため、実際にどのような業務を行っているのか体験してみたかったからです。今回のインターンシップが就職先を選択する上での一つの材料になれば良いと思い参加しました。2つ目は、自分が生まれ育った茨城県のために仕事をしたいという思いがあり、県職員として働くことに興味を持っていたからです。茨城県をよりよくしていくために県として何ができるのか、何をすべきなのか考えたいと思い参加しました。3つ目は、自分の興味を持っている分野に関する仕事を経験したいと思ったからです。私は現在、労働法を専攻しており、その知識を生かして労働政策について考えたいと思い労働政策課のインターンシップを希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は茨城県庁の労働政策課という部署で5日間インターンシップに参加させていただきました。労働政策課では主にさまざまな人を対象とした就職支援や労働政策の策定を行っており、今回のインターンシップにおいても今後必要とされる労働政策を立案するという体験をさせていただきました。

私は他のインターンシップ生3人とグループになり、定年後も働く意志がある高齢者を対象とした企画を立案しました。具体的には、退職後も働きたい高齢者と、そのような高齢者を新しく雇う企業をうまくマッチングする仕組みを作り、これに対して県が補助金等で支援するという方法で高齢者の雇用促進を目的とした政策を考えました。政策が決定したあと、それを実行するのに必要な予算をつける作業を行いました。限られた予算の中でできるだけ住民に必要なサービスを提供することが求められ、自治体として何を支援すべきか決定しなければならないということに難しさを感じました。また一方で、自分が県民の生活を左右する政策を考えるというところに、県職員として働く責任感とやりがいを感じました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して、まずは公務員として働くとはどういうことかについて知ることができました。インターンシップに参加する前は、仕事の内容について、県政のとりまとめ等の事務的な作業など、受動的に業務をこなすといったイメージを抱いていましたが、実際にはそれだけでなくさまざまな視点から今必要な政策・催しを考えたり、大きな予算を動かしたりするなど自ら主体的に働いていることがとても印象的でした。決して楽な仕事ではありませんが、職員の方々がやりがいを感じながら茨城県をより良くするために働く姿を見て、私もこのような職場で働きたいと思うようになりました。

次に、さまざまな体験を通して自分に足りないところを新たに見つけることができたことは、今後にとって大きな収穫になりました。今回は他大学のインターン生を含む8人でインターンシップに参加させていただきましたが、同じ課題に取り組んでもそれぞれ異なった視点から違った意見を出し合うことができ、他人の意見を聞いて学ぶことが多くありました。また、立案した政策に対して職員の方々からフィードバックをいただいた際にも、実施する上での課題等について講評をいただき、自分に足りない知識や物の見方が多くあることを痛感しました。

最後に、5日間という短い期間の中でも積極的に動くことを意識するようになった点が、今回のインターンシップに参加して最も大きな意義があったことだと思います。他のインターン生が目的を持ってインターンシップに参加している姿を見て、私も自ら学ぶ姿勢を大切にしようと考えるようになりました。今までの生活では与えられたことをこなしていれば十分と考えていましたが、社会人としては自ら進んで意見を述べたり行動したりすることが重要だと身をもって実感しました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することは、仕事の内容を知ることだけでなく、自分に足りないことを発見できる機会を得ることだと感じました。進路が定まっている人もそうでない人も、さまざまな人と接することで視野を広げ、自分を見つめ直す良い機会になると思います。自分に合った進路を選択するために、積極的にインターンシップに参加してほしいです。

多方面から政策を考える

茨城県庁　産業戦略部　労働政策課

社会科学科　3年

川　野　未　歩

1．参加の動機

茨城県庁のインターンシップに参加した理由は、公務員として働くということについて理解を深めるためです。私は、生まれ育った茨城県の地域貢献に携わりたいという思いを以前から抱いており、進路の選択肢の一つとして地方公務員を考えております。しかし、公務員はどんなことをしているのかわかっておらず、現実と自身の思い描く公務員像には大きなギャップがあるのではないかと不安を感じていました。そこで、具体的な仕事内容や職場の雰囲気を知り、公務員として働くイメージを明確化しようと思い参加を決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

労働政策課は、産業戦略部に属する課の1つです。主な施策としては、茨城県内の雇用機会の創出、若者や高齢者・障害者をはじめとした県民の雇用の促進、勤労者福祉の増進、働き方改革・ワークライフバランス普及促進、職業能力開発支援などを行っています。

インターンシップでは、2つの班にわかれて、労働力不足の問題に対応するための政策の立案を行いました。私の班では、外国人を新たな労働力として県内企業への雇用を促す事業を考案し、事業内容とメリットを概略図にまとめました。そして、その事業でかかるコストを計算し、予算書を作成しました。職員の方からは、政策の実現のためには細部まで検討し、各部分についてなぜそうしたのか根拠を明確にする必要があることをご指摘いただき大変勉強になりました。また、同期の学生の新しい切り口からの意見を聞いて、固定観念にとらわれない柔軟な発想が自分は足りないことに気づくことができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

実際に働く現場に入って目に飛び込んできたのは、黙々とデスクワークをこなすさまではなく、県をより良くしようと試行錯誤しながら仕事に取り組む職員の方々の姿でした。業務を体験させていただいたことで、公務員は常に思考を巡らせ、必要な知識を吸収しながら業務を遂行していることがわかりました。特に、県職員では、茨城県の現状や課題を把握し、県の事情に寄り添った政策を投じることが求められます。今回の政策立案体験でも、限られた財源のなかで茨城県の強みをどのように生かしていくか考えることが大変でしたが、非常にやりがいもありました。

私がこの経験で学んだことは、多角的に物事を考えることの重要性です。班で政策を考えているとき、なかなかアイディアが思い浮かばず、行き詰ってしまうことが多々ありました。そんなとき、職員の方にアドバイスをいただき、県職員・事業の利用者である外国人・協力企業それぞれの立場に自分を置き換えることで、県が何をすべきかが段々とみえていきました。加えて、一つの場面を抜き出して各当事者目線で捉えることで、事業に不可欠な人材・物資とそれがどの程度あればよいのか洗い出すことができました。このように、多数の視点をもって検討することで、偏った意見ではなく各ニーズを加味した解決策を生み出すことがわかりました。今後もこの考え方を大切にしていきたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

今後のより良い進路選択のためにも、皆様にはぜひインターンシップに参加していただきたいです。日常生活では得られない情報を内部から知ることができる好機です。参加の際には積極的に取り組み、気になることはぜひ職員の方に質問してみて下さい。そのためには、事前に派遣先のことをよく調べ、疑問点をまとめておくと良いと思います。茨城県庁の場合、県のHPなどから、目指している県のあり方とそのために力をいれていること・派遣部署が主導している活動やその部署が担当する分野について予習しておくことがおすすめです。

最後になりますが、お忙しいなか丁寧にご指導下さった労働政策課の皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

自分を見つめ直すキッカケ

茨城県庁　保健福祉部　厚生総務課

社会科学科　3年

横　田　　渚

1．参加の動機

私は地方公務員を目指しています。しかし、具体的な業務内容や職場内の環境、雰囲気などを把握できておらず、漠然とした将来のイメージしか描けない状態でした。実際に職場で働く経験をすることは、就職に対する不安を払拭し、目標とする職業について理解を深めるきっかけとなると考えました。また、自分自身の目や耳で直接、職場で働く職員の方々の姿を拝見したり、実際の職務に基づく貴重なお話をうかがったりできるまたとない絶好の機会だと感じ、現時点で第一志望である茨城県庁へのインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城県庁保健福祉部厚生総務課には4つの担当グループがあります。保健福祉行政の総合調整に関わることを担当する総務グループ、地域保健の推進や保健所及び医療大学に関することを担当する管理･医療大学グループ、その名の通り国民健康保険に関することを担当する国民健康保険グループ、小児や後期高齢者、ひとり親世帯などの医療費を助成する制度に関することを担当する医療福祉の4つのグループに分かれています。

私は5日間のインターンシップで、それら4つのグループに1日ずつお世話になり、最終日には秘書業務の体験をさせていただきました。総務グループでは文書収受や発送業務、支払い業務などの事務作業の体験を中心に新採職員の方と一対一での意見交換を行い、管理・医療大学グループでは、現在茨城県が取り組んでいる保健所再編事業や災害医療についての説明をいただいたあと、出先機関の茨城県立医療大学・付属病院への視察をさせていただきました。国民健康保健グループでは国民健康保険制度について説明のあと、保健給付費の申請に関する書類の審査に携わりました。医療福祉グループでは後期高齢者医療制度や医療機関指導などの基礎的な医療福祉制度の知識を得るとともに、出先機関である後期高齢者広域連合へうかがいました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私はこのインターンシップを通して、主に3つのことを学ぶことができました。

1つ目は、県庁での具体的な業務内容や職場内の雰囲気を自分自身の目で知ることができたことです。就職先の志望として考えているからには自分で事前に情報収集を行うことは当然ですが、説明会やパンフレット、ホームページでは知りえないものを修得できたことは今後に繋がる大きな収穫のうちの1つになりました。また、派遣先で多くの職員の方とお話しする機会をいただき、職場や業務についてのみならず学生時代にどのような就職活動を行っていたのかといったお話をうかがい、今自分が何をするべきなのかに真摯に向き合い見つめ直す機縁となりました。

2つ目は、大学の講義では得られない知識や茨城県内の福祉行政の現状を把握できたことです。社会人としてのマナーや職員同士のコミュニケーションの重要さなど日々の学生生活では体験しえない経験、加えて茨城県の実状だけでなく、いま現在進行形で実施している福祉政策の内容の詳細を理解したことで茨城県への関心の向上に繋がりました。

3つ目は、今までに深く携わることがなかった分野に触れることで自分の関心の幅が広がったことです。以前私は主に地域活性化について興味があり、その他の分野への関心が低かったのですが、このインターンシップで福祉行政に携わってから福祉政策に関心を持ちはじめ、福祉に関連するニュースや文献を積極的に読むようになりました。

5日間という短い間でしたが、百聞は一見に如かずとはまさにこのことで、大変実りのある唯一無二の経験ができたインターンシップとなりました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップで実際に職場に足を踏み入れるという経験は、将来の自分を考えるうえで非常に貴重な判断材料であり、自分を見つめ直すきっかけにもなります。インターンシップに参加することに不安を抱き迷っている方もいるかもしれませんが、勇気を出して一歩踏み出し、ぜひインターンシップに参加してみてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、ご多忙の中インターンシップを受け入れて下さった茨城県庁保健福祉部厚生総務課の皆様に心より御礼申し上げます。5日間本当にありがとうございました。

魅力を知る機会としてのインターンシップ

茨城県立図書館

社会科学科　3年

葭　葉　万理子

1．参加の動機

私はもともと公務員になりたいと思っていました。しかし故郷の群馬に戻って町または県の職員になるのか、それともこのまま茨城に残って県の職員になるのか、どの行政規模で働きたいのか決めきれていませんでした。したがってこの県庁インターンシップに参加することで、県職員として働く感覚を知る機会になればと考えました。

この県庁のインターンシップはおよそ1週間のプログラムで募集している課が多く、また長期間実施されるため、初めは参加するかどうか躊躇いました。しかし、1 dayのインターンシップとは異なって、職場の雰囲気や業務内容をより詳しく知る機会であると思い、参加を決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

県立図書館は情報資料課、普及課、企画管理課、館内サービス課で役割が分かれており、6日間のインターンシップでは主に館内サービス課と普及課の業務補助に携わらせていただきました。館内サービス課は図書館資料の貸出等やレファレンス、普及課は読書の推進活動や県内の学校図書室をより良くするために司書の派遣活動などをしています。

館内サービス課では、まず初めに図書館資料の貸出・返却・予約などのカウンター業務について説明をいただき、初日から実際に総合カウンターに立ち、接客をしました。また返却された本を本棚に戻す資料配架や書架整理、PC・AVブースを貸し出す視聴覚カウンターの業務も行いました。

普及課では活動内容のお話をしていただきました。そのお話のなかで、応募した県内の小学生数名が図書館に一晩泊まれる「図書館に泊まろう」というイベントを催したとお聞きし、県立図書館は本来の図書館業務の他にも県全体の読書普及のために尽力していることを学びました。

その他にも新しく入荷した書籍に傷がつかないようにするためにカバーをつける資料装備や、相互貸借サービスによって県立図書館から県内の図書館へ搬送される書籍を仕分ける作業などを体験しました。どちらも扱う書籍数が数十冊にも上る場合があるため、スピードと正確さが求められる業務であると感じました。

3．インターンシップを通して修得したこと

6日間のインターンシップを通して、また職員の方々の働く姿を拝見して、第一に「各利用客に対する適切な応対」、第二に「迅速さと丁寧さ」が求められる職場であると思いました。図書館業務の一つにレファレンスという、調べたいことに関する資料の紹介、情報の提供、調査方法などについて、図書館職員がお手伝いをするサービスがあります。このレファレンスは蔵書を把握していないと困難であり、また各利用客に対して適切な情報提供をする必要があるため、「相手が求めていることに対して適切にアプローチをする」という能力が不可欠であることを、職員の方々の働く姿から学ぶことができました。また、県立図書館での貸出限度数は最大45点となっているため、大量の図書視聴覚資料を貸出カウンターで扱うことになります。加えて休日は利用者が増えるため、インターン期間中の土曜日曜でカウンター業務をしていると焦ってしまう場面がありました。そこである職員の方に、既存のマニュアルではわかりにくいため、独自に作成したマニュアルを手元に置いているということをお聞きしました。このように業務をただこなすだけでなく、その業務のなかで自ら工夫して効率性と正確性を高めることがサービスの質をより良くすることにつながることを学びました。

4．後輩へのアドバイス

図書館業務は一見繊細な作業が多いように見えますが、意外と力仕事もあるということを体感しました。インターンシップは外観と本来の業務内容のギャップを縮める作業でもあります。インターンに参加する前にインターネットなどで受入先を調べておくと、よりイメージと現実のギャップを実感し、学べることも多くなると思います。

ぜひ積極的に申し込んでみることをおすすめします！

県職員として
地域に貢献することの魅力

茨城県鹿行県民センター

法律経済学科　2年

男　庭　史　英

1．参加の動機

私は、将来公務員として働くことを希望しています。公務員といってもさまざまな組織があり、市町村・県・国では、それぞれ独自の行政サービスを行っています。私は、そのなかでも県職員として働くことが最も幅広い仕事に携わることができると考えます。しかし、実際に県職員の方々がどのような行政サービスを県民に行っているのか具体的に知りませんでした。そこで、県職員の方々がどのような業務を行っているのかを知り、県職員の仕事内容に対する漠然としたイメージを明確にするために、今回のインターンシップへの参加を志望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

今回受け入れていただいた茨城県鹿行県民センターは、茨城県の出先機関です。鹿行県民センターには、県民福祉課、環境・保安課、建築指導課、鹿行地区就職支援センターがあり、鹿行地区における県民への行政サービスを行っています。

私は、5日間のインターンシップのなかで3つの課と就職支援センターでの業務に携わらせてもらいました。県民福祉課では、神栖済生会病院の視察や青少年育成条例に基づく現地調査を行いました。環境・保安課では、茨城県鹿島下水道事務所での工場排水処理施設の視察や、AGC(株)鹿島工場での焼却施設の視察を行いました。建築指導課では、道路や建築した建物が建築基準法に適合しているかを現場に行き調査しました。就職支援センターでは、実際に求職者に対して行っている業務を体験させていただきました。また、業務以外に県職員の方々と話す機会を設けていただき、県職員の仕事内容や仕事のやりがいなどをうかがうことができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

就職する前にインターンシップで実際の業務に携われたことは、将来自分が就きたい仕事を知る上で大変良い経験になりました。私は、今回のインターンシップで県職員の仕事の大変さや仕事のやりがい・魅力について学ぶことができました。インターンシップでさまざまな仕事内容を経験させていただけたため、県職員の仕事は多岐にわたるものであり、同じ県職員にも関わらず、課や部署によって仕事内容が全く異なることを実感することができました。県職員は、3年から5年で配置換えが行われるため、仕事をする上で日々勉強が欠かせないと思いました。それと同時に、さまざまな仕事を経験できるということに魅力を感じることができました。

インターンシップに参加する以前は、県職員の仕事はデスクワークが多いものだと思っていました。しかし、実際は、多くの県民と関わりながら仕事をするということを知ることができたのも大きな収穫でした。県職員の方は、県民と接する際に、県民に寄り添いながら真摯に対応していました。このことから、さまざまな人と接するという点でコミュニケーション能力の大切さも学びました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップは、3年生で参加するから2年生のうちは参加しなくても大丈夫だと考える人もいるかもしれません。しかし、早い段階からインターンシップに参加することで、自分の就きたい職業について考える時間が増えると思います。また、考える時間が増えただけではなく、実際に残りの大学生活で何をするかという「行動」に移す時間も増え、より内容の濃い大学生活を送れるかもしれません。インターンシップでは、仕事以外にも多くのことを学ぶことができるため、参加を迷っている人は、ぜひ参加してみてください。

最後になりましたが、お忙しいなかインターンシップを受け入れて下さった茨城県鹿行県民センターの皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

体験してわかる仕事

那珂市役所　行財政改革推進室

法律経済学科　2年

中　野　貴　史

1．参加の動機

私は、大学に入るときは公務員になると決めていました。また、親からも公務員がいいといわれてきました。しかし、大学生活のなかで民間企業の方のお話を聞いているうちに、民間にも興味が出てきて、自分はどちらが適性で向いている仕事なのかを確かめたく思ったので参加を決めました。なぜ2年生から参加したかというと、3年生で参加するインターンシップはほとんどの企業が就職を強く意識したものになっています。私は民間も考えていたため、民間のインターンシップはその時期にいくのが就職にも有利だと思い、2年生の今、公務員である市役所のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私の派遣先の行財政改革推進室は他の部署と異なり、市長の直属の部署であり、監査委員事務局も兼ねています。主な業務内容は、各課が自部署で行っている事業に対して評価をまとめた事業評価シートを市民に公表するために修正すること、第三者から構成される監査委員による毎月の監査のための資料のまとめや、それぞれの事業に対して監査委員の提言を受けて、来年度予算を決定するための基礎的な資料を作成することなどがあります。

私は5日間のインターンシップに参加し、専門知識を持つ監査委員2名で毎月行われる監査に同席させていただきました。また、総務課の方の外回りに同行させていただき、那珂市の運動公園やふれあいセンターなどさまざまな施設を見学しました。さらに事業評価シートの文章の誤字などの修正を実際に行ったほか、一般市民複数名で行われる行財政改革懇談会の音声データの文字起こしも行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私はこのインターンシップを通して市役所の仕事の一面を知ることができました。私のイメージしていたただ黙々とパソコンに向かって作業するということはなく、職員の方同士でちょっとした時間に和気あいあいと会話しており、イメージと正反対の職場であり体験する重要性を感じました。また、職員の方もフレンドリーな方が多く、緊張している私によく話しかけていただいたためリラックスして参加できましたが、アルバイトとも異なる仕事環境の中での対応力の低さと不慣れを感じました。今後の就活に向けて改善していきたいと思います。

役所といえば法律や規則のとおりにすべての業務を行うイメージがありましたが、事例に合わせた対応ができることも多いというお話を聞き、それがやりがいにつながっていると感じました。しかし同時に、国から交付金の給付を受けている自治体は事実上国の言いなりになってしまうことが多く、国からの要請には従うしかないというお話も聞きました。地方自治体が国からの上意下達機関になってしまっている側面もあり、この問題はまだ根強いと感じました。

一旦始めた事業は利益を受けている市民が少数でもいるためなかなか廃止できずもうあまり手立てがないという状況であり、財政改革といっても事業を廃止するだけでできる単純な問題ではないことがわかり、自分がいかに甘い考えであったかよくわかりました。

4．後輩へのアドバイス

私はインターンシップに2年生で参加して非常によかったと思います。2年生のうちから参加することで多くの経験ができるので就職のミスマッチも減ると思いますし、自分の弱点の改善に多くの時間を使うことができます。また、体験することでイメージとは違う新たな発見があることや、自分が興味を持っている事柄を仕事とする方々の様子を間近で拝見することは、将来の自分を想像でき、いい刺激になります。最初のうちは失礼がないかなど不安になることもあると思いますが職員の方は優しく迎えて下さいます。ですから安心して、楽しんで自主的に学ぶ姿勢が大切だと思います。迷っている方は是非参加することをおすすめします。参加しないことの後悔はあっても参加して後悔することはないと思います。

将来を見つめなおすきっかけに

鉾田市役所　総務課　商工観光課　政策秘書課

法律経済学科　3年

重　富　優　希

1．参加の動機

私は、以前から公務員になりたいと漠然と考えていました。しかし、2年になり、そろそろ将来を真剣に考えなくてはいけない時期に差し掛かって以降、私は自分が「なぜ」公務員になりたいのかが分からなくなってしまいました。分からなくなったというより、今まではそのことについてあまり深く考えたことがなかったと言った方が正確かもしれません。今回インターンシップに参加しようと決意したのは、実際に職場を体験したり、現場で働いている方の話を伺ったりすることで、自分の将来の目標をより明確にしたいと考えたからです。

2．派遣先の概要と業務内容

今回私は、3日間は総務課で、残る2日間はそれぞれ商工観光課・政策秘書課で仕事を経験させていただきました。

1日目、3日目、4日目にお世話になった総務課は、人事係・行政係・統計調査係の3つに分かれており、職員の給与に関してや、議会の収集、条例・規則の設定・改廃などに携わっています。私は、Excelでの資料作成や書類整理、住宅・土地統計調査の調査員一時提出の受付事務の補助などをさせていただきました。

2日目にお世話になった商工観光課は、商工業の振興や観光、消費者行政などに携わる観光振興係と、消費者相談や消費者教育などに携わる商工労政係の2つに分かれています。最初に主な仕事内容を説明していただいた後、ふるさと納税の返礼品に関する打ち合わせに同行させていただきました。午後からは、市内観光施設の視察をさせていただきました。また、市のSNSに市の施設を紹介する記事を投稿しました。

5日目にお世話になった政策秘書課は、政策調整係・政策広聴係・情報政策係の3つに分かれており、私は市の情報発信や広報誌の作成に携わる情報政策係の仕事を経験させていただきました。公民館で開かれた行事への取材に同行させていただきました。高齢者の方が、歌や舞踊など自身の得意とする芸能を披露する催しであり、その様子を一眼レフカメラで撮影しました。また、その行事について、「広報ほこた」に掲載する記事を書かせていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今まで私は市役所の仕事に対して「事務仕事が多そう」という漠然としたイメージしか持っていませんでした。しかし、今回のインターンシップに参加させていただき、役所の仕事は自分が思っているよりも多岐にわたっていると感じました。私は今回3つの課を回らせていただきましたが、仕事内容は全く異なっていました。部署や課にもよりますが、必ずしも事務仕事ばかりではないことを知れたことは、新たな発見です。広報誌の作成など結構クリエイティブな仕事内容もあり、やってみたいと感じました。

社会に出るためには、あいさつや礼儀作法など、当たり前のことを当たり前にできるようにしておくことが重要だと考えます。社会に出る前に実際に働いている人と接する機会ができたことは、私に気づきを与えてくれました。とても良い経験になりました。これからの残りの大学生活は、今回学んだことを生かし、当たり前のことを当たり前にできるように意識していきたいです。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに行こうか迷っている人は多いと思います。インターンシップは、将来やりたいことがはっきり定まっている人はもちろんのことですが、私のように将来の目標が定まっていない人にもおすすめです。仕事のイメージを掴むことができるだけではなく、将来を考えるきっかけにもなります。私は、インターンシップに参加し、公務員を将来の仕事の選択肢の一つとして真剣に考えるようになりました。また、自分の至らない点を発見するきっかけにもなりました。迷っている人は、ぜひ、一歩踏み出してみてください。

最後になりましたが、ご多忙の中インターンシップを受け入れてくださった鉾田市役所の皆様に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

ひたちなか市役所の仕事を体験して

ひたちなか市役所　児童福祉課

法律経済学科　2年

谷　口　寧　那

1．参加の動機

私は、将来公務員として地元の方の暮らしをよりよくしていきたいという夢があります。しかし、実際に公務員の方がどのようなお仕事をされているかについて、明確にはわかっていませんでした。そこで、このインターンシップを通して公務員のお仕事を実際に体験し、明確なイメージをつかむために参加しました。また、私はいままで大きな不自由がない学習環境や生活環境の中で生活してきました。しかし、この恵まれた環境は当たり前でなく、すべての子どもたちがこの環境を享受できるわけではないという現実を知りました。そのため、公務員の立場からより多くの子どもたちの生活を支えたいと思い、児童福祉課を志望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

派遣先の児童福祉課は、家庭児童相談室、保育係、児童係の3つのグループで構成されています。家庭児童相談室は、主に子育てや家庭内のトラブルの相談、虐待防止の啓発、虐待通告への対応などをしています。保育係は、公立・認可保育所の入所管理・監査や保育所にかかわる補助金の給付などをしています。児童係は児童館や子育て支援センターの管理、子育てを応援する企画や資料の作成などをします。

1日目は、家庭児童相談室の方と家庭内にトラブルを抱えたお宅へ訪問し、相談している様子を見学させていただきました。また、トラブルを抱える家庭に対する対応を考える事例検討も行いました。2日目は、保育係やひたちなか市の保育所などについての講義を受けた後、保育料の納付書を配布するため各園を訪問させていただきました。3日目は、児童係についての講義を受けた後、子育てする母親を応援する「子育てサロン」の見学をしました。そこでは子どもを連れたお母さんと一緒に歌を歌ったり、「ふれあい遊び」をしたりしました。また、2つの児童館に訪問し、館長さんから児童館の概要や活動、現状などを教えていただきました。4日目は保育所に行き、実際に職場体験実習を行いました。園児と歌を歌ったり遊んだり、保育所の事務仕事のお手伝いをしたりしました。5日目は「子育て支援センターふぁみりこ」に行き、センターが企画する催し物の手伝いや、子どもたちへの絵本の読み聞かせなどをしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がこのインターンシップで学んだことは、公務員はコミュニケーション力がとても重要であるということです。特に市役所職員だと、住民の方や自分の担当部署に関連する施設の方と直接お話しする場面がたくさんあります。例えば、窓口相談でお年寄りの方がいらした時、職員の方は方言を交えながらお年寄りの方に寄り添うようにゆっくりと丁寧に説明をしていました。このことから、相手が自分に何を伝えたいのかを正確に読み取り、それに対しての回答を相手が一番理解しやすいように話す工夫が必要だと感じました。

また、相手の立場や感情、状況に配慮した柔軟な対応力も必要です。子育て相談担当職員の方が「子育てを始めたばかりのお母さんはいろいろなストレスや悩みを抱えているので、お母さんが言うことを否定したりせず共感してあげて、お母さんの気持ちを引き出せる雰囲気づくりを作るよう心掛けている。」とおっしゃっていました。相手の気持ちや状況に寄り添った細やかな配慮を日ごろからできるように、周りの人の気持ちに敏感に反応し考える力をつけたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

このインターンシップを体験する前と後では、私の公務員に対するイメージが大きく変わりました。以前は「公務員＝お堅い事務仕事」というイメージがありましたが、体験後は「フレキシブルなやりがいのある仕事」というイメージに変わり、よりいっそう公務員という職業に魅力を感じました。このように自分の固定観念を取り払うことができる良い体験になると思います。

また、実際の現場で職員の方とともに働くことで、自分は今後何を頑張ったらよいかを見つける良い機会になると考えます。それは勉強だけでなく、先に述べたコミュニケーション力についても同じです。現在の自分をレベルアップするきっかけとして、インターンシップに参加することを強くお勧めします。

公務員の仕事を体験して

笠間市役所　市長公室　企画政策課
現代社会学科　2年
大　井　真　央

1．参加の動機

私は就職の選択肢の1つとして公務員を考えています。また、大学生活の中で少しでも多くの自治体と関わり、地域や行政を知り、それぞれを比較したうえで、自分の進路を決定したいと考えています。そのため、2年生という比較的早い段階ではありますが、今回のインターンシップに参加することを決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

笠間市役所企画政策課は、企画政策グループ、統計グループ、企業誘致推進グループの3つに分かれています。企画政策グループは、各部署が行う政策の総括的な管理や、その他公共交通に関わる政策を主に担当しています。統計グループでは、5年に1度行われる国勢調査などの統計調査の実施と集計を担当しています。企業誘致推進グループでは、市内への企業の誘致や、市内の企業に対する支援を担当しています。

私は5日間のインターンシップ期間中に、企画政策グループと統計グループの業務を体験させていただきました。具体的には、交通難民を解決するために市民を対象に運行している「デマンドタクシー」の広報資料の作成、来年2月に開催されるイベントの庁内検討会の見学、昼間に需要のないスクールバスを活用したバスツアーの試行運転の立ち会い、今年実施される住宅土地統計調査に関する説明会の手伝いなど、様々な業務を体験しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、今回のインターンシップで主に2つのことを学びました。

1つ目は、市民の方々との関わり方です。インターンシップに参加する以前は、公務員というと事務的な業務が主で、市民の方々に対しては、規律に従った画一的な対応にとどまるというイメージがありました。しかし、実際の現場では、相手とする市民の方の立場や年齢層、その時々の状況に応じて、臨機応変な対応が求められていることを目の当たりにしました。特に、高齢化が進む今の時代、市役所職員に限らず、民間の企業でも高齢者の方々と直接関わる機会は増えているように思います。笠間市役所でも同様に、平日の昼間などは多くの高齢者が市役所を利用するため、職員の方々は、意識的に説明を丁寧にわかりやすくしたり、質問に対して親身に時間をかけて応じたりしていたことが大変印象的でした。

2つ目は、企画の立案方法です。大学の座学の授業だけではわからない、現場ならではの視点を知ることができました。例えば、企画や政策を立案する際、これまで私は、その企画や政策に取り入れるアイデアが如何に斬新で、新しく、時代に適合しているのかということが、問題を解決するために最も重要であると考えていました。しかし、実際の現場では、何よりも現実を正確に把握することに重点を置き、時間や労力を費やしているということがわかりました。綿密なデータをもとに問題の背景や因果関係などを細かく分析し、問題点を明確にすることが、的確且つ効果的な企画や政策を立案するために重要であることを学びました。

これら2つのことを学び、ただ単に知識を蓄えるだけではなく、現場に足を運び、声を聴くことの必要性を強く認識することができました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することは、今の自分自身を見直し、改善するためのとても良い機会だと思います。就職のために、自分の志望する分野の仕事を知ることはもちろんですが、今現在の大学の学びを深めることにも役立つと思います。また、インターンシップに参加した際には、何事もまずは挨拶や日常的なコミュニケーションが大切だと思いました。職員の方との何気ない会話から深い学びに広がることも多くあったので、昼休みや業務を任せられていない時間も全てが学びになると捉えて、大切にするべきだと思います。

最後になりますが、お忙しい中インターンシップを引き受けてくださった笠間市役所の皆様に、心より感謝申し上げます。5日間本当にありがとうございました。

市役所の仕事を経験して

笠間市役所　商工観光課

現代社会学科　2年

塙　　理　奈

1．参加の動機

私が今回のインターンシップに参加したのは、将来公務員として働くことを志望していますが実際にどのような仕事をしているのかわからなかったからです。そのため最初の一歩として市役所の業務について知りたいと思いインターンシップに応募しました。

また、観光について興味があり観光産業による町おこしや地域活性化に貢献したいという気持ちがあり、観光産業が盛んな笠間市の商工観光課での業務に興味を持ったのでこのインターンシップを希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

笠間市産業経済部商工観光課は、商工グループと観光戦略室の2つのグループで構成されています。商工グループでは、商業・工業振興を担当しており特に笠間市の工芸品である笠間焼のような地場産業振興、中心市街地活性化などに関する業務を担当しています。観光戦略室では、観光関係団体や観光協会と連携して行う事業や観光イベントや広告宣伝、観光物産開発、施設管理など観光振興に関する業務を担当しています。

私は5日間のインターンシップの中で、商工グループの業務として、乾杯条例に関する会議に同席させていただいたり、笠間の住民と市外、県外の方々との交流の場所として作られた『笠間ファン倶楽部』関連の業務を手伝わせていただいたりしました。観光戦略室の業務として、菊まつりに関する会議やイベント関係の業務に同席させていただいたり、資料作成、アンケート集計を行ったりしました。また地域交流センターやあたご天狗の森スカイロッジ、笠間陶芸大学校などの市内の観光施設等を見学させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

これまで市役所は事務職であり、デスクワークが多いという固定観念がありました。しかしインターンシップに参加して、課によっても異なりますが、そんなイメージが大きく変わりました。特に私がお世話になった商工観光課は、市民の役員さんや観光施設の担当者の方とかかわる機会が多くデスクワークばかりではなく外部に出て行ってアクティブに業務に取り組むということを知りました。そのため積極的にコミュニケーションをとることが必要であるし、様々な世代や業種の方とかかわるので広く知識を持つことも大切であると感じました。また、実際の現場となると予算の範囲内で市民のためになる有効な計画を立てなければなりません。利益のためではなく地域の人を思って業務に取り組んでいるところが行政と企業の違いであることを痛感しました。

インターンシップで会議や現場に行き授業だけでは知ることができない実際の業務を肌で感じることができ自分の興味のあることが明確に分かったように思います。現場の雰囲気を感じることができるのがインターンシップの魅力でした。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加するか迷っている人は参加してみるべきです。就職について改めて考え、意識も高くなります。また、2年生だからまだいいと思う人もいるかもしれませんが、早く始めることで様々な行政や地域を比較して選択することができます。実習中は職員の方といろいろな話をすることができましたが、反省点として、普段話さない世代の方とお話しする機会が多かったのでニュースや新聞などを見て最近起こっている話題を知っておくべきだと感じました。

インターンシップに参加した場合は挨拶と相手の目を見て話を聞く、相槌をとるなど社会人としての基本的なコミュニケーションはしっかりと行うべきです。笠間市役所の皆さんは挨拶をしっかりとかわしているところなどからとても雰囲気の良い職場でした。お忙しい中受け入れてくださり、丁寧で親切なご指導をしていただき商工観光課の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

受け手のことを考える

笠間市役所　広報戦略室　友部図書館

人間文化学科　2年

岩　田　　和

1．参加の動機

私がインターンシップに参加した理由は、仕事に対して無知な自分を変えたいと思ったからです。今年度の春に、2年生ではどのような科目が履修できるかを調べていた際、この科目の存在を知りました。その時、仕事について何も知らない自分に危機感を持ち、参加を決めました。派遣先は、大学に比較的近いことで親しみをもった笠間市役所を希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は、秘書課広報戦略室に3日間、友部図書館に2日間のインターンシップを行いました。秘書課広報戦略室は、市の情報発信、広報の作成などを担当しています。具体的な業務内容は、広報紙の作成や問い合わせへの対応などです。友部図書館は、図書館の企画運営や図書館利用者へのサービスを行っています。貸出数の上限がなく、笠間市の貸出数は同規模の自治体の図書館の中で6年連続日本一を誇っています。

秘書課広報戦略室では、広報紙である「広報かさまお知らせ版」の文章や表の作成、出来上がった広報紙をインターネット上にアップロードする作業、地域活性化に取り組む「笠間市地域おこし協力隊」の方へのインタビューなどを行いました。「広報かさまお知らせ版」は、月に3回作成されており、笠間市で開催されるイベントの情報や、住民への注意喚起といった内容を掲載しています。私は、掲載の依頼があった用件の情報を整理し、広報紙に掲載する文章や表をWordで作成し、担当の方に添削していただきました。「笠間市地域おこし協力隊」の方へのインタビューでは、笠間市外から笠間市に移住し、廃材を利用してカフェを開く取り組みをしている方のお話を伺いました。

友部図書館では、資料の分類についての説明を受け、返却された資料を分類番号に従って書架に戻す作業や、貸出や返却といった窓口業務、予約された本を書架から確保する作業などを行いました。友部図書館では、日本全国で使用されている図書分類法である「日本十進分類法」の他に、ジャンルがわかりやすいように、一部の資料にシールを貼っています。例としては、時代小説のお城のシール、乗り物の本の車のシールなどがあります。このように友部図書館では、利用する方のことを考えた仕組みを積極的に導入しています。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、インターンシップを行い、施設を利用する市民の方への細やかな気配りの大切さを学びました。広報戦略室での広報紙の作成では、読み手にわかりやすく情報を伝えるために、レイアウトの工夫や文字のフォントの使い分け、必要事項を過不足なく簡潔に記すといったことがなされていました。友部図書館では、書架の資料を分類番号で順番に並べるだけでなく、シールを貼り、利用する方が資料のジャンルを区別しやすくしていることを知りました。また、予約された本を書架から確保する際には、誤って別の方に届くことを防ぐため、氏名だけでなくカード番号を照合するなど、細心の注意が払われていました。

受け手のことを考えるという精神は、どの仕事にも日常生活にも通じるものであると思います。私は、このインターンシップによって、読み手にわかりやすい文章を書くことを心掛けるようになりました。

4．後輩へのアドバイス

私は、仕事について何もわからない状態でインターンシップの参加を決めました。その後、インターンシップのために書類を書いたり、派遣先のことを調べたりといった普段しないことを経験できました。また、利用する方に明るく対応することの重要性も学ぶことができました。インターンシップでは実際の業務内容の他にも、仕事に必要な精神についても学ぶことができます。ぜひこの機会を活用し、貴重な体験をしてみてはいかがでしょうか。

現場で体験することでの学び

結城市役所　企画政策課　統計係

社会科学科　3年

稲　葉　有　咲

1．参加の動機

私は将来、自分が生まれ育った地元の市役所で働きたいと考えています。しかし、市役所の業務内容について調べることはあっても、具体的なイメージを持つことができていませんでした。そこで、実際に働く現場で見聞きし、体験することを通して、市役所の業務内容を知り、少しでも理解を深めたいと考え、今回インターンシップに参加しました。また、より明確なイメージを持って約1年後の公務員試験を受けたいと思っていたことからも、今回の参加を決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私が5日間お世話になったのは、市長公室にある企画政策課であり、企画調整係、政策推進係、統計係に分けられています。企画調整係では、市総合計画の策定や進行管理、重要施策の企画立案及び総合調整、国際交流に関することを行い、政策推進係では、居住・定住を中心として地域振興施策の企画及び推進、都市交流の総合調整、統計係では、各統計調査の準備、統計資料の保存や編纂を行っています。

インターンシップでは主に統計係で、10月1日を期日として行われる「平成30年住宅・土地統計調査」のための準備をお手伝いさせていただきました。内容としては、調査員が使用する単位区設定図の作成、調査資料の仕分け、市内郵便局や文化会館などへのポスター掲示依頼、紙袋の補強などを行い、最終日には調査員説明会に出席させていただきました。また、「第五次結城市総合計画」や「小山地区定住自立圏共生ビジョン」、国際交流都市、友好・姉妹都市についてのお話をうかがい、市内情報センターにあるタイ・メ―サイ市との交流の軌跡パネル展示の見学や、タイの麻薬撲滅を狙いとした事業であるカフェ・ドイトンコーヒーの試飲もさせていただきました。さらに、実際に会議で使用する事業費関連の資料をExcelで作成・確認したり、総合計画及び重点プロジェクト一覧表の確認・修正をし、新規事業提案制度に関する職員の方からの提案事業も拝見させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

これまで、市役所の業務はデスクワークが中心であり、市民と関わる機会も少ないという印象がありました。しかし実際には、統計調査の準備の中でも、市所管の施設や市内郵便局などにポスター掲示を直接依頼したり、市民の方への説明会が実施されたりしました。これにより、自ら足を運んで行う業務や、関連施設の職員、市民と直接関わる業務は、自分が想像していたよりも多いという発見がありました。また、準備の段階から調査員説明会に出席させていただいた一連の経験を通して、調査を実行するには多くの事前準備が必要であり、且つ、統計調査員のように市民の協力が必要不可欠な事業があることを、新たに知ることができました。一部ではあるものの、市役所の業務を実際に見てお話をうかがい、体験をしながら職場の雰囲気を感じたことで、今まで抱いていた市役所の業務のイメージが大きく変わりました。

さらに、資料の作成・確認作業をお手伝いさせていただいた際には、一つ一つミスの無いように進めるのはもちろん、前年と比較してどの施策で予算が増えているのか、数ある施策の中で何に重点を置いて進めているのか、という点についても意識して考えるようにしました。そうしていくことで、結城市は「若者・女性の市外流出」を一つの大きな課題として、住みやすい地域環境づくりや、安心して子育て・教育ができる環境整備といった事業に取り組んでいることがわかりました。これらの体験を通して、行っている作業や扱っている内容に対する自分の意識の仕方次第で、吸収できるものがいくつも増えるのだと改めて実感することができました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することに対して、初めての経験ばかりで不安や緊張があるかと思います。しかし、実際に現場を見てお話をうかがい、業務を体験することで、その職場の業務内容について理解を深めることができ、新たな発見もたくさんできると思います。特に、業務内容がイメージしにくい場所への参加に迷っている場合は、ぜひ参加してみるべきだと思います。

また、参加するにあたって、その職場の情報を可能な限り事前に調べていくことをおすすめします。そうすることで、職員の方のお話を聞いたり、業務を体験したりする中で、さらに理解を深められる場面があるはずです。インターンシップでの経験や知識を自分のものにして、有意義な時間を過ごしてほしいと思います。

地方公務員の在り方

水戸市役所　経済産業部　商工課

現代社会学科　2年

伊　藤　大　地

1．参加の動機

私が水戸市役所のインターンシップを志望した理由は、約20年間住んでいる水戸市への就職を考えている中で、冊子や写真だけではわからない部分についてより深く学びたいと思ったからです。「持続可能な魁のまち」として、躍動感あるまちづくりを行っている水戸市役所でインターンシップをさせていただくことで、大学の授業などで学んでいる内容を肌で感じるとともに、行政職員として働く上での心構えや、市役所がどのようにして運営されているかなど、多くのことを学びたいと考え、水戸市役所のインターンシップを志望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所経済産業部商工課には、市街地活性係と商工労政係の2つの係があり、どちらも市政運営の根幹である商工業の発展に携わる業務を行っています。インターンシップ初日の午前中に商工課が行っている業務の説明をしていただき、午後から市街地活性係の業務を本格的に体験させていただきました。

業務体験の中心となったのは、9月30日に開催される、「第7回水戸まちなかフェスティバル」の準備です。Facebookに投稿する記事の作成や、実行委員会で配布するガイドブック、Tシャツの仕分けなどを2日目と3日目に行いました。そして4日目には、水戸まちなかフェスティバル実行委員会の会場設営や受付などのお手伝いをさせていただきました。実行委員会では、水戸市長や水戸市議会議長などの水戸市を代表する方々とお会いすることができ、とても貴重な体験となりました。5日目は、今まではデスクワークや屋内での作業が中心だったことに対して、外回りに同行しました。イベントを開催する上で必要な諸申請のために県や国の機関への訪問や、商工課が行っている創業支援政策の現場を見学させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は将来の進路の第一希望に地方公務員を考えていますが、その地方公務員について茫漠としたイメージしか持っていませんでした。しかし、今回のインターンシップで地方公務員の業務やその在り方を実際に目の当たりにしたことで、明確なイメージを掴むことができました。

今回私を受け入れてくださった商工課でいうと、これまでは漠然と「地域活性化を行っている」というイメージしか持っていませんでした。しかしインターンシップを通して、商工課が担当している各業務は別の業務に関連し、互いに影響し合って商工業の発展に繋がっており、それは市街地の活性化にも直接作用して市の発展に貢献しているのだと理解することができました。また、主に業務を体験させていただいた「水戸まちなかフェスティバル」は、商工課がその運営を担当していますが、商工課のみならず多くの課や水戸市以外の関係各機関、商工会議所や商店会などが関係しています。市役所の業務は担当部署内で完結するものではなく、その他の多くの部署や人々が連携して行っていました。

市役所はあくまで市政を陰から支える縁の下の力持ち。しかし、その仕事は水戸市民27万人の生活の礎となります。故に地方公務員とは大きな責任もありますが、とてもやり甲斐のある職業であるのだと感じました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに臨むにあたって私が後悔したことは、明確な目的意識を持てずに初日を迎えてしまったことです。初日に商工課についての説明を受けた時、内容の薄い質問をすることしかできず、それを今でも後悔しています。報告書を執筆している今になって、「あれを聞きたかった」、「もっとちゃんと見ていれば」と思うようなことがいくつもあります。したがって、今後インターンシップに行く皆様へ伝えたいのは、事前調査をしっかりとして明確な目的意識を持ってインターンシップに臨んで欲しい、ということです。そうすれば、インターンシップでより良い実りをえることができると思います。

末筆ではありますが、私をインターンシップ研修生として受け入れてくださった水戸市役所産業経済部商工課の皆様に感謝を申し上げ、報告書の締め括りとさせていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

人の「移動」を支える仕事

水戸市役所　市長公室　交通政策課

人文コミュニケーション学科　3年

根　津　遥　佳

1．参加の動機

私は将来、公務員として働くことを希望しています。しかし、実際どのように業務がなされているのか、具体的なイメージがつかめていませんでした。また、大学進学を機に水戸市で一人暮らしを始め、行政の働きのおかげで安心して生活できると実感することが多くなりました。特に、私は日ごろバスをよく利用するため、公共交通の大切さを肌で感じてきました。しかし、少子高齢化の進む現代社会において、公共交通をいかに健全に運営していくかが課題であるという考えもありました。そのため、インターンシップを通して公務員の仕事を知り、自治体の役割を考えるとともに、公共交通のあり方を見つめ直したいと思い、市長公室交通政策課のインターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市市長公室交通政策課では、公共交通の基本計画の策定、自転車利用のための環境整備、バリアフリー化推進のための施策の実施の主に3つの業務を行っています。

私が体験させていただいた業務は、平成30年6月に県央地域で実施したノーマイカーウィークの取り組み状況のデータ入力、平成30年度の乗合バス事業に関する調査のデータ入力、国田地区在住者が利用する1,000円タクシー国田号の利用状況のデータ入力と、Excelを用いたものがほとんどでした。また、茨城空港の利用促進のため、茨城空港の平成30年9月の時刻表を送付先ごとに封筒に入れる作業も行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップで学んだことは数多くありますが、特に印象深かったことはデータ入力後の見直し作業の大切さです。入力したデータを再度確認することで正確性を高め、資料としてより有用性のあるものにすることができると実感しました。データ入力は地道な作業であり、扱うデータの量も多く、長時間パソコンに向かい集中力を維持することの大変さと重要さを知ることができました。そして、利用状況を数値化することで事業の現状や課題が明らかになり、こうした仕事の積み重ねの上に市民の安全な生活が成り立っていると思いました。

また、コミュニケーションの大切さも実感しました。実習中、仕事の進行状況を報告したり、疑問点についてうかがったりする機会が多くありました。体験させていただいた仕事も市役所の大切な業務の1つなので、気になった点、不明な点があった場合などに報告することは重要であり、どのように話せば的確に伝わるかを工夫していくことも大切だと思いました。

実習をさせていただいた交通政策課では、公共交通を考える上で他の自治体の取り組みも参考にしており、現地に視察にも行くとうかがいました。公共交通を利用しやすい環境を整えるためにも、あらゆる地域の取り組みを知り、日ごろから情報収集に努めることも大切であると思いました。市役所の仕事は市民の目に映らない部分も多いですが、職員の方々が市民のため高い意識を持って働いていらっしゃる姿が印象深く、その仕事の一つ一つが市民の快適な移動の実現につながっていると感じました。そして、私も地域のために働きたいという思いがより強くなり、公務員試験に向けて意欲を高めることができました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加すると、実際の仕事の現場を体感することができ、職場の雰囲気を知ることができます。そして、インターンシップで得た経験は、自分の将来を考える上できっと役に立つと思います。また、インターンシップに参加する時期が早いほど、これらを早く経験でき、就職への意識を高められると思います。私は3年生になってからインターンシップに参加しましたが、2年生でも参加すれば良かったと後悔しています。インターンシップは学年を問わず、積極的に挑戦する価値のあるものであると、今回の経験から感じました。

最後に、お忙しい中インターンシップを受け入れてくださった水戸市役所の皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

多様な市役所の業務

日立市役所　総務部　市民課

法律経済学科　2年

古　山　愛　梨

1．参加の動機

私は将来、公務員として働きたいと考えており、特に地元の市役所で働くことを希望しています。しかし、市役所に対して事務的な仕事をしているという認識しかなく、具体的な業務内容について詳しく知りませんでした。そこで、市役所の仕事を実際に体験すると同時に、職員の方々にお話を聞きたいと思い、今回のインターンシップに参加することを決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私がお世話になった総務部市民課は、市役所の課の中でも、特に市民の方々と直接触れあう機会が多い課です。市民課は、各種証明書の発行や戸籍に関することの手続きをする窓口係、予算の制定や書類の作成などの事務作業を行う管理係に分かれています。今回のインターンシップでは、両方の係に関連する業務を体験させていただきました。

具体的な業務内容は、各種申請書の記載補助、総合案内所にて市民の方々の質問にお答えすること、結婚届を提出する際にお渡しする新様式の結婚証明書の作成です。7日目には、結婚証明書作成に用いる写真を撮影するために市内を公用車で回りました。その他には、日立市に転入された方や新生児誕生時にお渡しする書類一式や、日立市から転出される方向けの書類の英訳版の作成、市の職員の方々が自身の仕事について講義をしてくださる市政セミナー、他のインターンシップ生とお互いの業務内容や考えを話し合う報告会への参加などを体験しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私が今回のインターンシップで学んだことは、2つあります。

1つ目は、市役所の業務の多様性です。参加前は市役所の業務は事務作業ばかりだと考えていましたが、実際には庁舎の外に出て活動する課も多く、報告会では他のインターンシップ生から他の課の業務内容を聞きその違いに驚きました。職員の方にも話をうかがうと、転課するたびに業務内容が大きく異なるので、慣れるまでに時間がかかるそうです。これはインターンシップに参加しなければ分からず、実際に働くときの心構えを持つことができました。

2つ目は、真摯に接する心です。市民課は窓口業務がメインなので、市民の方々と直接触れ合う機会が多い課です。市役所に訪れる方の中には、自分が何をすればいいのか、どこに行けばいいのかをあまり理解されていない方や、持ってくるべき書類、証明書などを忘れて手続きができないことを不満に感じる方がいらっしゃいました。その度に、職員の方は分かりやすいよう丁寧に手続きについて説明をしたり、フロアの案内などの相談に乗っていました。私がフロアに立ったときにも、印鑑証明に必要な印鑑証明書を忘れてしまった方がいらっしゃり、最初は納得してくれませんでしたが、職員の方が代わりに丁寧に説明してくださり、助けられました。また、市民課は入り口の近くにあるため、時には分野が違うことを聞かれることもありましたが、そのときも乱雑に他の課に行くよう突き放すのではなく丁寧に応対されており、その姿から、市民の方々のために働く奉仕の精神、真摯な心を学びました。

4．後輩へのアドバイス

参加する前は不安だらけですが、実際に普段目にすることのない職場で体験することでたくさんの発見があり、自分にその職業が合っているかなども知ることができ、とても刺激的な体験ができると思います。

受け入れ先の方は、ささいなことでも構わないのでそのままにせず職員に聞いてください、と言ってくださり、質問をすると丁寧に答えてくれました。積極性を持ち、市民の方とのコミュニケーションを大切にするということを通して、業務内容に対する知識以外に、自分自身の未熟さなど改善するきっかけも見つけることができました。自分が希望する職種の業務内容や雰囲気などを肌で感じることができ、将来の姿を想像できる有意義な機会ですので、2年生からの参加をお勧めします。悩んでいる方は、ぜひ迷わずに思い切って参加してみてください。

最後になりましたが、お忙しい中受け入れてくださった日立市役所の皆さま、ご指導と貴重な体験をありがとうございました。

実際に体験してわかること

日立市役所　保健福祉部　介護保険課・高齢福祉課

社会科学科　3年

石　侑　璃　佳

1．参加の動機

私は将来、公務員として働くことを志望しています。進路について考えるなかで実際の業務を体験し、公務員として働くことのイメージを明確にしたいと思いました。そこで、今回のインターンシップに参加し、具体的な業務と職場の雰囲気を知り、社会で働くためにはどのような力を身につける必要があるかを学びたいと思い、参加を決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は日立市役所保健福祉部の高齢福祉課と介護保険課にお世話になりました。高齢福祉課では高齢者の居場所作りや敬老会に関わるのもなど高齢者の生活に関わる業務を担っています。介護保険課は介護認定係と介護保険係に分かれており、介護を必要とされる人たちに関する業務を担っています。

高齢福祉課では敬老会準備事務、高齢者の居場所として利用されているカフェでの勤務体験、プロポーザル(企業による企画の提案)見学や緊急通報装置を設置している高齢者宅への訪問に同行させていただきました。その他、会議の会場準備・見学、配布資料の封筒詰めなども体験しました。介護保険課では4件の介護施設を見学し、その中の1件の施設では運営推進会議にも参加させていただきました。また、介護認定調査に同行し、その後の介護認定審査会に同席しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、今までイメージしていたものとは違う公務員の仕事を学ぶことができました。窓口で市民の方々の対応をするだけでなく、実際に家に出向き市民の皆さんに会う機会があると知り、市民の生活との関わりの深さを改めて感じました。また、課ごとに業務内容は大きく異なり、幅広い仕事に関われるやりがいも感じました。

実際に働いている現場を見ないとわからなかった職場の雰囲気や公務員として働く意識と責任を感じることができ、職場の皆様からも多くのアドバイスをいただくことができました。そのなかでも、市民の皆さんに安心してもらえたり納得してもらったりするためには説明する能力やその根拠をしっかりと考えて行動する必要があると教えていただいたことが印象に残っています。受け身でいるだけではなく、自らの考えを発信することや市民の方々と関わるうえでコミュニケーション能力の重要性を学びました。

インターンシップの経験により、市役所の仕事を今までより深い視点で見ることができ、社会人として働くために自分自身の足りてない部分を見つけられたと思います。この経験から学んだことをこれからの活動に活かしていきたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

私は今回のインターンシップに参加して良かったと実感しています。市役所職員としての業務だけでなく、業務内容以外の知識も多く得ることができました。インターンシップは将来の進路を決めるための貴重な経験になり、本当に自分のやりたい仕事を見つめ直す機会となります。職員の皆様から意見をいただけたり、実習生同士で進路状況を話し合えたりするのでこれからの就職活動に向けて良い刺激になると思います。

インターンシップに参加することに不安もあると思いますが目的を持って参加することで成長することができ、自信となります。インターンシップの参加を迷っている人は積極的に参加してほしいと思います。また、参加する際は笑顔で挨拶することを忘れず、大切にしてください。

最後になりましたが、お忙しい中インターンシップを受け入れて下さった日立市役所の皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

“市民”から抜けて 地方公務員の仕事を知る

大洗町役場　学校教育課　まちづくり推進課　等

社会科学科　3年

大　貫　ひかる

1．参加の動機

私は、都会へ流出する人々が多い中、生まれ育った地域で何か自分にできることはないだろうかと考え、将来の進路の一つとして、地方公務員を希望しています。

しかし、実際の公務員がどのような仕事を行っているのか、漠然としたイメージしか持っていなかったため、インターンシップでは地方公務員の業務内容と職場の雰囲気を知りたいと思い、参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

大洗町役場のインターンシップでは日替わりで計6つの課を体験しました。1日目は、学校教育課です。学校教育や保健、給食に関することなど町立幼稚園・小中学校の学校全般のことを扱っています。今回は、事務作業と学校の校舎や建設中の体育館を見学しました。2日目は、まちづくり推進課です。地域振興に関わることを扱っており、今回は水戸市・大洗町・鉾田市などをつなぐ公共交通を存続させるため、「通学から通勤に」を目標に小学生に鉄道に触れてもらうイベント運営の手伝いをしました。3日目は、午前中に町政の広報公聴に関する事を行う町長公室にて、広報誌の校正と町内放送を体験しました。午後は議会事務全般を行う議会事務局で町議会の議事録の確認作業を行いました。4日目は、商工観光課です。観光イベント以外にも町の中小企業を支援する事業や就労に関する労働行政事業を行っています。今回は、イベント時に配布するパンフレットをクリアファイルに入れたあと、袋に詰める作業を行いました。最終日は、総務課です。役場職員の給与や保険、相談など職員を陰ながら支える業務を行っています。今回は、標準報酬月額(4− 6月の給与の平均)を見直し、そこから保険料を割り出し、Excelにデータを入力する作業を行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私が今回のインターンシップを通して修得したことは、2つあります。1つ目は、インターンシップ前に知りたかったことでもある、業務内容と職場の雰囲気です。私が関わることができたのは本来の業務の一部だとは思いますが、とても多くの業務を知ることができ、同時にどの作業にも多くの工夫と時間がかかっていることもわかりました。例えば、学校教育課で行った、学校行事に合わせた作業です。今回は、来年の小学校新1年生の健康診断の際に首から下げる番号札の作成をしました。ただ番号札を作るのではなく、子供たちが飽きないように男女兼用の動物をモチーフにし、パーツがはがれないような工夫をしていました。また、休憩中に職員同士でコミュニケーションをとる姿をみて、公務員の黙々と作業をするという私のイメージとは異なる印象を持ちました。上司の方との距離の近さなどから敬意を払いつつも、気軽に語り合う良い雰囲気を感じました。

2つ目は、実際に働いている方々から業務以外の情報をうかがうことができたことです。例えば、町役場職員になる心構えです。小さな町故に起こる出来事や他機関で支援を受けることのできなかった人々が最後に来る場であることから途中で投げ出さないことはもちろん、丁寧な対応が必要であることを知りました。このように、インターンシップに参加しなければわからなかった情報を得ることができました。その他に、うかがうことのできなかった課についても職員の方々から教えていただいたことや他のインターンシップ生との情報交換で、多くの情報を入手することができました。

“市民”の立場ではわからなかったことを体験・見聞きして、地方公務員の仕事を知ることができました。

4．後輩へのアドバイス

私は、インターンシップは業務内容・雰囲気を知ると同時に、自分を見つめ直す機会でもあると思いました。履歴書を書くために「なぜこの職業が良いのか」と考えることや、インターンシップ中にアルバイト、サークル活動など学生生活について質問されることも多いため、今までの自分の経験や考えをあらかじめまとめておくと相手に自分の考えをはっきり伝えることができ、よりコミュニケーションがとりやすくなり、業務以外の話もうかがうことができると思います。

最後に、この場を借りて大洗町役場の皆様に御礼申し上げます。お忙しい中、インターンシップを受入れ、丁寧にご指導くださり、本当にありがとうございました。

大田原市役所で学んだこと

大田原市役所　総務課　健康政策課　文化振興課など

人間文化学科　2年

齋　藤　燎　亮

1．参加の動機

私が大田原市役所へのインターンシップに参加した動機は、公務員とはどのような仕事なのかを実際に体験し、そのイメージを明確にし、将来の就職活動に活かそうと考えたからです。私は公務員として、地元の大田原市役所で働くことを希望しております。しかし、市役所の公務員が実際にどのような仕事をおこなっているのか漠然としており、事務的なイメージしかもっておりませんでした。さらに2年生に進級したことで、将来について考えなければならない時期にも差し掛かっていました。そこで市役所のインターンシップに参加し、市役所の実際の業務を体験することで、私自身の公務員の仕事に対するイメージと現実を明確化しようと思い、参加を決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は8月20日から24日の5日間大田原市役所のインターンシップに参加させていただきましたが、日によってそれぞれ違う課に派遣されました。

初日は総務課から大田原市についての概要説明後、健康政策課に派遣されました。その日の主な業務は市主催の健康セミナーの誘導や片付けといった裏方の仕事を行いました。2日目は文化振興課に派遣されました。午前中は文化財調査業務を行いました。内容は中心市街地における古い木造、石造りの建造物の件数把握、地図にそれらをマークする作業でした。午後からは埋蔵文化財保護業務を行いました。内容は遺物散布状況の確認作業でした。3日目はスポーツ振興課に派遣されました。主な作業内容は栃木県立県北体育館の物品整理を行いました。また、市職員の方による施設の案内、説明をさしてもらいました。4日目は商工観光課に派遣されました。「ものづくり見学バスツアー」に市職員と同行させていただき、エバラ食品工業（株）栃木工場、（株）本田技術研究所HRD Sakuraの施設見学を行いました。5日目は農政課に派遣されました。その日の作業内容は与一の郷夏祭り準備作業及び大田原市が所有する施設の見学を行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がこのインターンシップで修得したことは大きく分けて2つあります。まず1つは大田原市及び大田原市役所についての知見を広めることができたということです。私は大田原市に18年間住んでいたにもかかわらず、新しく知ることが多くありました。例えば、初日の市の概要説明の時のことです。大田原市は第二次産業の占める割合が他の地域よりも多く、「ものづくりのまち」であることを初めて知りました。また2日目の文化振興課での業務にて、作業を行う前に「栃木県埋蔵文化財地図」という、遺物が埋まっている可能性がある区域が掲載されているものを見させていただきました。大田原市にそういった区域が400以上存在していることが分かり、驚きを隠せませんでした。

もう1つは市職員の仕事についてです。インターンシップに参加する前の私の市役所のイメージはデスクワーク中心の業務を行っているものと思っておりました。しかし、派遣された部署を見る限りでは決してそのようなイメージではありませんでした。その一例として、初日、5日目のイベント設営の補助、2日目の中心市街地の散策があります。実際に現地に出向いて業務を行うことが多いような印象がありました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することで、その派遣先がどのような仕事を行っているのかを直接感じ取ることができます。実際に私も参加したことで市役所に対するイメージが大きく変化しました。今回2年生で参加しましたが、間違いなく将来を考える上で大きな判断材料になりました。なりたい職業が決まっていない、またインターンシップに行くかどうか迷っているのであれば、ぜひとも思って参加してください。必ず得られるものがあります。

最後になりましたが、お忙しい中インターンシップを受け入れてくださった大田原市役所の皆様に心より感謝申しあげます。5日間本当にありがとうございました。

現場で学ぶ

銚子市役所　社会教育課　文化財・ジオパーク室

社会科学科　3年

髙　橋　絵梨子

1．参加の動機

私は将来、公務員として働きたいと考えています。しかし、公務員の業務について漠然としたイメージしか持っておらず、その業務内容についてよく知らないまま、来年の試験を受けることに不安を感じていました。そこで今回、実際の現場を経験することで、公務員の業務についての理解を深めたいと考え、インターンシップに参加しました。また今回、派遣先を銚子市役所の社会教育課文化財・ジオパーク室とした理由は、自身の地元であること、ジオパークはほかの自治体にはなかなかないため、銚子市役所独自の業務について知ることができると思ったからです。

2．派遣先の概要と業務内容

銚子ジオパークは、2012年に日本ジオパークに認定されました。派遣先の社会教育課文化財･ジオパーク室は、銚子ジオパークを観光や教育といった分野に活かした活動を行う拠点となっている銚子ジオパーク推進協議会の事務局です。

今回の5日間のインターンシップでは、様々な業務を経験させていただきました。1日目は、銚子ジオパークミュージアムの入口看板、銚子市の位置図の作成を行いました。2日目は、銚子ジオパークの観光案内施設である銚子ジオパークビジターセンターにて、ボランティアガイドの補助業務を行いました。3日目は、午前中にアンケートの集計の業務を行い、午後には実際に銚子ジオパークをめぐらせていただきました。さらに、銚子ジオパークビジターセンターについて紹介するブログの作成も行いました。4日目は、午前中に新任教員研修の一環として、銚子ジオパークについてのガイドがあり、その補助業務を行いました。午後には、貝の仕分け作業を行いました。5日目は、銚子ジオパークミュージアムに展示されている岩石を磨く業務を行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

公務員の業務というと、デスクワークが中心で、黙々と仕事を行っているイメージを強く持っていました。しかし、今回インターンシップに参加することで、デスクワーク以外にも、ジオパークのガイドや、草刈り、現地調査といった業務も行っており、公務員の業務内容は幅広いということを知ることができました。

また、銚子ジオパークでは、ジオパークの発展のために企業や市民の方といった様々な立場の人と協働しています。しかし、一人ひとりの考え方は異なることから、それをまとめ、調整していくのに文化財・ジオパーク室は重要な役割を担っていると感じるとともに、大変さを知ることができました。このことは、実際に現場を見たり、職員の方のお話しをうかがうことができたからこそ発見できたと思うので、今回インターンシップに参加してよかったです。

そして、業務の体験を通して、相手にジオパークの魅力を知ってもらうためには、詳細にそのことについて説明するのではなく、相手がどのような情報を欲しているのかを察し、また、わかりやすく説明することが重要であることを学びました。今後、そのようなスキルを身に付けていきたいと思いました。

その他にも、業務の中で何度かパソコンを使用することがあり、操作方法がわからず、何度も職員の方に聞いてしまう場面がありました。ある程度のPCスキルは、仕事をする上で必要となってくるので、時間的に余裕がある学生の内に学んでいきたいです。

4．後輩へのアドバイス

インターシップに参加する前に、派遣先についての情報を可能な限りで調べておくこと、また、どのような目的で参加するのかを考えておくことが必要だと思います。そうすることで、インターシップからより多くのことを学ぶことができると思います。インターンシップでは、業務についての理解を深められるとともに、普段の生活ではなかなか関わることのできない職員の方と話すことができ、会話の中でも学ぶべき点が多くあります。また、業務を行っていく中で自分が不得意とする点も見つけることができ、今後の生活を見直していくきっかけにもなります。インターンシップに参加するか迷っている方は、ぜひ参加することをお勧めします。

想像を確かめられる機会

高山市役所　海外戦略部　福祉課　総務課

法律経済学科　2年

古　守　妃　菜

1．参加の動機

私は将来公務員になりたいと考えています。公務員といっても様々ですが、今回は市役所に興味を持ちました。しかし市役所の中の業務といっても多岐にわたるためいまいちどのようなことを行っているのか想像がつきにくく、市民のために働くという漠然としたイメージしか持っていませんでした。私はゼミで生活保護制度についての本を読み、福祉について興味を持ちました。市民と直接深くかかわる福祉についてより深く知りたいという思いをきっかけにインターンシップへの参加を決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は3つの課へ派遣されました。1、2日目は海外戦略部、3、4日目は福祉課、5日目は総務課でした。

1つめの海外戦略部は観光課とは別に配置されてあり、海外からの観光客が多い高山市と他国との交流を受け持ち、外国人を対象にPR活動、誘致を行っている課です。多言語対応のホームページも市は作成していますが、より外国人の方に見どころを理解していただくために最新技術のVRを使った動画撮影に同行させていただきました。

2つめの福祉課は生活保護、障がい者、子育てについて扱っています。私は生活保護と障がい者の制度についての説明を受け、実際に生活保護の方のケースファイルをいくつか読ませていただきました。また、実際の保護費の送金の宛名・金額確認の事務作業も体験させていただきました。そのほかにも障がい者の方々の生活施設である「山ゆり園」を訪問し、施設を見学させていただきました。

3つめの総務課では書類のファイリング、後日行われた昇任試験の準備をさせていただきました。総務課は先の2か所とは違い、市役所の職員の方々のために動いているという印象を受けました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップでは3つの部署に派遣されたため、市役所内外のたくさんの方々とかかわる機会が非常に多くありました。職員の方に疑問に思ったことをそのままにせず聞くことや、外部の方でも市役所の職務内容に関係なくても知りたいことは何でも教えてもらい吸収したいという気持ちのもとでインターンシップを行いました。そのため積極的にコミュニケーションをとる能力が以前よりついたと考えます。

また、日程の都合上同じ部署にいたわけではないので、幅広い年代の方々と新しい出会いがたくさんあり、その度に自分を知ってもらい相手を知ることが活動を円滑に行うために必要なのではないかと思いました。また、市役所も課によって特色があります。やはり窓口業務もある福祉課では実際に市民の方が相談に来られたりとコミュニケーションが非常に大切です。コミュニケーションの取り方ひとつで相手からの印象も変わりますし、相手の性格、状況に合わせた会話の仕方も大事だなと学びました。様々な対応ができるように私も人との関わり方をより学んでいきたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

私はインターンシップに参加すると決めた自分の判断は正解だったと思います。始まる前は不安ばかりでしたが、やはり人から聞いたり自分で調べたりするだけでは得られない、感じられない現場の様子を体感できました。職員の方の苦労ややりがいの声を聞くことができ、自分の将来選択の判断基準にもできます。

そして何よりインターンシップに参加するという積極性が培われることが良いことだと思います。受け身でいても何も始まらないし、得るものも少なくなると思います。迷っているのだったら参加できる時間があるときに参加した方がいいです。私はまた来年違う職種の公務員関連のインターンシップに参加しようと考えています。

“多様性”から得た気づき

JICA筑波　研修業務・地域参加協力課
現代社会学科　2年
幸　田　真　帆

1．参加の動機

大学での学修で、「国際開発学」という分野に関心を持ち、将来は自分も「国際開発」や「国際協力」にかかわる職に就きたいという漠然とした希望がありました。しかし、多岐に及ぶ国際開発の職種から、自分は将来一社会人として、どのように国際開発に携わるべきかという具体的なビジョンが描けずにいました。そこで、実際に日本の国内拠点で国際協力を行っているJICA筑波でインターンシップを実施し、その業務の一端を体験したいと考えました。さらには現場という視点から国際協力の意義を自分なりに考えなおし、国際開発分野でのキャリアを考えるヒントを得たいと思い、インターンシップ参加を決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

JICA（独立行政法人国際協力機構）は、国内に15の拠点を持ち、日本政府のODA（政府開発援助）のうち二国間援助を実施する機関です。世界150以上の国と地域で事業を展開しています（JICA筑波PROFILE，2018）。JICA筑波は、農業分野の国際協力の実施機関として茨城県と栃木県を所管し、途上国への技術協力事業である研修員の受入事業や、ボランティア派遣のほか、JICAの事業や国際協力について一般の人に広く知ってもらうための活動を行っています。

私は今回、約10日間のインターンシップを実施し、主に3つの業務を体験しました。

1つ目は、高校生の施設訪問受け入れ時のワークショップの運営補助です。JICA筑波では、市民参加協力事業の一環として施設訪問の受け入れを行っており、この時も、施設訪問の高校生を対象に、貿易における格差や貿易の仕組みを疑似体験できる「世界貿易ゲーム」を行いました。2つ目に、研修を修了するSHEP（市場志向型農業振興）コースのparticipants（研修員）のポスターセッションを聴講し、その後Facebook記事を作成しました。3つ目は、5日間にわたる大学生・大学院生向けの国際協力理解講座への参加と運営補助です。具体的には、講座初日のブレインストーミングと、2日目以降の講座冒頭に行われた「前日振り返り」の内容を、他のインターン生とともに立案し、進行しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通し、まず実感したのは、自分がさまざまな国籍の人と語り合うことが好きであるということです。JICA筑波は世界中から研修生を受け入れていますが、宿舎に滞在した私は特に、研修員と食事や聖書勉強会をともにする機会がありました。日本語の全く通じない相手との会話は容易ではありませんでしたが、英語を用いてやりとりすることは本当に楽しかったです。また、個人の意見を求められることの多い研修員との対話を通して、各国の文化や開発について、大学の専攻としているものの、自分の知識がいかに不足しているかを痛感しました。

また業務中のコミュニケーションから傾聴姿勢の大切さを学びました。正確に情報を受け取ることはもちろん、どんな話にも熱心に耳を傾けることで相手の言葉の含意をくみ取ることができ、思いやりを持って仕事を行えると感じました。

4．後輩へのアドバイス

JICAの活動や国際協力、ないしは国際開発分野の職業に関心が高い方には、キャリア形成の第一歩として、JICA筑波でのインターンシップの実施、またはJICA主催の国際協力理解講座への参加をお勧めします。あるいは、短期間でも大学が提示するプログラムや一般企業の実施するスタディツアーの機会を利用して、国内・海外を問わず現地に赴く機会を設けることをお勧めします。「国際開発」という分野が包括する内容は広く、国際協力の形態は多様であると考えるからです。現場に出てみることで机上の学修との齟齬や自分の新たな問題意識に気づくことができます。

また、実際に気になる職場で働く人や、そこにかかわる人々と相対し直接質問を投げかけられる機会はそう多くはありません。インターンシップの機会を実り多いものにするために、自分なりの工夫をしてみてください。例えば、1日の出来事や感じたこと、反省点、質問したい事柄などをノートやワードに言語化することは有効だと思います。

ぜひ勇気を持って、一歩を踏み出してみてください。

国際協力の経験から学ぶコミュニケーション

日本国際協力センター（JICE）
現代社会学科　2年
郡　山　　葵

1．参加の動機

今回私は、2つの理由からJICEのインターンシップに参加することを決めました。1つは、国際協力に関わる人々の考え方や、前職などのバックグラウンドについて知りたいと思ったからです。国際協力の分野では、個々のプロジェクトベースで職員が就くことが多いので、実際に現場で働く方々は、どのような志で、どのような前職やスキルを持ち、国際協力に関わることとなったのか、自分自身のキャリアの参考のためにも、興味がありました。もう1つは、現在、私自身が疑問を持っている日本の国際協力のあり方について、実際に活動をしている立場から考えたいと思っていたからです。大学での講義や資料による学習を通じて、日本の国際協力の貢献度や問題点を学んではいます。しかし、実際に問題に直面した時、「どのように対処をするのか」、「理論通りの対処は可能なのか」などはその仕事に直接携わった人しか理解できないのではないかと考えました。以上の2点が、JICEのインターンシップに参加しようと決めた動機です。

2．派遣先の概要と業務内容

日本国際協力センター（JICE）は、人材育成事業として、主に「留学生受入支援事業」、「国際交流」、「国際研修」、「多文化共生」の4つの事業を行っています。私が参加させていただいた留学生支援事業は、JICAや外国政府、大学からの委託を受け、海外の若手行政官が留学生として日本の大学院で学ぶサポートを行う事業です。この事業のなかでも、JDS事業はアジアの国々を対象に留学生の受入を行っています。JDS事業のうち、留学生が入国した直後に参加する来日プログラムの運営と、モンゴル大使館への表敬訪問の引率を担当させていただきました。来日プログラムでは、異文化コミュニケーションや日本の経済についてのセミナーの運営や、セミナーの通訳業務を体験することができました。また、今回のインターンシップ中は、実際の業務だけでなく、JICE職員の方々からお話を聞く機会を設けていただきました。私が参加した留学生受入支援事業部だけで4名、アフガニスタンを対象とする「アフガニスタン未来への架け橋・中核人材育成プロジェクト（PEACE）」や国際交流部の方からもお話を聞くことができ、業務や前職、国際協力への考え方について学びました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して、国際協力事業の体験や、海外の方々と一緒に行動をすることで、英語を使って仕事をし、国際協力に携わる実感を得るとともに、この業種で当たり前に必要とされる能力が何かを知りました。今回の業務では、ネイティブスピーカーではない人々との英語でのコミュニケーションがほとんどだったので、話す際にも聞く際にも、伝え方に気をつけたり、確認の作業を必ず行ってお互いの意思疎通に漏れが無いように注意をしました。英語学習ではネイティブの方とのコミュニケーションがほとんどだったので、貴重な経験であり、普段より意思疎通を意識したコミュニケーション感覚を身に着けることができました。また、会場の運営を通して、より広く周りを見て、その場で何が必要か気づき、判断する力も身に着けることができました。1日の目標や気づきを意識して業務を行うことや、毎日担当の方と目標の達成度や気づきを共有し、フィードバックをいただくことで、自分に何が見えていたか、足りなかったことは何か、気づき、次の行動に活かすことができるようになっていったと思います。学生のインターンシップということで、様々なことに挑戦させていただけたことも、自分の自信につながったと思います。英語自体に特に自信があったわけではありませんが、通訳の機会をいただいたことで、英語力や伝える力に自信がつき、挑戦することの大切さに気づきました。

4．後輩へのアドバイス

国際協力の分野に限らず、自分自身が成し遂げたい目標を具体的に持つことと、積極的に学ぶ姿勢や気づく姿勢を持つことは大切です。目標を持ち、毎日の達成度を考えながら挑戦することで、自分が持っている力や足りない力が何かわかります。さらに、積極的に学び、気づく姿勢を意識することで、新たな発見や気づき、疑問が生まれ、質問をすることでより深く物事を学ぶことができます。また、実際の経験は関連する大学の授業の学び方や観点、捉え方に影響するので、インターンシップに行くことでより深く大学の授業で学び、考えることができるようになるかと思います。

インターンシップ報告書（第２部）

民間企業インターンシップ

メディア系インターンシップ2018　学生たちは何を学んだのか

人文社会科学部教授　村上　信夫

「インターンシップからテレビ、新聞、出版などメディア企業へ」。

2012年、学部長から言われた言葉だ。当時、派遣先は県内2社しかなかった。

それから7年、県内外の企業のご協力で、テレビ、ラジオ、制作会社、出版、新聞など増え、今年は19社になった。特に、在水戸の全国紙各社の総局支局がこぞって引き受けて頂いている状況は、他に例をみない。さらに今年は東京新聞、ひたちなか海浜鉄道、なめがたエリアテレビでお引き受け頂き一層の充実となった。

まずご多忙の中、学生を引き受けて頂いた各社に、心から御礼を申し上げたいと思う。

お陰様で学生が成長しました。

インターンシップ期間中、参加者には毎日、日誌を提出させ、学生―教員―派遣先の上司との間でコンデション、学びのフォローなど情報共有をしている。

その日誌に「事実にこだわる徹底さ」や「細部まで突き詰める覚悟」、「現場のチークワーク」「責任感」など多くを学び、現場の楽しさ、やりがいを体で感じていることが記述されている。

全部の企業で先輩との懇談の場を設けて頂いている。その際に「テレビ局に入りたくて全国をまわった」「もっと新聞を読め、テレビのニュースを見ろ」と就活に対する考えの甘さを一喝された学生も多い。これも大きな学びだ。

お陰様でメディアを志望するならまずインターンシップという雰囲気が生まれ、就職実績も目に見えて上がっている。

18年11月に開催したインターンシップ報告会には、報告者の学生だけではなく、1年生が積極的に参加していた。

報告会後には、参加者を対象に内定者懇談会を開催。新聞、テレビ、広告代理店などメディア系企業の内定者とゲストに記者たちを招き、就活についてのシンポを行っている。今回は、実際に就活に使ったESを提供してもらいESの書き方、面接などを語ってもらった。

その参加者も年々増え、インターンシップの参加者のみなら、1年生、2年生、他学部の志望者も多く、今年度は40人にもなった。

その一方で、問題もあった。東京の出版社に派遣予定の学生が、直前に辞退したのだ。その学生は東京に親戚、友人がいないためホテルを予約したのだが、高額なため親が反対したことが理由だった。直前で他の学生というわけにもいかず、準備して頂いた相手に大変失礼なこととなった。

東京でのインターンシップは生活費、交通費がどうしてもかかる。中にはホテルやウイクリーマンションを借りるケースもある。さらのその期間、バイトが出来ないためお金を稼げないと学生には大きな負担だ。そのことは説明会などで何度も説明しているが、折角、意欲と機会がありながらと、水戸という立地のため阻まれるのである。その支援は大きな課題である。

しかし、メディアを志望する場合、どうしても東京が中心となる。立地のハンディを乗り越え、現場を見て学ぶことが何より大事だ。メディアの現場は理想と現実が混在している。理想だけでは伝えられず、しかし、志を高く持たなければ意義がない。そのリアルを知ることは、入社後のアンマッチを防ぐために必要なことである。メディアを目指す学生はぜひインターンシップに参加して欲しい。

下調べこそ制作の基本

株式会社　えすと

社会科学科　3年

鴫　原　　彩

1．参加の動機

私は、幼少のころからテレビが大好きで、特にバラエティ番組は毎日必ず見ていました。自分の知らない世界を代わりに経験して、新しい世界を見せてくれるテレビが大好きで、将来、テレビ番組の制作の仕事に関わりたいと思うようになりました。しかし、テレビ番組がどのように作られているのか、制作の人たちがどのような仕事をしているのかを知りませんでした。そこで、テレビ番組がどのように作られているのか、制作の仕事は具体的にどのようなことをしているのかを制作会社でのインターンシップによって知り、経験したいと思い参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は、日本テレビで放送中の『ヒルナンデス！』という番組で、火曜日の班を担当し、アシスタントディレクターの下で働きました。

『ヒルナンデス！』の火曜日の放送は、ロケなどのVTRをスタジオで見ながら、ワイプのリアクションをすることが主であるため、その分、事前の下調べやロケ、編集作業が大切でした。私は、基本的に複数の企画で、下調べにあたる、リサーチ作業が業務の中心でした。

このリサーチ業務が終了し、企業やお店に取材の交渉を行い、許可が出れば、商品を入手するために買い出しを行い、実際のお店の風景や商品の提供に係るまでの時間などを調べるロケハン作業を行い、それらがすべて終了し、企画が確定したら、実際に演者を連れてロケに出ます。

ロケを行う際に一番注意しなければならないこと、それは、一般の方のご迷惑にならないように撮影することです。もちろんインタビューなどで一般の方にご協力いただくこともありますが、映りたくない方にどれだけご迷惑をかけないで撮影するかが大切です。アシスタントディレクターの仕事としては、一般の方にロケの趣旨を説明し、インタビューにお答えいただけるか、頂ける場合には承諾書にご記入頂き、テレビに映っても可能かどうかを聞いて回ることが大切な仕事で、その仕事も体験させていただきました。その後、ロケのインサート撮影をロケ地や局内で別日に行います。そしてその後、編集作業を行います。

そして、生放送当日、まずスタッフで演者役を割り振り、リハーサルを行います。そこで、実際に演者がコメントする時間の見積もりや、生放送中に物の出し入れするタイミングの確認などを行います。そして、生放送が開始されると、私は、VTRを見ている演者の座るスツールの移動や演者に渡すお茶出しの準備をしつつ、収録の見学をさせていただき、無事、生放送が終了しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私の業務の中心であったリサーチ作業では、取材する商品やお店のオリジナルの特徴をアピールポイントとしてあげることによって、その商品やお店をロケの企画として決定するための参考事項になります。色々なインターネットサイトや公式のHPでたくさんの情報を探すことはとても骨の折れる作業でありましたが、これがロケ企画を決定するために大切な業務であること学びました。

また、編集作業をしているときに、ディレクターに、この作業ではすべての映像をわかりやすくし、何も考えずに楽しんでテレビを見てもらうようにすることが何よりも大切であるとのお言葉を頂きました。『ヒルナンデス！』は民放放送で、無料放送であるからこそ、視聴率が大切になってきます。内容が難しくてチャンネルを変えられてしまうことが1番あってはならないことであるため、わかりやすいVTRにするために編集作業がとても大切で妥協は許されないのであると学ぶことができました。

4．後輩へのアドバイス

私は将来、テレビの制作の仕事に関わりたいと漠然と考えていましたが、実際にどのような業務を行っているのかを知りませんでした。そのため、今回のインターンシップの参加は、実際の業務内容について客観的に知るだけではなく、体験させて頂いたことによって、自分がこの仕事に向いているのかを改めて考える良いきっかけになりました。

『ヒルナンデス！』は、曜日ごとの担当制なので、一週間のインターンシップで、業務の全体的な流れを知ることができたのも良い経験になったと思います。自分が将来就職したいと考えている業界は実際に自分の目で見て、経験することが大切であるため、関心のある業界はなるべく自分の目で見て確かめるべきであると思います。

視聴者と一番近い場所

株式会社　トラストネットワーク

人文コミュニケーション学科　3年

松　浦　亜梨紗

1．参加の動機

もともと番組づくりに関わりたいという夢があり、テレビ朝日系列の会社、トラストネットワークに興味を持ちました。また、憧れている先輩が働いている会社だったこともあって、憧れている現場がどんなところなのか、どんな人がいるのか先輩が働く場所を通して知りたいと思い、今回の応募に至りました。

2．派遣先の概要と業務内容

トラストネットワークは、テレビ朝日のグループ会社です。番組制作の制作技術業務に必要なエンジニアが働いています。カメラ、音声、照明、編集、VE、CGなど、専門性の高い業務を複数こなすことができるようにしているそうです。

私はインターン期間中、放送準備の業務を見学、体験しました。1日目はテレビ朝日を見学したあと、テレビ局の心臓部である“スーパーマスター室”を見学、実務体験をしました。テレビ局の館内図にものっていない、普通は入れない場所です。2日目は回線センターを見学、実際に回線をつなぐ体験をしました。そのあとは放送統括部を見学。マスターに行く前の映像をチェックしている部署です。テロップとナレーションの内容が違ったり、字幕が規定のラインからはみ出していたり、映像の人物がシートベルトをしていなかったり、そうした問題が結構あるそうで、何重ものチェックがあって私たちの元に届いています。またアナコメの収録体験をしました。ブースで収録したものを編集しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

まずマスター室です。マスターで働いている方々はONとOFFのギャップがすごいなと感じました。和やかに話していたかと思えば、急に空気が変わって作業。プロが働く場所ってこういう雰囲気なんだと実感です。

緊急速報、スポーツ中継の延長。テレビを見ていて目にする、私達にとって身近なことの、裏側の作業がどれだけ重大なものなのか、衝撃でした。自分が押すたった一つのボタンで放送事故になりかねない。全ての番組、CM、PRに何十、何百もの人が関わってマスターに入ってきて、それを待っているのは日本全国の視聴者。体験を通して、その間にいるマスターさんの責任の重さを実感することができました。

そしてその仕事を「生きがい」だとおっしゃっていた古屋さん、吉田さんの姿が印象的です。純粋にかっこいい大人だと思いました。こうした方と出会えたことも、今回のインターンで貴重な経験の一つです。

次に回線センター。マスターとはまた違った雰囲気の部署でした。休憩の時に「マスターは緊急の時冷静に対応する人が多くて、回線センターはワイワイしながらやれる人が多いというイメージ」ときいたのが印象に残っています。把握しきれない量の申請に対して、現場の方と電話などでやりとりしながら、うまく振り分け、回線をつなげる。現場を支える現場のようなイメージを抱きました。

インターン最後の質疑では、本当にどんな質問にも答えてくださりました。若手社員さんに「なぜトラストにしたのか」ときいて、「インターンの時人事の方がとてもいい人で雰囲気が好きだった」というお答えをいただきました。自分に当てはまるところが多く、たったの2日間ですが、ここに入りたいなあと思う刺激を受けました。

4．後輩へのアドバイス

番組づくりに関わる仕事がしたいと思っている皆さん。好きなことを恐れずにやってください。メディアは大変そう、ブラックというイメージがあるかもしれませんが、 好きならいつのまにか時間が立っているものなんだろうなと、インターンを通して知りました。夢や憧れへに近づく一歩として、インターンから挑戦してみてはどうでしょうか。やってみて嫌いになったらそれも収穫です。まずは動いてみれば、きっと違うと思います。これから頑張ってっください。

他人の目線で考えるということ

株式会社　やんかわ商店

法律経済学科　2年

高　見　和　樹

1．参加の動機

私は昔から大のテレビっ子であり、特にバラエティ番組を見ることが好きでした。それとともに、自分がよく見ているバラエティ番組はいったいどのように制作されているのかということにも興味がありました。そのような思いからテレビ会社のインターンシップに参加してみたいという思いが生まれ、私がよく拝見する番組を多く制作していたこともあり、やんかわ商店様のインターンシップに参加することを決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

やんかわ商店は、主にテレビ番組やネット配信番組の制作および制作協力を行っている会社です。TBS系列「所さんのニッポンの出番」、フジテレビ系列「関ジャニ∞クロニクル」などの人気番組を手掛けるほか、さまざまなアーティストのライブDVDやミュージックビデオの制作にも関わっています。

私がこの2週間で行った業務内容は主に課題で出された映像制作と、テレビ番組の関連業務の2つに分けられます。

まず映像制作では、あらかじめ用意されてある100本以上の映像の素材を自由に編集し1つの映像として作成する課題と、自らカメラを回して撮影に向かい素材となる映像を集め、それらを自分で編集し1つの映像を制作するという2つの課題が出されました。

もう一方のテレビ番組の関連業務においては、収録で使用する小道具の買い出しや資料の用意、ケータリングとスタジオのセットの準備、また、演者の方々のお出迎えや番組の収録にも立ち会わせていただくなど、実際の番組収録までの過程を経験させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

2週間を振り返ってみると、自分がいかに物事を主観的な目線でしかとらえてこなかったかを実感しました。そして、仕事をするうえでは他人の目線に立って行動することがいかに大切かということも学びました。

自分で映像を編集し制作する課題を完成させ、その映像を社長をはじめ職場の方々に見ていただいたときにもらった評価やアドバイスから、自分はどれだけ受け手側のことを意識していなかったかを実感しました。映像は、「伝える」ものではなく「伝わる」ものということを意識し、受け手のことをしっかり考えなければ、自分の気持ちばかりが先走った仕上がりになってしまうことを学びました。

テレビ番組の関連業務のお仕事においては、収録に関わる多くの人たちの、相手のことを気遣った行動を多く目にしました。演者の方々への体調面などの細やかな気配りや積極的なコミュニケーションなど、現場の雰囲気を少しでも良くするために一人一人が常に相手のことを考えて動いていて、それが強く印象に残りました。収録中も、1人の演者の方が発した一言に大きな声でリアクションをとるなど、とても楽しい雰囲気で収録を進めていました。

実際の番組収録までの過程を体験してみて、1つの番組の制作には想像以上の手間がかかっていることがわかりました。また、人と人とのつながりや現場のいい雰囲気が、多くの人が関わるテレビ業界においてとても大切だと学びました。

4．後輩へのアドバイス

これからの自分の進む道に迷っている方はたくさんいると思います。しかし、少しでも興味がある分野であればその業界の会社のインターンシップに参加する価値は大きいと思います。実際に体験することで会社の外からでは見えなかったことが見え、自分に今足りていない部分をはっきりと認識できるいい機会にもなると思います。最初は不安でいっぱいでしたが、今振り返ってみればとても有意義な時間を過ごさせていただいたと感じています。自分の成長のために、思い切って勇気を出してみてください。

現場の空気を感じる

株式会社　やんかわ商店

人文コミュニケーション学科　3年

松　浦　亜梨紗

1．参加の動機

高校の時から「番組づくりがしたい」と思っていました。村上先生のゼミに入ったのも、その夢に近づくためです。今回、村上先生のご縁で、憧れの現場である制作会社のインターンシップに応募。プロが働いているところがどんなところなのか、何をしているのか、その空気を肌で感じ、体験したいと思いました。

2．派遣先の概要と業務内容

やんかわ商店は、テレビ番組やネット配信番組の制作、制作協力を行っている会社です。様々な人気バラエティ番組や、アーティストのライブDVD、ミュージックビデオの制作をされています。

私はインターン期間中、やんかわ商店のオフィスがある広尾の映像制作と、番組収録のお手伝いをしました。

まず映像制作です。テーマは自由。最初にロケハンをして、構成を作り、絵コンテ、セリフをつけ、その日のうちに撮影に行きました。その後は編集作業をしました。

次に番組収録のお手伝いについて。収録の前日は、使用する小道具の買い出しや資料の用意をし、当日はケータリングとスタジオのセットの準備など、実際に番組の擬似生収録を経験させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

やんかわ商店でのインターンシップ最終日、広尾の映像が完成し、袰川咲栄さんにコメントをいただいたことが印象に残っています。

冒頭で「広尾ってどんなところ？」と投げかけた疑問に対し、その答えを提示していないこと、感性が先行した映像であること、仮にお金をもらう映像としてみるならば裏付けのある情報が足りないことなど、たくさんのアドバイスをいただきました。限られた時間で情報が伝わるようにしなければならない。1分1秒が厳選された情報であるか、考えながら作業しなければならない。映像づくりを仕事にするということは、その責任を負うということなんだと感じました。

1週間通して映像作りの難しさ、自分のときめくものがわかった気がします。やりたいことをやる、純粋な気持ちを大切にすればいいという単純なことが実感できた、貴重な体験でした。

また番組収録のお手伝いでは、リアルな現場を感じることができました。ゲストの多い回だったみたいで、いつもよりバタバタしていたそうです。現場が少しピリッとした空気に包まれていたのを覚えています。

セットづくり、買い出し、カンペ作成、楽屋づくり、そのほかコピーや演者さんのスタンバイなど、本当に色々なことを経験させていただけて、楽しかったというより、がむしゃらに食らいついた1日でした。

擬似生収録だったので、ディレクターさんがどんな指示を出すか常に見ていました。何か足りないものがあれば持っていき、「カンペもペンも多めに持っておこう」と自分なりに考えて動くことができた気がします。

現場でなければわからないことを知ることができました。カメラに押さえられている映像の見えないところには、映っている人の何十倍もの人達が動いています。それが実感できた重要な経験になりました。

4．後輩へのアドバイス

番組づくりに関わる仕事がしたいと思っている皆さん。好きなことを恐れずにやってください。メディアは大変そう、ブラックというイメージがあるかもしれませんが、 好きならいつのまにか時間が立っているものなんだろうなと、インターンを通して知りました。夢や憧れに近づく一歩として、インターンから挑戦してみてはどうでしょうか。やってみて嫌いになったらそれも収穫です。まずは動いてみれば、きっと違うと思います。これから頑張ってっください。

自分の可能性を試す

株式会社　やんかわ商店

現代社会学科　2年

飯　沼　　菫

1．参加の動機

私にはテレビ局でバラエティー番組の制作に携わりたいという夢があります。しかし、番組はテレビで見られるものの、番組制作の現場を見る機会はほとんどありません。私にとって、番組制作という仕事は未知の世界でした。いくら番組制作に携わりたいという気持ちがあっても、具体的にどんな仕事があるのか、どういう素質が必要なのかを知らずに、その業界を志望するのは不安がありました。テレビ番組の制作というのはどのようなことをしているのかを体験しながら学ぶことで、ぼんやりとしていたテレビ業界についてのイメージを、より具体的にすることがインターン参加のきっかけでした。それと同時に、もし自分が本気でテレビ業界を志望するなら、どのような力が自分に欠けているかを見つけたいという思いもありました。

2．派遣先の概要と業務内容

株式会社やんかわ商店は、主にテレビ番組やネット配信番組の制作および制作協力を始めとしてミュージックビデオ、コマーシャル、商品紹介などを手掛ける映像制作会社です。

私は2週間のインターンシップに参加し、その中で取り組んだことは、主に映像編集と収録現場での手伝いの2つです。

映像編集は、あらかじめ用意されていた映像素材や自分で撮影してきた映像素材を、切ったり繋げたりして一つのVTRを作り、テロップやBGMをつけて演出をするというものです。

収録現場の手伝いは、実際の番組の収録前の準備からその後の片づけまでの一連の流れの中で、ADさんとともに作業するというものです。

3．インターンシップを通して修得したこと

映像制作は今までやったことがなかったので、何もかもが初めての体験。編集ソフトの使い方や映像編集での小技などを一から教えていただき、1週間経つとソフトの操作にもだいぶ慣れました。今回は2本のVTRを作り、社長や社員の方々にコメントをいただきました。技術的なアドバイスもいただきましたが、圧倒的に多かったのはVTRの内容に関するアドバイスでした。中でも印象に残っているのが、撮影対象への「愛情」と映像への「責任感」という言葉です。街紹介がテーマのVTR制作にあたって、会社付近で撮影を行うことになりました。賑わう商店街の店の外観を撮影し、その映像をVTRに使ったのですが、プレビューの際、社長から撮影対象への愛情が感じられないというお言葉をいただきました。店の外観を映しただけの映像や、ハンディカメラを手で持って撮影したために、手ブレしている映像からそういったことがわかるというのです。撮影対象への愛情がこんな些細なところから伝わってしまうとは思ってもいませんでした。また、映像は強いインパクトを持っていて、伝えるということは人の心を動かすくらい力があるともおっしゃっていました。そんな影響力のあるものをつくるのだから、責任感を持たなければならないとも。その言葉は映像編集をする際には忘れてはいけないと思いました。

また、収録現場の手伝いでは、事前準備の大切さを学びました。ADの仕事は予想以上に多く、前日までの準備はもちろん、収録当日は最初にスタジオに入り、スタジオ内や楽屋の準備をします。さまざまなことを同時並行で考えながら行動する頭の回転と体力が必要な仕事だと思いました。準備したものがすべて生かされるわけではありませんが、大小様々な準備なくして番組は成立しないのだと実感しました。

4．後輩へのアドバイス

インターンは3年生がやるものという先入観がありましたが、2年生で参加して良かったと思います。日々学ぶことがあり、充実した時間を過ごせましたし、何より自分の可能性を試すことができました。将来のことを少しでも考え始めたら、インターンシップというのはなりたい職業と自分を照らし合わせるとてもいい機会です。2年生、あるいは1年生でインターンシップに参加してみたいと思っているそこのあなた！応援しています。

情報発信による地方活性化

行方市役所　情報政策課　なめがたエリアテレビ

人文コミュニケーション学科　3年

杉　内　裕　介

1．参加の動機

2018年の春に、私の所属するゼミで、行方市の防災対応型エリア放送「なめがたエリアテレビ」と共同プロジェクトを立ち上げました。なめがたエリアテレビで放送されるCMを制作する、「行方市　会社・商店応援CM制作プロジェクト」です。私はそのプロジェクトに参加し、「情報発信日本一」を目指す行方市に関心を持ち始めました。

なめがたエリアテレビは市内全域で受信できるように企図した、全国で初めてのエリア放送です。そのエリアテレビが、どのように地域の活性化への役割を担っているか、また今後はどのような課題があるのか知りたいと思いました。

2．派遣先の概要と業務内容

行方市役所は、麻生庁舎、北浦庁舎、玉造庁舎の3庁舎が存在します。行方市情報政策課は、麻生庁舎にあります。広報グループ、情報発信グループの2グループから構成されており、主な業務は、広報誌「市報なめがた」の作成や、ホームページ管理、シティプロモーション活動や、エリア放送などです。

主な業務のひとつである、なめがたエリアテレビは、2016年10月から市内全域を対象に放送を開始。現在は午前6時から午後11時まで、独自のコンテンツを放送しています。

インターンシップ期間中の9月3日、なめがたエリアテレビで、生放送情報番組「生で情報発信！なめこい。」が始まりました。地域ニュースはもちろん、国際的な出来事や、スポーツの試合結果など、さまざまな情報を織り交ぜ、時には市民の方に出演してもらい、それぞれの立場から情報を発信してもらいます。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、正直公務員といえば、黒澤明監督の映画「生きる」のように、仕事以外の世界にやりがいを見出している方が少なくないというイメージが、インターンシップに参加する前はありました。しかし、実際に参加し、「情報発信日本一」を目指す行方市の広報は、間違いなく「尖っている」ということが分かりました。

また、市民が実際に番組に出演をして情報を発信することで、自分たちの土地に対する親しみを生んでいると感じました。自分たちの情報を発信することは、すなわち自分たちの暮らしに目を向けることに繋がります。地域活性化の第一歩は、その土地に住んでいる人が、そこを好きになることだと思います。その意味で、県域民放テレビ局の無い茨城県にとって、なめがたエリアテレビは市内だけでなく、県内にとっても大きな可能性を持っていると感じました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加するか迷っている人は、ぜひ参加してみることをお勧めします。

「百聞は一見に如かず」というように、実際に自分がその場に身を置かないと、具体的な仕事の内容や社内の雰囲気については分かりません。参加した人にしかできない経験や感想は、就職活動を行うとき武器になります。また、この知識はそれ以外に役立つこともあるはずです。

また、私の参加した行方市役所のインターンシップは、もともと受け入れを募集していませんでした。しかし、メールや電話で受け入れをお願いし、今回のインターンシップが実現しました。「募集をしていないから行けない」ではなく、「行ってみたいところには連絡をする」という行動力について、インターンシップの時から意識してみてはいかがでしょうか。

取り組む姿勢

株式会社　茨城放送

人文コミュニケーション学科　3年

佐　藤　夢　加

1．参加の動機

私は「休みがきちんと取れるかどうか」を職業選択における基準の一つとして重視しています。メディア業界は休みがない、という話をよく聞きますがそれは本当なのか確かめるために、茨城放送でのインターンシップを希望しました。実際、職員のみなさまは忙しそうに働いている様子でしたがお話を伺うと「仕事は楽しい。忙しい合間に自分の趣味などを楽しむのが醍醐味。」とのことでした。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城放送は県内で幅広いシェアを誇るラジオ局です。

10日間にわたるインターンシップの業務内容は、取材に同行、ニュース原稿を書く、ラジオ生放送の現場見学、番組進行表のチェックなどでした。中でも印象的だったのは、「茨城大学の防災対策に関する番組を作る」というものです。自分たちで茨城大学の職員にアポ取りと取材をして、その音声が実際にラジオで放送されました。放送に使われたのはほんの数分でしたが、取材は1時間程度行いました。

「取材の流れや質問を考え、実際に取材をする」という体験は普段なかなか無いので、わからないことだらけでとても緊張しました。しかし、プロのキャスターと自分との違いは何か、自分の力量はどのくらいなのか知ることができました。

また、業務だけでなくいくつか課題が出されることもありました。それは、茨城放送が行っている営業活動について調べたり、取材時の流れを考えてきたりすることでした。

3．インターンシップを通して修得したこと

私が今回のインターンシップで修得したものは「自信」です。今までは「学生の自分は、知識や経験で大人に劣る」と思っていました。しかし、学生だからといってなにもできないわけではないと感じることができました。

インターンシップ中は、先に述べた取材や、取材先への電話問い合わせ、ニュース原稿作成など、初めての業務を「やってみて。」と任せていただきました。そんな風に任されることに最初は驚きましたが、せっかくやるからには茨城放送の社員になったつもりで一生懸命挑戦しました。すると、自分にもできることがたくさんあるということに気づけたのです。

だから、むしろ「初めてでこれだけできた！」と、自信を持ってみようと感じられました。それが今回の茨城放送インターンシップでの1番の収穫です。その自信がつけられたのも、私たちを信頼し業務を任せてくださった職員のみなさまのおかげだと感じています。これからも、「弱気な学生」ではなく「できることはたくさんある学生」として胸を張り、就職活動などに取り組んでいきたいと思います。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップでは、課題が出されたりやったことのないことを任されたりして難しそうに感じるかもしれません。しかし、自分なりに一生懸命に取り組んでみたら職員の方から「学生たちの持つ熱が感じられてすごくよかったよ。」と言ってもらえました。結果やできばえより、ものごとに取り組む姿勢を評価していただいたのだと思います。

「取材」や「電話対応」など、初めての業務を任されたときに「やったことがないから」「わからないことだから」と、モジモジしていては相手に不信感を抱かせてしまいます。特に、取材相手のなかには「茨城放送にインターンシップで学生が来ている」と知らない方もいますから、私たちも茨城放送の社員として見られているという意識を持たなければなりません。業務が初めてのことでも、一生懸命に取り組む姿勢があればその経験を自分の糧にすることができると思います。

引き出しを多く持つこと

株式会社　茨城放送

現代社会学科　2年

生　田　梨　帆

1．参加の動機

私は、放送研究会というラジオを制作するサークルに所属しており、サークルがきっかけでラジオ局に興味を持っていました。しかしラジオ局にどのような仕事があるのかほとんど知りませんでした。そこで、実際に自分の目でラジオ局の仕事を見てみたいと思っていました。また実際に現場で働いている方々のラジオ制作に対する姿勢や、大切にしていることなどを学びたいという思いもあり今回のインターンシップに参加させていただきました。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城放送は、茨城県全域をカバーする民間放送局です。毎日、市民に寄り添った情報を発信しています。茨城県すべての地域で聞くことができるため防災ステーションとして、災害対策に特に力をいれています。

今回のインターンシップは10日間でした。その中で、報道記者、レポーターに同行、編成業務、ディレクター業務、レコード室の整理といった仕事を経験させていただきました。

報道記者の同行では、市の定例会見や県庁の屋上で行われている展示について取材し、ニュース原稿を書かせていただきました。

ディレクター業務では、番組の資料準備や打ち合わせから参加し、本番中は届いたメールを添削してディレクターに渡すというADの仕事を体験させていただきました。

このような業務と同時に、茨城大学の防災対策についての番組を自分たちで企画するということも経験させていただきました。番組が企画されてから実際に取材に行くまでの流れを体験することができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、引きだしの多さが大切であると学びました。取材した内容をニュース原稿に書くときに、音声メディアで伝えるということの難しさを感じました。活字のメディアとは違い、ラジオはもう一度繰り返して聞くことが基本的にはできないメディアです。そのためニュース原稿も一文を短く簡潔に、そして記憶に残るものではなければなりません。しかし、ただ簡潔であればよいのではなく、短い1文の中で具体性を持たせなければなりません。実際に原稿をかいてみると、自分の知識不足から具体性を持たせることができず、印象の薄い文章になってしまいました。事前の知識が多ければ多いほど、より具体的かつわかりやすい文章が書けるのではないかと感じました。

報道の仕事以外の場面でも、レポーターの方やディレクターの方から話を伺った際にも引き出しの多さの重要性を感じました。日々、いろんな経験をしておくことが、面白い番組を作ったり、パーソナリティとしてマイクの前で話したりするときに役に立ってくることを教えていただきました。

引き出しを増やすためには、日ごろからいろんなことに興味を持つことが大切だと思いました。自分が関心のないものでも、拒絶するのではなく興味を持ってみることが今の自分に足りないのではないかと思いました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに行くかどうか悩んでいるのであれば、行った方がいいと思います。私は今回のインターンシップで、実際に働いている方々のお話を聞くことで今自分に足りないものをたくさん見つけることができました。また将来について考えるきっかけにもなりました。興味のある仕事でもそうでないものも、一度体験してみることによって、得られるものは大きいのではないかと思います。

参加してわかる職場の雰囲気とその理由

朝日新聞　水戸総局

人文コミュニケーション学科　3年

杉　内　裕　介

1．参加の動機

私はメディア系の仕事に関心があります。しかし、気になるのはその「働き方」について。ゼミでメディア関係者の方とお会いする機会が過去にも何度かありました。お会いする方々は、「会社には好きで泊まっている」「クオリティが下がるよりは長時間働いた方が良い」などとおっしゃる方が少なくありませんでした。

しかし、朝日新聞水戸総局長の伊藤宏さんは、茨城大学にシンポジウムでお越しになった際、「うちの局は、皆さんとほぼ同世代の記者がたくさん働いていますが、休めない・長時間働くことは理解できないと話す人が多いです。私もその考えは正しいと思います。せっかくうちの局で働いてもらうなら、若い人たちに魅力ある職場にしていかないといけないと感じています。その一つが働き方でなければならないと私は思います」とお話しされました。

朝日新聞水戸総局の魅力の一つである「働き方」は、具体的にどのようなものなのか。働き方改革に理解のある総局長のもとで働く社員の皆さんはどのような思いで、どのように働いているのか。インターンシップを通じて実際に記者の方にお話を聞いたり、現場を見たりしてメディアの第一線の環境を知りたいと思ったため、参加を希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

朝日新聞水戸総局は全国にある地方局のうちのひとつです。日本国内には東京、大阪、西部（北九州）、名古屋の4本社、北海道支社、福岡本部、44総局、約250支局からなる取材ネットワークがあります。また、茨城県内にはつくば支局や土浦支局など、6つの支局もあります。水戸総局では、主に県の拠点として茨城県で発行される朝日新聞の茨城県版を担当しています。

見出しの作成や紙面の編集は、東京本社の整理部が行います。そのため水戸総局では、記者の方は実際に取材へ行き、記事を書くことが主な業務です。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップを通じて学んだことは、「早く原稿を手放すこと」の大切さです。「1人で原稿をひたすら直すより、早く原稿が自分の手を離れて他の人に見てもらった方が良い」水戸総局長の伊藤さんは初日に私たちにそうお話ししました。私は当初、それは一記事当たりの効率化としか思っていませんでした。

インターンシップ最終日、水戸総局で校閲作業を行いました。私は、締め切り直前に非常にあわただしくなり、総局内のあちこちで厳しい声が飛ぶ現場になるのかと想像していました。しかし、当日はとても余裕があり、穏やかに入稿を迎えました。伊藤さんは、締め切りの4時間前には既にほとんどの記事はチェック済みの状態で編成へ送っていたと言います。

私は、「早く原稿を手放す」ことが、ここにきて影響してくるのだと気づきました。時間に余裕をもって作業することは、社員一人ひとりの心の余裕にも繋がります。それは社内の雰囲気にも影響し、結果的に「働き方」にも繋がっているのだと思いました。朝日新聞水戸総局の雰囲気の良さを支えていたのは「早く原稿を手放すこと」だったのだと感じました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加するか迷っている人は、ぜひ参加してみることをお勧めします。

「百聞は一見に如かず」というように、実際に自分がその場に身を置かないと、具体的な仕事の内容や社内の雰囲気については分かりません。参加した人にしかできない経験や感想は、就職活動を行うときに武器になります。また、この知識はそれ以外に役立つこともあるはずです。

参加後、「自分に合わなかった」と思っても、その経験は無駄ではありません。むしろ収穫だと思います。「自分に合わない」ということが、就職後に分かったとしたらそれは手遅れだからです。

なので、インターンシップに行って損をするということはありません。参加するか迷う前に、まず応募してみましょう。

「記者の目」を学ぶ

朝日新聞　水戸総局

人文コミュニケーション学科　3年

和　田　みのり

1．参加の動機

私は将来漠然と、「メディア業界」で働きたいという気持ちがあります。しかし、特にこの仕事がやりたいというものも決まっていませんでした。なぜ、新聞を選んだのか。それは、メディアで働くということの基礎が新聞に詰まっていると思ったからです。取材先にアポをとり、知りたい情報を事前に調べ、取材をし、その情報を求める人たちへ（読者へ）還元。メディアの仕事の多くはこの工程を踏むのではないだろうかと思いました。新聞は中でもこの、自分たちの足で取材をし、いかに読者へ伝えるかと考えるプロセスが分かりやすいと思いました。メディア系を目指す学生として、新聞業界を実際に体験してみることは必要だと考え、志望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

朝日新聞は、日本の日刊の全国紙。朝日新聞社が編集・発行する新聞で、同社のメイン新聞。販売部数は、全国紙では読売新聞に次ぐ業界2位。今回は、朝日新聞の水戸総局にてインターンシップを行いました。

主な業務内容は、取材と記事作成、校閲作業。取材体験では自閉症画家の絵画展に同行したり、石岡の東日本入国管理局で収容されている難民に話を聞いたり、阿見の予科練平和記念館を見学、当時の予科練生に当時の話を聞いたりなどしました。校閲作業では、実際に記者から上がってきた記事を校閲し、実際に紙面が完成するまでの工程を体験しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

新聞記者を体験して、「記者の目」を間近で見ることができたのは一番の収穫でした。入管や予科練の記念館など見学、取材をして、ただ話を聞くことが記者の仕事ではないと実感。とくに入管の取材は、収容されている難民の方は涙ながらに話をしてくれ、私は泣きそうになりました。しかし、記者は情に訴えかけられたからと言ってそのまま記事にすることはできません。事実と照らし合わせ、様々な視点からの意見をもとに客観的な記事を作成します。多くの目から見られる新聞だからこその「客観性」の必要性、そしてそれを文章に書く難しさを感じました。また、取材のチャンスは限られています。何度も何度も取材できるわけではありません。その中でいかにほしい情報を聞くか、面白い話を引き出せるか記者の技量が大切だと学びました。ある程度自分の中で記事のイメージを持って、その中で取材を進めているという話を聞き、貪欲に情報を求め提供する記者の志を感じました。常に公正で情報に対して敏感な「記者の目」を学ぶことができました。また、この目を手に入れるには記者としての訓練が必要なのだと思いました。

4．後輩へのアドバイス

朝日新聞では、多くの場所に連れて行ってもらいました。そこで必要だと感じたのは事前準備の大切さ。どこへ行けるか事前に確認できたら、そこの場所、人物、歴史について調べていきます。すると、相手に極力失礼のない話ができるし、また深く相手の話を掘ることができます。質問を多くすれば、取材相手にも新聞社にも好印象だと思うが、予備知識がないと質問もできません。

加えて、積極性。同じ貴重な体験をさせてもらっても、そこからいかに自分のものにできるかは積極性次第だと思います。初めての場所、人に緊張すると思いますが、恥ずかしがらず自分の聞きたいことは積極的に聞きましょう。

「記者として何をしたいか」

読売新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

園　山　紗　和

1．参加の動機

私は読売新聞水戸支局のインターンシップに参加しました。将来新聞記者を志望しているため、本格的に就職活動が始まる前に現場の雰囲気や記事執筆・取材などの仕事を体験したいと考えたからです。

元々は、ゼミ活動の中である新聞記者さんのお話を伺い、その仕事に「かっこいい」と憧れを抱き始めたのがきっかけでした。しかし同時に多くの記者の方に「記者は大変な仕事」「女性なら特に自分の人生と天秤にかけないと」とうかがいました。私自身そのような不安を持っていました。そこで、実際に新聞記者の方がどのような思いをもって働いていらっしゃるのかを知ることで、新聞記者として働く意義と責任を肌で感じたいと思いました。そして、記者の方が日々どのように取材をされているのか、どのような準備をしていらっしゃるのか学ぶため、5日間インターンシップに臨みました。

2．派遣先の概要と業務内容

読売新聞は、発行部数世界NO.1を誇り140年以上の歴史を持つ全国紙です。私が参加させていただいたのは水戸支局。体験させていただいたことは主に、取材体験と記事執筆でした。裁判傍聴、県議会傍聴、美術展での取材、サッカーの試合の取材などさまざまなことを体験させていただきました。それぞれの場面で取材対象に聞くべき事は異なっていますし、見方も違います。その多種多様な見方を5日間で体験させていただいたのです。いくつかの取材については実際に記事を書き、書いた記事は川辺隆司支局長が細かい部分まで丁寧に添削してくださいました。実際に記事を添削していただく機会は滅多にないので、本当に貴重な機会でした。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップを通して学んだことは3つあります。1つ目は「準備の大切さ」。取材に同行させていただいた記者の方は、皆さん事前に対象のことを勉強し、調べていらっしゃいました。取材に行ったら何を聞くべきか。どんな記事を書くべきか。頭に入れて整理してから臨むのです。それは記事の効率化だけでなく、よりよい記事、そして取材先への礼儀の様にも感じました。

2つ目は「読み手を意識した言葉を考え続ける」こと。最も印象的なポーラ美術館取材の記事執筆の時のこと。ルノワールの名品「レースの帽子の少女」を題材として取り上げたのですが、私はその色合いについて「本物を見て初めて感じることができる。」と書きました。この部分を川辺隆司支局長は「本物ならではの味わいがある。」と添削してくださいました。「感じることができる」という表現は、書き手の思いを押しつけている文章なのです。同時に、実際に行くことはできない人を無視しています。何となく選んだ表現では駄目。“プロの力”を感じた瞬間でした。

3つ目は「正確さ」です。私が誤字をした際、川辺支局長は「誤字があると、どんなに吟味して選んだ良い文章でも全く意味がなくなってしまう」とおっしゃいました。誤字のチェックや試行錯誤にゴールはない。そう強く感じました。

そしてその全てを通して感じた大切なことは「記者として何をしたいか」。徹底的な準備も、とことん考え続けるのも、丁寧な見直しも、全てその思いが根本にあると気づいたのです。自分の記事を通して読者にどの様な思いを抱いてほしいのか。それを自分の中ではっきりさせるべきだとわかりました。新聞記者への憧れが強くなったインターンシップでした。

4．後輩へのアドバイス

まず、インターンシップに行くのを迷っている人へ。ぜひ、行くことを選んで欲しいです。それは、参加しなければ分からないその仕事のやりがいに気づくことができるから。そしてなにより社内の方々の働き方や雰囲気を自分の肌で感じ、将来の自分を想像することもできるからです。また、メディア系の就職を志望している人はぜひ新聞社のインターンシップに行ってみてください。なにか伝えたい物事があって、そのことについて徹底的に調べ、チェックを重ね、丁寧に丁寧に伝える。それはメディアの仕事をするにあたり、どの媒体でも共通していることです。メディアの最も根本である新聞社で学ぶことはきっと多いはずです。ぜひインターンシップで、自分の将来を見つけてください。

記事を書くとは

読売新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

松　浦　亜梨紗

1．参加の動機

ゼミの関係で新聞記者の方からお話を聞く機会があり、新聞社そのものに興味がありました。「この夏は絶対に新聞のインターンを受けるぞ」と決め、どこにしようかと迷っていたところ、村上先生から「読売さんは色々な経験を積むことができるように考えてくれている。マスコミを目指す人は絶対に経験しておいた方がいいことばかりだ」とうかがいました。詳しい内容をうかがい、そのプログラムをぜひ経験したいと今回の応募に至りました。

2．派遣先の概要と業務内容

読売新聞は、世界最大の発行部数を有し、140年以上の歴史がある全国紙です。明治7年に創刊され、題号は江戸時代の「読みながら売る」かわら版に由来します。

読売新聞の特徴は、充実した報道と明快な主張にあります。数々のスクープで国民の「知る権利」に応えています。「勇気と責任ある言論」を旨とする社説や、現実的で説得力のある提言報道で社会を動かしてきました。

私は殺人未遂事件初公判の傍聴、茨城県庁の見学、近代美術館にいってポーラ美術館コレクションの取材、日テレ・ベレーザの試合を見学してきました。どれも貴重な体験ばかりです。

そして全体を通して、記事にする練習をしていました。

3．インターンシップを通して修得したこと

まず裁判の傍聴。すぐそばにいたのが、おそらく被告人の関係者で、どんな気持ちでそこにいるのか想像したら、これを記事にする責任がどれだけ重いのか実感しました。印象に残っているのが、お世話になった川辺隆司さんの言葉で、

「どっちかに肩入れするのは楽、何が本当か冷静に見ていきたいよね。」というもの。傍聴してきた内容を、実際に記事にする練習をしましたが、原稿を中立に書くことがどれだけ難しいかわかりました。

茨城県庁では、議員さんの写真撮影を見学しました。新聞に載る議員さんの紹介写真は全て真顔なのだそう。理由はPRしているのではなく、あくまで紹介をしているだけだからとのことで、写真の扱い一つでも、新聞という媒体の立ち位置が感じられる気がします。

近代美術館での取材では、自分がとにかく記事を書くのが遅いことが分かりました。取材の時に、どういうことが記事になるかを考えながら動いていないからです。いざ書こうとなった時、入れたい要素がありすぎたり、考え込むと1つの要素しか入れてなかったり。美術館の広告ではないし、自分のレポでもない。その記事を伝える意義は何か、常に意識しながら取材、情報集めをすることが大切なんだなと思いました。

そして日テレベレーザの試合見学。はじめてのサッカー観戦が取材、そしてピッチでの写真撮影。とても贅沢な経験ができました。ピッチに降りて記事の写真撮影をしましたが、選手の表情まで見えて、音や匂いもなんだか感じられる気がした。どうにかかっこいい瞬間をカメラにおさえようとしましたが、思うような写真がなかなか取れない。スポーツ写真は狙って撮るのがとても難しいんだなと感じました。

5日間を通して、貴重な体験ばかりさせていただけたと改めて思います。マスコミ志望にとって重要なことを学べたインターンシップでした。

4．後輩へのアドバイス

マスコミ、メディアの世界に興味がある人は必ず新聞社のインターン行くべきです。情報発信の大事な部分を感じられる貴重な機会だと思います。将来の夢に向けて、インターンという形でぜひ一歩を踏み出してください。

「百聞は一見に如かずの5 日間」

産経新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

本　田　　崚

1．参加の動機

私がインターンに参加した理由はメディア業界の仕事に興味があったからである。またゼミ活動で新聞を対象とした活動が多くあり、新聞記者という仕事がどういったものか知りたかったからだ。単純にメディアといってもテレビや新聞、出版など様々な職種がある。それぞれ特徴があることは知っていた。しかし実際にはどうなっているかは話を聞くだけではわからないと思ったので、このインターンに参加してそれを知ろうという目的で取り組んだ。

2．派遣先の概要と業務内容

派遣先では基本的に取材と原稿書きをやらせていただいた。取材では近代美術館や裁判所、県警など様々なところへ同行させていただいた。また4日目には本来市役所へ向かう予定であった予定を急遽変更し大洗へ向かうことがあった。まさにいつ何が起こるかわからない記者の動きというものを経験することができた。

原稿書きでは、取材で得た情報をいかに短く正確に伝えるかの難しさがあった。自分が伝えたいと思う情報と、伝えなくてはいけない情報を両方取り入れることはなかなかできず、最初はその取捨選択に困惑することもあった。また前もって得た情報と実際に取材に行って見聞きした情報ではギャップがあるときもあり、実際に足を運んで得る情報の大切さも学ぶことができた。

3．インターンシップを通して修得したこと

私はこの5日間のインターンを通して多くのことを学ぶことができた。特に心に強く感じたことは、「百聞は一見に如かず」ということだ。実際に足を運んで取材すると、文字や写真だけで書かれた情報からは全く予想していなかった情報を得ることができた。逆にきちんと取材をしていないと誤った情報を流してしまうこともある。例えば、私が取材した牛久市で開催される祭りの開催期間が、前もってもらった資料と実際に取材で聞いたときで異なることがあった。本来の開催期間は取材で聞いたほうが正しかった。正直前もってもらった資料だけで記事を書こうと思えば書くことができる。しかし今回のように実際の情報と異なっていることもあり、誤報を流すことは新聞にとって命とりである。その危険性を身をもって経験した。

自分で足を運んで情報を得ることは今後の学生生活でもいえることである。学生のレポートだからなど甘い気持ちを持たず、情報は常に大事に扱えるようにしていきたいと感じた。そのほかにも自分の知らないこと、経験しなくてはわからないことなど5日間で多くのことを学ぶことができた。その日ごとに日誌を書けたのでしっかりフィードバックをして、ただの経験だけで終わらせず次はこれらを生かせるようにしていきたい。

4．後輩へのアドバイス

私はあまり積極的な性格でなかったためまずはこのインターンに参加するのも躊躇していた。しかし3年の夏という時期を無駄にはしたくなかったため思い切って応募した。結果大成功であった。またインターン中でも、記者の方へはもちろん一般の方へも質問や取材を自分からしなくてはならなかった。しかしわずか5日間の期間で躊躇している暇はないと思い、自分にしては積極的に動いた。そして多くの経験をすることができた。ここで私が言いたいことは、思い切って行動した結果はほとんど成功するということだ。躊躇することほど損するものはないと感じた。メディアの業界は自分がやるという気持ちがないとやっていけないと思う。積極的に動くことを大事にしたほうがいい。

なかなか初めから積極的になれというのも難しい。なので普段の授業やゼミ活動など小さいところから意識していければ、きっといい結果につながると思う。

伝える力

東京新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

五十木　奏　衣

1．参加の動機

新聞は、「事実を伝える」。

誤報から訴訟が起こることもあります。また、東京新聞で編集局長を務めていらっしゃる方から「誤字が一番信頼を失う」と伺いました。いつでも確かな情報が載っている信頼性の高い媒体である新聞。新聞社のインターンシップに参加したいと思ったのは、事実を報道するために、情報の裏取りやそれを整理して客観的に記事にするという体験がしたいと考えたからです。

2．派遣先の概要と業務内容

期間は5日間です。インターン内容は主に取材で、この5日間を通して最終的には一人で取材に行き記事を書くところまでを体験します。

初日は県庁で議会の傍聴をして、記事になりそうなネタをリストアップしました。2日目、道の駅「ひたちおおた」発の高速バスに新鮮な野菜を積み、バスタ新宿まで届ける農産物販路拡大事業が開始しました。支局の方に同行し、その取材をしました。3日目、水戸市鯉淵町にあるパパイヤ農園へ。水戸パパイヤ栽培研究会の方に取材し、青パパイヤが今年初出荷の記事を書きました。この日は、インターン生2人での取材でした。4日目、茨城県が主催している「いばらきの秋梨おもてなしフェア2018」という季節イベント、これに参加している飲食店へどんなコラボグルメを提供しているのか取材しました。この日はインターン生がそれぞれに分かれて一人で取材をしています。5日目、茨城町にある中学校で、茨城県のNPO法人「がん地域医療を考える会」が癌についての講演会を開催しました。聴講後は中学生にインタビューをしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

3日目、4日目の取材に支局の方の同行はありません。自分の見たもの、聞いたものがすべて。それを記事にしてデスクの方からチェックを受けます。つまり、自分の書いた原稿が間違えていれば、それはそのまま世の中に報道されてしまう。報じ方を間違えれば社会は混乱します。だから、取材は疑問が尽きるまで突き詰めるし、何度も確認をします。記者という仕事の責任の大きさを、インターンシップを通して学びました。

また、伝わる文章の書き方もこのインターンシップを通して学びました。文章を書く際に気を付けたのは、「誰に伝えたいか、何を伝えたいか」を意識することでした。これは、インターン3日目に支局長から言われた言葉の一部です。読者がいると意識するだけで、どの情報をどの順に伝えたら理解してもらえるのか、客観的に文章を書くよう心掛けるようになりました。また、自分で書いた文章をデスクの方にチェックしてもらえること、修正前後の文章を読み比べることで、プロの文章の書き方を学び、さらには自分の書き方で足りない部分を見つけることができました。

4．後輩へのアドバイス

新聞の仕事では「モノの伝え方」を学べます。それに加えて客観的に物事を判断する能力も鍛えられると思います。文章を書く能力はもちろんのこと、限られた字数の中で、手元にある情報を組み立てて相手にわかりやすいように伝える。私も初め不安はありましたが、チェックを受けてそれを見比べて書き方を変えていくことで、初日と5日目では大きく変化が出たように思います。

記者を目指している方はもちろんのこと、メディア系の学科でどんな仕事をしたいか迷っている方も、ぜひ新聞のインターンを受けてみてください。

記者という仕事

東京新聞　水戸支局

人文コミュニケーション学科　3年

菅　野　真　二

1．参加の動機

以前から新聞記者の仕事に興味があったのですが、実際にどのように働いているかのイメージが漠然としていました。どのように取材し、記事を書いているのかを知るいい機会だと思い、東京新聞のインターンに参加しました。また、メディア系のゼミに所属しており、文章を書く機会が多いので、文章のプロの方から直接指導を頂ける点も魅力的でした。

2．派遣先の概要と業務内容

東京新聞水戸支局は、主に東京新聞の茨城面を担当しています。インターンシップは5日間で、初日は県庁で議会の傍聴をしました。議会の中で記事になりそうな話題を見つけて、そのメモをデスクの方に見てもらいました。2日目は道の駅「ひたちおおた」で新宿に野菜を届ける路線バスの取材をしました。野菜を作った農家の方に話を聞き、その記事の原稿を書きました。3日目は水戸市内で青パパイヤを作っている農家の方に学生だけで取材をしました。4日目は梨のスイーツを作っているお店に一人で取材に行きました。最終日は明光中学校でガン経験者の講演会があり、その取材でした。話を聞いた中学生にコメントをもらい、原稿を書きました。

2日目から最終日は自分が書いた原稿を記者の方に見てもらい、それを修正したものを実際に紙面に載せていただきました。記事にする前の固有名詞や事実関係の確認作業も体験しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップでは人に伝えるための文章の書き方を習得できたと思います。新聞の限られたスペースでより多くの情報を正確に伝えるためには、短い文にまとめるだけでなく、情報を取捨選択することが必要不可欠になります。そのうえで取材相手が伝えたいこと、読者が知りたいと思うことをうまく文章にしなければなりません。記事が書けた後でも、紙面に載るまでに何度もおかしなところがないか、誤字脱字はないかを確認します。実際に自分も記者の方の指導を受けながら記事を書きましたが、うまく文章が書けず、書く力の重要性を痛感しました。文章を書くことは大学だけでなく、就職活動でも必要なことです。インターンを通して文章のプロの方に指導していただけたのは自分にとって大きな糧になりました。

また、単なるインターン生としてではなく、一人の記者として扱っていただいたおかげで、今まで知ることのなかった記者の裏側を知ることが出来ました。3日目と4日目は学生だけでの取材だったので、質問内容や写真撮影など自分で考えてこなさなければなりませんでした。緊張もあって、取材相手の年齢を聞き忘れたり、うまく写真が撮れなかったりと失敗もしましたが、その度に一つ一つ改善し、成長につなげることが出来たと思います。新聞に載せるための写真の撮り方や、コメントを引き出す取材の方法など、参加したからこそわかる自分だけの経験をすることができたと感じました。

メディアを学ぶ学生として、現役の記者の方とお話しできたことは、貴重な経験になりました。実際に記事を書かせてもらい、記者として自分の名前を記事に載せていただいたことは、自分の文章に自信を持たせてくれました。この5日間の経験は、情報を伝える難しさと、記者としての仕事のやりがいを実感する良い機会となりました。

4．後輩へのアドバイス

新聞業界を志望している人は、ぜひ新聞社のインターンシップに参加することをお勧めします。実際に体験してみると、ネットで調べただけでは分からないことや、自分に足りないものは何か気づくことができます。新聞業界に限らず、興味があるインターンシップには時間があるうちにどんどん参加するといいでしょう。

まだ進路に迷っている人も、積極的にインターンシップに参加することをお勧めします。百聞は一見に如かずという言葉があるように、経験してみないと分からないことはたくさんあります。少しでも興味があるインターンシップがあれば、失敗を恐れずに参加することが大切だと思います。

創る楽しさを知って

常陽藝文センター
現代社会学科　2年
大　塚　　萌

1．参加の動機

私は将来、茨城県でメディア関係の仕事に就きたいと考えています。しかし、私は茨城県出身ではないため、茨城県の文化や地域のことについて詳しくありません。そこで、茨城県の文化を学びながら情報発信の勉強もできる常陽藝文センターで、主に、VTR事業と出版事業で勉強させていただきたく、見る人が見やすい映像作りや取材記事の書き方を学びたいと思い、参加しました。また、もう一つの理由として、映像や出版の現場が、実際にどのような雰囲気なのかを体感してみたいと思いました。

2．派遣先の概要と業務内容

常陽藝文センターとは、主に茨城県の芸術や文化を通じて、人々の豊かなくらしづくりに寄与することを目的としている公益財団法人の企業です。芸術作品の展示や、「藝文学苑」というさまざまな種類の講義を開講しており、誰でも参加することができ、教養を身につけることができます。また、毎月、『常陽藝文』という雑誌を発行し、茨城県の情報だけでなく近隣の県についても特集をしています。

私が行った業務内容は主に2つあります。1つ目は、VTR事業にて、常陽銀行内で流れる、銀行員向けのニュース制作です。私が制作したニュースは、8月22日に茨城県庁で行われた「医学部進学者向け教育ローン利子補給事業に係る協定締結式」です。初めに、VTR室の大石みつえさんが撮影してきた締結式の映像を見ながら、シナリオを書きます。そして、自分で書いたシナリオをもとに、ナレーションを収録します。そのあと、取材した映像を編集し、テロップと音楽を映像につける作業を行いました。

2つ目は、出版事業にて、記事を書く作業です。私が取材したのは「ねもといさむの遊具と子どもの創造アトリエ展」です。初めに、常陽史料館でアトリエ展の写真を撮影し、学芸員の方に取材を行いました。そのあと、取材をもとに記事を書き、数回校正作業を行いました。最後に入稿をし、記事を完成させました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップに参加して、私が習得したことは2つあります。1つ目は、他者が読みやすく興味を持てる内容の記事を書くことです。私は、長い文章を書くことに少し苦手意識を持っていました。しかし、今回のインターンシップを通して、どのように書けば読み手が興味を持つか、内容を理解しやすいかを考えながら記事を書くことは、とてもやりがいのある楽しい作業であるとわかりました。また、取材から編集までを全て自分で行うことは、かなり大変であると実感しました。しかし、大変な分、1つのものを完成させたときの達成感は大きいです。

2つ目は、映像づくりです。昔から映像作りに興味はあったものの、実際に自分で映像を作ることは初めてだったため、学ぶことがたくさんありました。特に、使う映像だけをセレクトして繋げていく作業やテロップをつける作業はかなり神経をすり減らしました。映像を作る人は、集中力と細やかさを持ち合わせていないといけないと感じました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加する以前は、将来、茨城県でメディア関係の職に就ければ良いな、と漠然と考えていました。しかし、常陽藝文センターでのインターンシップを通して、私は文章を書くことが思っていた以上に好きである、ということに気が付きました。インターンシップは、自分でも知らなかった自分を発見させてくれます。気になる職種がある人は、是非インターンシップに参加してみるべきです。人の話を聴くだけでもある程度の知識を得ることはできます。しかし、実際に目で見て、体験して、この仕事は自分に合っているのかどうかを確かめることは大切なことです。1，2年生のうちからインターンシップに参加すれば、早いうちに自分に合った仕事を見つけることができると思います。後輩の皆さんには、早いうちからインターンシップに参加することをお勧めします。きっと新しい自分を見つけることができます。

地元から愛される鉄道を見て思ったこと

ひたちなか海浜鉄道

人文コミュニケーション学科　3年

丸　山　莉　穂

1．参加の動機

私がひたちなか海浜鉄道のインターンシップに参加してみたいと思った理由は3つある。1つ目は「他では体験できないことがしたい」と思ったからだ。インターンシップのガイダンスに参加した際、「鉄道会社」という項目を見て、折角インターンシップを行うならと考えて選んだ。

2つ目は、「『旅』を作るための交通手段としての鉄道に興味を持った」からだ。大学生になり自由時間も増えて、一人で他県へ行く機会も多くなった。時刻表を調べて電車に乗り、幾度か乗り換えながら目的地へと向かう。駅から出たときに目前に広がる景色、少し歩くと見えてくるその町の風景。鉄道は場所と場所を繋ぎ、私を導いてくれる。

また、私にとっての「ここでない場所」は、誰かにとっての「暮らしている場所」でもある。ひたちなか海浜鉄道の湊線のお客さんには、観光客ではなく通勤通学で鉄道を利用する地元の方も多い。私は元々まちづくりについて興味があり、「地元に根付く鉄道としての湊線を実際に見たい」と思ったのが3つ目の理由である。

2．派遣先の概要と業務内容

ひたちなか海浜鉄道は、勝田から阿字ヶ浦間の14.3キロを10駅・約26分で結ぶ鉄道である。元々茨城交通が湊線を運行していたが、モータリゼーションによる輸送人員の減少などから2005年に茨城交通がひたちなか市に2008年3月末での廃線を申し入れた。これに対し市は存続を強く主張。2007年第三セクターによる存続が決定し、2008年4月にひたちなか海浜鉄道が誕生した。

業務内容としては、会社のある那珂湊駅での改札・窓口業務、沿線の無人駅の整備、駅に貼る掲示物の確認などが主であった。インターンシップ初日（8月5日）には、ひたち海浜公園で行われたロックインジャパンで、ひたちなか海浜鉄道として出店していた「ロック饅頭」の販売をお手伝いした。8月18日に行われたひたちなか花火大会では、臨時切符売り場を開設し切符を手売りした。また、8月17日には、18日のひたちなか海浜鉄道のイベントのため、阿字ヶ浦駅にある「キハ222」という車両の中を清掃した。想像していたような駅員業務の他にも、このような様々な体験ができた。

3. インターンシップを通して修得したこと

ひたちなか海浜鉄道にインターンしてみて一番に思ったことは、「鉄道の仕事だけではない」ということだ。前述の業務内容から分かるように、地元や会社自体のイベントが多いのはもちろん、窓口業務もただ切符・チケットを売ったり定期券を更新したりするだけではない。観光客の方からはおすすめの観光スポットや、そこへの行き方を聞かれるし、駅前から出ているバスの時刻を聞きに来る方もいる。駅では湊線や那珂湊駅の駅猫「おさむ」に関連したグッズを売っており、駅構内では「みなとちゃんレンタサイクル」も行っているので、その対応も行った。またインターン期間中には、入場券を買って駅構内に入ってきた家族連れに、駅員さんが湊線や那珂湊駅について説明するなどの対応をしていたのを見かけた。嬉しそうにその話を聞き、写真を撮る様子を見て、「交流の場としての駅」もあるのだと気づいた。

ある時、無人駅から間違えて逆方向の列車に乗ってしまった方がいた。駅の乗り場をもう少し分かりやすくするべきだねと駅員さんが仰っていた。花火大会の際に臨時の切符売り場を開設したと前述したが、それも無人駅に一個しかない券売機が混み合うのを避けるためだ。このことは他のことにも言えると思うが、鉄道業務でもお客さんへの対応や心配り、サービスがやはり大事なのだと感じた。どうしたらよくなるのか、小さなことも見逃さない姿勢を私も見習いたい。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップと聞いて、大変そうという気持ちを持つかもしれない。しかし、実際やってみると多くの経験が得られたことが分かるだろう。自分がやりたいこと、進みたい分野があれば尚更、夢に近づいたと実感するに違いない。やりたいことが見つかっていなくても、少しでも興味あるところに飛び込んでみるのもよいと思う。頑張ってほしい。

第三セクター鉄道の現場を体験して

ひたちなか海浜鉄道　株式会社

社会科学科　3年

高　畑　利　生

1．参加の動機

私は以前より鉄道業界へ駅職員としての就職を志望しており、大学在学中に鉄道関連企業のインターンシップへ参加して、鉄道業界への知見を広げたいと考えていました。しかし自分自身企業のインターンシップへ参加した経験はこれまでなく、まずはそれらに関する基礎情報を得たいと思い、キャリアセンター主催のインターンシップガイダンスへ出席しました。その中で、人文社会科学部メディア系インターンシップの派遣先の一つに鉄道会社があると知り、不安や緊張はあったものの、この機会に是非挑戦したいと考え応募しました。

2．派遣先の概要と業務内容

ひたちなか海浜鉄道は、ひたちなか市の勝田駅と阿字ヶ浦駅を結ぶ全長14.3kmの鉄道です。茨城交通が運行していた湊線を引き継ぐ形で2008年に発足し、ひたちなか市と茨城交通の両社が出資する第三セクター方式で運営されています。インターンシップでは、10日間にわたり勤務させていただきました。主な業務内容は、那珂湊駅での改札業務や窓口業務、団体貸切列車「ビア列車」への乗務、駅掲示物の確認などです。各地で行われるイベントでの物販にも同行し、インターンシップ初日（8月5日）には国営ひたち海浜公園で開催された「ロックインジャパンフェスティバル」、6日目（8月26日）には真岡鐵道真岡駅で開催された「96サマーフェスティバル」にて、オリジナルグッズの販売を行いました。また、勝田駅での朝のラッシュ時の改札業務や、「ローカル鉄道地域づくり大学」といった各種イベントでのお手伝いなど、駅員業務以外にも様々な体験をさせていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

ひたちなか海浜鉄道でのインターンシップを通してまず思ったことは、その勤務内容が自分の想像よりも遥かに多岐にわたるということでした。那珂湊駅では窓口での乗車券や定期券など各種チケットの販売、改札でのチケット回収以外にも、レンタサイクルの貸出や湊線オリジナルグッズの販売などを行っています。観光客の方から質問を受ける機会も多く、業務を行う中では観光案内や他交通機関への乗換案内にも数多く対応しました。このような多岐にわたる業務を大手鉄道会社に比べて少ない職員の数でこなしていくために、職員の方一人一人が臨機応変に業務へ対応しているのだと分かりました。特に勤務7日目（8月28日）の駅窓口業務では外国人観光客の方へレンタサイクルの貸出手続を行う機会があり、その際は数人の職員で英単語とジェスチャーを交えながら対応しました。また上記に関連して、将来的に駅係員として現場で働くことを志望する自分にとって、実際に窓口業務や改札業務を行う職員の方々から多くのアドバイスをいただけたことは、将来に向けての大きな財産となりました。特に安全の徹底については、指導していただいた全ての職員の方が熱く語っており、安全を自己完結せず確認を繰り返すことの大切さや、日々の出退勤時間が不規則な乗務員や駅員の仕事を行う上での体調や精神面での自己管理の重要性について教えていただきました。今回のインターンシップで学んだ、仕事に対し臨機応変に対応する大切さと安全に対する強い意識を鉄道業界への就職に向けて生かしていきたいです。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップへ参加することに対し、不安や迷いを感じている人は多いと思います。しかし、自分が将来志望する業界で実際に勤務をすることによって新たな知見を得ることができ、それらはこれからの就職活動や、就職後においても大いに役立つでしょう。また、勤務の中で自分自身の長所や短所もはっきりと見えてくるはずです。自分が将来社会人として働く姿をイメージする上でも、大学在学中にインターンシップへ参加するメリットは大きいと感じます。是非、この貴重な体験を通して将来を考えるきっかけにして欲しいと思います。

普段とは違う大学

茨城大学　総務部総務課

社会科学科　3年

鶴　町　直　輝

1．参加の動機

インターンシップに参加するということそのものは、漠然には決めていた。去年もインターンシップに参加したが、まだ、自分の志望する職種や、働くというイメージをつかみ切れていなかったためである。

茨城大学という場所を選ばせていただいたのは、学内のインターンシップのマッチングフェアがきっかけであった。もともと公務員を志望していて、講座を受けており、そのなかで国立大学法人の職員という道があることを説明されていた。市役所などのインターンシップも考えていたが、マッチングフェアの会場で改めて目にしたとき、私はこの大学の職員というものにとても心惹かれ、参加を決めた。心惹かれた理由は、将来就職を希望していたのと、あまり仕事の想像がつかなかったことが大きい。地域と産業、研究、学生などの多くのこと、グローバルとローカルの交わる場所である大学、学生といういつもの立場ではわからない大学の社会での役割について知りたいと考えた。

2．派遣先の概要と業務内容

総務課では、広い範囲の仕事をする部署であった。大学の顔として学外の電話や文書などを受け取る、ほかの部署など学内のものを取りまとめ学外へ送るという窓口でもあり、多くの事務仕事や70周年記念の事業、会議の準備や片付け、式典なども担当していた。

そのなかで、私は文書管理としてパソコンでのスケジュールの入力、管理番号による管理や、報告書の作成。ほかの部署からの内線の応対、会議や学位授与式の準備や片付け、大学や、教育に関する新聞の記事を探す、70周年のビジュアル年表の作成のため作業などを体験した。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は国立大学で働くことに憧れがある。国立大学は各県、地域社会における知の拠点であり、発展に寄与するほかにはない特別な存在だからである。学生として所属しているとはいえ、そこで働く人の現場に入り込む機会はないため、大きな期待とともにインターンシップが始まった。活動を行うなかであらためて知の拠点として、社会との関係を強化しようとする様々な取り組みを知ることができた。大勢の関係者を巻き込むような行事はその縮図である。このことについて、総務課という広い範囲の仕事をもつ場で働かせていただいたことで、とりわけ民間や公務員に共通するものから、大学ならではの仕事まで知ることができ、働くというイメージもかなりつかめた。情報や仕事の共有、リスクの管理、人との交流が仕事には重要であること。仕事の上達には、周りの仕事をよく見ること、話をよく聴くことなどでアンテナを高くするということが必要なことを知ることができた。

また自分の課題についてパソコンや電話の扱いの不慣れさや、コミュニケーション能力の欠如など、より具体的に知ることができたのでそれらの解決をする。さらに、今回インターンシップをさせていただいたことで、大学の職員の仕事と役割について触れることができた。私は今後の大学生活はより実のあるものにしようと考えた。今回の貴重な体験を励みにして、公務員試験の勉強などしていこうと思う。

4．後輩へのアドバイス

今回私はとても緊張した。いろいろ不安になった。しかし想定よりは多くの人は優しいので大丈夫だ。様々な不安や躊躇があるだろうが、やってみたいと思ったのなら挑戦していくのが大事だと思う。インターンシップという体験は大学生以外には時間が取れないことや、機会が少ないことからなかなか難しい。これによって得られる経験、学びはおそらくは想定以上のものであるだろうし、貴重なものだ。

インターンシップで学んだこと

茨城大学　社会連携センター

現代社会学科　2年

髙　橋　寛　道

1．参加の動機

私は以前から事務職について、具体的にどのようなことを行っているのか興味があった。私のイメージだと、資料作成や情報の管理といったものが挙げられるが、実際の業務内容は体験して見なければわからないと思った。そこで今回、自身が学生として在籍している茨城大学の事務職を体験することで、学生の視点からも業務内容についてより理解を深められると思いインターンを申し込んだ。中でも地域貢献に興味があったので、社会連携センターを希望した。なぜならば、学内で大学と地域の仲介を担当している課だからだ。

2．派遣先の概要と業務内容

インターン先の茨城大学社会連携センターでは、地域と大学の仲介を中心とした業務を行っている。茨城大学は「地域に支えられ、地域から頼りにされる大学」を目標に掲げている。大学の主な業務内容としては、地域活性化やまちづくり、協働事業や共同研究などの推進、人材育成がある。

その中で社会連携センターは、自治体・企業・市民の方の間を取り持ち、より良く活動するための支援をしている。具体的な例を挙げると、以下の3つがある。1つ目は、大学の教員と自治体とが協働で地域課題に取り組む「戦略的地域連携プロジェクト」である。2つ目は、学生が地域で自主的に取り組む「学生地域参画プロジェクト」、3つ目は、地域・自治体と協働によるイベントの開催などである。プロジェクト関連では資金の申請手続きやプロジェクトにおける様々なことについての対応、イベント関連では会場設営やスケジュール管理を含めた事前準備を行っている。このように、社会連携センターでは地域と大学を結ぶ重要な役割であり、幅広い分野を取り扱っている。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は5日間のインターンシップで、業務の一部ではあるが様々な体験をさせて頂いた。初日、2日目は社会連携センターのホームページ、茨城大学が連携している五浦の美術館などを視察し、改善点を挙げるというものだった。この2日間で学生として過ごしていても気づくことがなかった大学のことを多く知ることができた。学生の支援、地域への貢献を担っている社会連携センターは利用者を意識して情報発信などの活動を行っているという。私はこの活動を通して、日常の中でも些細なことに気づくような感性を養うことが、このような場面で活かされると思った。

後半の3日間は講演会の準備から終わりまでの一連の流れを体験させて頂いた。講演会を行うにあたり、事前準備の周到さが印象に残っている。当日のスケジュールや会場設営のための道具を予備も含め用意していることに、仕事に対する責任というものを感じた。運営する側の存在があることでイベントを滞りなく開催できるということを改めて見て取ることができた。また、講演会が終わった翌日アンケートの集計をさせて頂いたが、そこでも要領よく取り組むことの重要さを痛感した。技術的な面もあると思うが、より効率よくするために自分で考え、時には相談し作業することが必要だと教えて頂いた。

インターンシップを通して学んだことを振り返ると、働くうえで当たり前なことばかりだと思ったが、実際にやってみてその当たり前を適切にこなすことが大切だと学んだ。

4．後輩へのアドバイス

今回の5日間インターンシップで様々なことや貴重な体験をさせて頂き経験を積むことができた。しかし、後悔していることもいくつかあった。その中の一つは、より積極的に行動するべきだったことだ。インターンを受け入れて下さった企業には迷惑にならない程度に自分から行動し、情報を集めることも必要であると感じた。特に、働いている様々な方とコミュニケーションをとることは、その職業に就くために必要なこと、やっておくべきことなどの情報を得られるだけでなく、経験談も聞くことができプラスになると思う。

受け身にならず、積極的に行動し多くの情報を得るようなインターンシップにしてほしい。

地域振興の取り組みを学ぶ

株式会社　筑波銀行

社会科学科　3年

小　林　弥　也

1．参加の動機

本インターンシップに参加した理由は、銀行という職業に対して興味があったからです。今後自身が行うであろう職業選択、ひいてはその後のライフプランニングにおいて、銀行の立ち位置やその業務内容を知ることは大きな役割を果たすはずです。そこで将来公務員として働くことも視野に入れている私は、一般的な銀行の業務として想起されやすい店舗での業務ではなく、融資先の顧客や提携先の地方自治体との取引や相談などを主な業務としている地域振興部のインターンシップに強く興味を惹かれたため、参加を決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

派遣先の筑波銀行は茨城県を基盤に展開している地方銀行です。同行は東日本大震災以降「地域復興支援プロジェクト『あゆみ』」の活動を通して、地域社会や地域経済の復興に寄与してきました。この取組は、2016年3月末で終了したため、震災復興を更に継続発展させたプロジェクトを新たに策定しました。本インターンシップはこのプロジェクトで提携している市町村のうち、北茨城市・大子町・かすみがうら市・筑西市に実際に足を運び、同行の顧客である企業の経営者から直接お話をうかがったり、各自治体の役所の職員の方からどのような取り組みを行っているのかを説明していただくというものでした。

3．インターンシップを通して修得したこと

本インターンシップで修得したことの1つは物事を様々な視点から多角的に捉えることです。今回のインターンシップの主眼の1つであった6次産業化を例に取ると、一般社団法人大子町特産品流通公社「グランだいご」では農家は企業に加工を委託し、それを自ら販売する形式を推奨していました。反対にかすみがうら市の栗農家である四万騎農園は、企業に委託すると模倣される危険を伴うため自分たちで販売から加工まで全ての行程を行っていました。1つの事柄でもそれを行う方法は真逆であり、また行政と生産者の視点の差異を感じることができました。

もう1つは実際に現地に足を運び、その地域を見て回ったり企業の方からお話をうかがうことの重要性の再認識です。私は生まれてからずっと茨城県に住んでいますが、筑西市に行ったことがありませんでした。そこで今回初めて現地に赴き、古い建築の多く残る素晴らしい町並み、また美術館や「ザ・ヒロサワ・シティ」などの様々な魅力的な施設を見学しました。その中には江戸時代に建てられたものまであり、ロケ地としてもよく使われています。また、先程挙げた以外にも「ダイヤモンド筑波」がよく見えるスポットや100万本ものひまわりが咲き誇る「明野ひまわりの里」など魅力的な場所が沢山あるにもかかわらず、あまり知られていません。市役所の方も情報発信に苦心しており、県外だけでなく県内の方々の認知度も低いことが課題とのことでした。よく茨城県は魅力度ランキング最下位だと揶揄され、また県民である私自身も、確かに発信できるものが何も無いから仕方がないと思っていました。しかし、実際には素晴らしい観光地は数多くあるのに、広報があまりうまく行っていなかったり、アクセスに難があったりといった別の問題が起因していることがわかりました。これらは現地に足を運んでみて初めて実感できる問題でした。

4．後輩へのアドバイス

冒頭にも述べたように本インターンシップは銀行業務について学ぶことができるだけでなく、実際に企業の経営者や地方自治体の職員の方々と実際にお会いしてお話をうかがうことができるという非常に貴重な体験をすることができます。企業の社長さんの場合は経営学やマーケティング、観光学的な観点から企業戦略を、地方自治体の職員の方の場合は行政の視点から地方創生に関する数々の具体的な取り組みを学ぶことができました。もちろん銀行業務についての基本的なことや筑波銀行の特色の説明、さらには財務諸表を読み解く演習といった金融や財務会計に関することも取り組むこともできました。金融系に興味がある方はもちろん、興味のない方や公務員のみ志望予定の方、まだ将来について決めあぐねている方にとってもこのインターンシップは大きな経験になると確信しています。

提案営業
―1 to 1の対話力を磨け―

株式会社　エムティーアイ

現代社会学科　2年

小　川　文　太

1．参加の動機

私のインターンシップ参加動機は、以下の3つである。

第一に、対話力・傾聴力を高め、相手のニーズを聞き出す力を磨くことである。今回のインターンシップの大きなテーマは、提案営業のノウハウ・テクニックの習得を通したスキルアップの達成だ。これらの力を伸ばすような機会は今まであまり多くはなかったため、この1週間の中で集中的に高めたいと思い、参加を決めた。

第二に、東京都内での仕事を経験してみたいという思いの実現である。私は今まで茨城県内での就職を考えていたが、その要因は都内での仕事に接する機会が少ないためである。就職活動開始までまだ時間のある2年生の夏のうちに、都内企業でのインターンシップに参加することで、将来の選択肢について今一度見つめ直す機会としたいと考えた。

第三に、就職活動そのものについて学ぶ機会を得ることだ。エムティーアイでのインターンシップは大学3年生が基本的に参加するという話を事前に聞いていた。そのため、先輩でもあるインターンシップ参加学生から、就職活動の現状を聞くことで、進路実現の達成を実現したいという思いで、インターンシップに参加した。

2．派遣先の概要と業務内容

株式会社エムティーアイは、IT業界の老舗ともいわれる東証一部上場企業である。新宿にオフィスを構え、「世の中を、一歩先へ」という企業理念のもと、刻一刻と変化していく時代の一歩先を読み、その時々に求められるサービスを生み出し、世界に届けるという思いで多方面にわたり事業を展開している。

具体的な事業内容としては、ヘルスケア、フィンテック、音楽・動画、電子書籍、生活情報、エンターテインメントの分野においていくつかのソリューションを提供している。私たちに馴染みのあるサービスとしては、音楽配信サービスである「music.jp」や、女性向け健康管理アプリの「ルナルナ」といったものが挙げられる。こうした事業を展開することで、クライアントの生活を向上させ、よりよい未来社会の実現への貢献を目指している企業である。

具体的な業務内容として今回私が体験したのは、自社のサービスを顧客企業に導入してもらうための営業である。エムティーアイが提供する健康経営ソフトウェア「CARADA」を、想定する企業にて役立ててもらうために、その使い方や効用を説明し、顧客の抱える問題の解決にむけて、対話の中でご契約をいただくというものだ。このためには、自社製品をとことん理解し、競合他社のサービスとの違いを踏まえたうえで、相手の真の課題を聞き出すという、提案営業というスタイルが取られている。

3．インターンシップを通して修得したこと

この1週間の中で、自分の考えを整理し、わかりやすく伝える力を高めるよう、日々の活動に取り組んできた。その成果は、毎日欠かさずあった1分間プレゼンテーションや、営業資料作成・トークの進め方にも反映されていたと思う。最後に発表した自己PRについては、構成や論理、スムーズで自信のある話しぶりといった点でレベルアップすることができたと感じている。

エムティーアイで学んだノウハウ・テクニックは、普段の学生生活においてもかなり役立つものだ。腕が鈍らないよう、機会を見つけながら実践し、場合によっては近くの仲間と共有していきたいと考えている。大変大きな学びを得ることができたインターンだった。

4．後輩へのアドバイス

現在注目のIT業界。その大手ともいえるのが、私がインターンシップに参加したエムティーアイという企業だ。ここに集まる社員・学生はみな高いスキルを持っており、その積極性や論理性、プレゼン力や対話の力など、学ぶべき部分ばかりである。スキルアップの機会を得たい人、都内での就職を考えている人、新しいことに挑戦したいと考えている人、こんな学生には最適なインターンシップであると感じた。大変魅力的な企業であり、熱意をもって推奨したい。

魅力をひきだす インターンシップ

茨城県北地域おこし協力隊

法律経済学科　2年

高　野　智　広

1．参加の動機

私は日頃から、「自分が働くうえで大切にしたいことは何だろう」と考えることがあり、その度に自分一人で答えを出すのは難しいと感じていました。そのような時、友人から「シゴトの面白さを考える夏にしよう」と書かれた今回のインターンシップのパンフレットを見せてもらいました。働く大人の方々に話をうかがう事ができるという内容だったので、働くことを身近に感じることができ、シゴト選びの助けになるのではないかと思い参加を決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

私は、茨城県北地域おこし協力隊の若松理央さんが企画してくださったインターンシップ「ひきだし」というものに参加しました。茨城県北地域おこし協力隊は、地域住民との交流プログラムなどの企画、地域のアート活動の支援を行う組織です。今回ご担当いただいた若松さんには、インターンシップのプログラムのすべてをお世話いただきました。

活動内容は、1週間の中で5つの企業を訪問するというもので、社長や社員の方々にインタビューを行い、最後にそれぞれの企業の魅力を記事にまとめました。活動1日目は、「いばらきのケア」という介護施設を訪問しました。同施設は常陸太田に密着し、障害事業や配食事業、移動販売車事業などさまざまな事業を展開しています。続く2日目は「株式会社えぽっく」、3日目は栽培、販売、物流を全て自社で行い地域密着型の農園を営む「栗原農園」を訪問しました。4日目は「冨山塗装」を訪問しました。同社は、家屋の塗装を手掛けており、無料相談会を定期的に開くなどして、お客さんに真摯に向き合う企業です。5日目は「根本電興」を訪問しました。同社は、電気設備の工事だけでなく、太陽光発電の設計や施工、非常用電源の開発を行う電気工事会社です。

若松さんには、企業訪問する前の取材研修をセッティングいただいたり、事後は地域広報に役立てられる記事作成の時間も確保していただきました。そのため、取材型インターンシップとして充実した業務内容だったように感じます。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は「ひきだし」の活動で出会った方々から、物事を広い視野で見ること、考えるだけでなく行動に移すことを教わりました。今回の活動では、いくつもの企業の社長、社員の方々からお話をうかがいました。企業を立ち上げるきっかけとなった体験談、企業に対する思いなど、皆さんのお話はどれも私が経験したことのないものでした。そういったお話をうかがううちに、いままでの私の物事に対する考え方は、自分の経験に縛られており、偏ったものだったと痛感しました。いままで私は、自分の持ち合わせる知識や常識だけで答えを出そうとし、自ら進んで自分とは違う考え方を取り入れようとしていませんでした。それは、これから仕事を選び、その仕事に長い期間向き合ううえで、とてももったいないことだといまでは強く感じます。自分はどのような職に就く可能性を持っているのか、どのような仕事をしている時に楽しさを感じるのかを見極めるためにも、視野を広げていく必要があると知ることができました。

また、視野を広げるためには、少しでも興味を持った物事に対して積極的にアプローチすることが重要だということも気づきのひとつです。今回のインターンシップに参加したことは、自分の価値観までも変えた貴重な経験となりました。もし参加していなかったら気づけなかったことが数多くあるので、行動する前から諦めることは非常に勿体ないことだと実感しています。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップにおいて人との繋がりはとても重要です。繋がりは広がりになることを実感したほか、その前提となる派遣先の企業の方々への礼儀、挨拶も大きな意味を持ちます。業務時間を割き対応してくださっているということを忘れず、マナーを意識して行動することは、相手の信頼を得るために必要なことであり、信頼を得ることができなければ有益な情報を引き出すことはできません。企業のことをよく知り、自分の今後に活かすためにも、敬意のある行動をとることを意識して下さい。

働く魅力をひきだす

茨城県北地域おこし協力隊

法律経済学科　2年

小　林　巧　人

1．参加の動機

働くってどういうことだろう。将来、自分はどんな仕事に就きたいのだろう。来たる就職に備えて、自分の将来を何度か考えてみたものの、私はしっくり来るものが何も思いつきませんでした。そこで、2年生という、まだ就活まで猶予のあるこの時期に、働くことがどんなことなのかを体験してみようと考え、インターンシップに参加することを決めました。当初は、公的機関か、有名な大企業ばかりをインターンシップ先として探していましたが、この「ひきだし」というインターンシップは、県内の複数の中小企業を見学できるということで、何も知らないのに中小企業を就職先から外すことはもしかしたら自分にとって損なのではないか、また、さまざまな業種の企業を見てみれば、自分が将来どういう方向に進みたいのか見えてくるのではないかと思い、このインターンシップに参加することを決めました。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城県北地域おこし協力隊の取材型インターンシップとは、1週間かけて、県北にあるさまざまな業種の企業を訪問し、見学、体験などをすると同時に、その企業の社長さんをはじめ、社員さんを取材し、その企業で働く魅力を学生が引き出して、それを企業の社長さん方にプレゼンを行ってフィードバックするというものです。また、最後には訪問した企業についてまとめた冊子づくりを行います。

最初に、「いばらきのケア」を訪問しました。「いばらきのケア」は、医療・介護、福祉活動に加え、地域に必要とされる移動型スーパーなどの事業も立ち上げています。2社目に、「株式会社えぽっく」を訪問しました。「えぽっく」は、実践型インターンシップという、学生や社会人の方が主体的に活動できるインターンシップを作り、その普及に努めています。3社目に、「栗原農園」を訪問しました。「栗原農園」は、作物を作るということだけでなく、その売り込み、流通も独自に行い、農協に依存しない新しい農業を行っています。4社目に、「冨山塗装」を訪問しました。全国で初となる、無料の塗装相談会などを行い、業界のイメージアップにも努めている会社です。5社目に、「根本電興」を訪問しました。「根本電興」は、電気工事に加えて、太陽光発電の導入や非常用電源の開発などの新規事業を行っています。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して修得したこととして、まず挙げたいのは、話を聞くときの視線や相槌・リアクションの取り方、積極的に質問すること、短時間にたくさんの考えを挙げること、それをまとめて発表することなどのさまざまなスキルです。これらのことは、大学の講義でも学べる機会がありますが、このインターンシップと講義との違いは、これらのことを一度に、限られた短い時間で、社長さんや社員さんを相手に緊張を強いられながら、5日間ぶっ通しで行うという点です。もちろん失敗することもありますが、その失敗も含めて、常に集中してこれだけたくさんのことを行うという経験は、自分を大きく成長させ、自信を与えてくれます。

また、当初に目的としていた、就職など将来のことを考えるうえでも大きく役立つインターンシップとなりました。企業の社長さんや社員さんの中には、自分で起業された方や、大企業で働いた経験のある方、何年か海外へ留学されていた方などがいらっしゃり、普段の大学生活では接することができないような方々の体験談やお話を聞くことができ、自分がどんな職に興味があるか、これから自分がどうしていきたいのか、将来の視野を広げる良い機会となりました。

4．後輩へのアドバイス

やりたい仕事が見つからない。何かしてみたいけど何をすれば良いのかわからない。いましかできないことに挑戦して自分の力を伸ばしたい。そのような人は、ぜひ一度インターンシップに参加してみるべきです。いままで自分が知らなかったことや、新しいことを経験でき、外の社会でしか得られない学びをたくさん得られます。

シゴトの魅力を知る

茨城県北地域おこし協力隊

法律経済学科　2年

長谷川　智　弘

1．参加の動機

私はまだ就きたい職業が具体的に決まっておらず、インターンシップに参加することもあまり考えていないような状況でした。そんなとき、友人に誘われ、校内で行われるマッチングフェアに参加することにしました。そこで色々な企業の方の話を聞きましたが、「具体的に就きたい職種が決まっていないから、どこに行けばいいか分からない」と悩んでしまいました。そんななか、最後にお話を聞いたのが茨城県北地域おこし協力隊さんでした。インターンシップの内容としては、1週間を通して何社かの企業を訪問し、インタビューやワークショップを行うというものでした。どこに行けばいいか迷っていたのですが、1つのインターンシップで複数の企業・職種に触れることができるので、非常に魅力的であると感じ、参加することにしました。

2．派遣先の概要と業務内容

茨城県北地域おこし協力隊は、人口減少や高齢化が進む県北地域において地域協力活動を行い、地域内外の方の定住・定着を図る活動を行っています。その一環として、県北地域でのインターンシップが行われています。今回参加した「ひきだし」は、学生が取材を通して企業を学び、企業は学生からの意見をフィードバックできるというものです。

今回のインターンシップでは5社の企業に取材をしました。1社目は「いばらきのケア」を訪問しました。同社は、主に医療・介護事業を行っており、その他に食品や日用品の移動販売なども行っています。2社目は、「株式会社えぽっく」を訪問しました。同社は、中長期にわたって企業内のプロジェクトに取り組む実践型インターンシップの提供をしています。3社目は「栗原農園」を訪問しました。同社は、作物を育てることはもちろん、その販売・流通まで全て自社で行っています。4社目は「冨山塗装」を訪問しました。同社は家屋の塗装業を展開しています。無料相談会を行い、お客さんのニーズに合わせて一軒一軒オーダーメイドで塗装を行っています。5社目は「根本電興」を訪問しました。同社は、建築・土木工事において電気設備工事を行っているほか、太陽光発電や非常用電源の開発にも取り組んでいます。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して学んだことは主に3つあります。1つ目は、話の聞き方です。ただ話を聞くのではなく、大きくリアクションをしたり相槌を打ったりすることで、話をしている側に「話をしっかり聞いてくれている」という印象を与えることができ、より深い話を聞くことができました。2つ目は、プレゼンテーションのスキルです。準備として自分の考えを外に出し、筋道を立てて話をするということを実際にやってみて、どのようにプレゼンを行うと効果的なのか考えることができました。普段の学生生活でも、授業中に学生を前にしてプレゼンを行うことはあると思いますが、社長や社員の方々に対してプレゼンを行うというのは、なかなか学生のうちに経験できることではないと思います。いつもは味わうことのできない緊張感のなかで、プレゼンのスキルを学ぶことができました。3つ目は、ビジネスマナーです。「ひきだし」では、企業訪問の前に事前研修を行い、そのなかで最低限のマナーを教えていただきます。社会に出るうえで、ビジネスマナーを身につけておくことは必須だと思います。早いうちにインターンシップでマナーを身につけられるので、とてもありがたいです。

参加した動機でもある「多様な職種に触れること」が経験できたので、1社行くだけでは得ることができない多くの学びがありました。

4．後輩へのアドバイス

「自分はその職種には興味がないから」「自分にはできそうもない」と、選択肢を狭めないでほしいです。早いうちにインターンシップなどに参加することで、将来の選択肢は増えるし、どのインターンシップからも学べることは必ずあります。また、意識が変わり、「何か始めてみよう」と思うようになります。私自身も抱負が増え、挑戦が続いています。まずはインターンシップに参加し、学んだことや人との出会いを大切にしてこれからの人生に生かしてください。

原発について学んで

NPO法人　ドットジェイピー（阿部功志議員事務所）
法律経済学科　2年
島　田　夏　海

1．参加の動機

私のインターンシップの参加動機は、友人の勧めからです。また、民間企業で働くか公務員になるか自身の中で決められていなかったこともあり、議員のもとで公務員の仕事内容を学びながら、施設訪問等で民間の方とも接する機会があるのではないかと考えたからです。説明会を聞いたのちに、インターンシップに参加し、社会経験や社会の基本的なマナーを身につけたいと考えるようになりました。また、夏休みの予定の合間にインターンシップを行うことができるということも参加動機の1つでした。

2．派遣先の概要と業務内容

私は、東海村議会議員の阿部功志議員の下でインターンシップを行いました。茨城県東海村には東海第二発電所があります。阿部氏は原発再稼働に反対されている方でした。

インターンシップの期間としては、8月から9月までの2か月間で、実際は議員の方と日程調整をし、7日ほど一緒に活動を行いました。具体的な活動内容として、原発に反対している方が原発に関する情報を収集し、情報をもとに会議や情報発信を行っている団体であるシーキューブの会議に参加し、福島県の現状や原発について写真を見ながら聞きました。また、阿部氏と東海村内見学や原発に関する講演会を傍聴し、日本原子力研究開発機構の建物であるJ-PARKを見学しました。さらに、憲法9条の会という、阿部氏が所属している会に参加し、最後には東海村の議会を傍聴しました。加えて、個別に阿部氏から直接宿題を数回いただき、その宿題について意見などをもらいました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、インターンシップを通して学んだことが3つあります。

私は茨城県出身で、東海村に原発があることは知っていましたが、今まで原発について何も考えてきませんでした。原発の影響は私が思っているよりはるかに広範囲に影響を与えることがわかりました。また、原発は政治と切り離せないものだと感じました。そのため、今まで日常で行われている政治について考える機会がなかったのですが、東海村の原発について考えていくうえで政治についても自然と考える良い機会になりました。政治について考える場合は、まずその土地や施設について深く知らなければならないと感じました。

「若者の考えを知りたい。」これは、インターンシップ中に度々尋ねられたことでした。憲法や原発再稼働の問題を考えるうえで、若者が何を考えているのかが重要ということはわかっていても、なかなか整理した考えを伝えることができず、難しいと感じました。その認識の甘さを痛感する一方で、この問題を目の当たりにする生き方とそうでない生き方では感じ方が異なり、さまざまな違いを前提に我々の生活が成立しているということを、この機会で感じることができました。立場の違いを克服するのが政治の役割でもあることを考えると、村議会議員といえども、さまざまな立場を理解し尊重することが大切なのだと思いました。

また、インターンシップを通して、会議に何度か参加し毎回意見や感想を求められましたが、自分の意見がまとまらず、戸惑ってしまうことが多かったと感じていました。そのとき阿部氏から会議を聞くときは、自分の意見を頭の中でまとめながら話を聞くとよいと話してくださいました。その話を聞いた後からは、そのことを実践し、人前で話す苦手意識を克服することができたと思います。

4．後輩へのアドバイス

大学卒業後の進路を決めていない1,2年生にもとりあえず何かしらのインターンシップに行くことをお勧めします。インターンシップは、サークルでの活動とは異なる経験をすることができる機会です。バイトとも異なる経験だと思います。早いうちからインターンシップを行うことによって、自分の知識や視野を広げることができます。決してインターンシップに行くことで損をすることはないと思います。頑張ってください。

議員という仕事に触れて

NPO法人　ドットジェイピー（藤田幸久議員事務所）
法律経済学科　2年
若　林　伶　奈

1．参加の動機

私は2年次になり、どのようなインターンシップに参加しようかと考えていました。そのとき1人の友人が、今回参加した議員インターンシップを勧めてくれました。私はその頃自分の将来についてまだ何も決めておらず、自分のやりたいことは何だろうかと悩んでいたところでした。そこで、今回のインターンシップに参加すれば、自分のやりたいことがわかるかもしれないと思いました。また、このインターンシップは活動内容を自分で決定できる部分が多く幅広く学ぶことができるので、将来を考えるための良い材料となるのではないかと考え、参加を決めました。さらに、このインターンシップは約2か月間という長期間で行われるのでゆっくりと活動に取り組むことができ、終わったあとに得られるものが大きいのではないかと考えたこともこのインターンシップに参加した理由の1つです。

2．派遣先の概要と業務内容

NPO法人ドットジェイピーは、若年投票率の向上を目標に活動するNPO法人です。その活動の1つである議員インターンシッププログラムは、議員と共に行動することで議員の仕事や思い、政治と社会のつながりを知る体験学習プログラムです。私は参議院議員である藤田幸久さんの事務所への配属となりました。そこで行われる主な仕事は、藤田議員のスケジュール管理などの事務作業や、秘書の方々の藤田議員への随行です。

私が携わった業務は、大きく分けて2つです。1つは事務作業です。具体的には、藤田議員のポスター貼りや名刺整理、SNSでの活動報告、藤田議員のホームページのリニューアルに関して意見を出すことをしました。もう1つは、藤田議員や秘書の方への随行です。随行では、県内の企業や施設を訪ねて議員の方々の仕事の様子を見学させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私はインターンシップを通して、相手の視点に立って考えることの大切さを感じました。私は随行のなかで、藤田議員や秘書の方が出会う全ての人を気遣いながらお話をし、丁寧な印象を与えている様子をよくうかがいました。話し手の目を見てしっかりと話を聞いたり相手に合わせた話題で話したりなど、相手がどう接してほしいかを考えることが人と関わる上で重要だとわかりました。

インターンシップの活動のなかで、SNSに活動内容を写真付きで投稿する作業がありました。私が投稿する写真や文章を考えているときに、秘書の方が「この投稿は自分たちのためではなく、投稿を見て藤田議員を知りたい人のためのものだ」ということを教えて下さいました。そのとき、私は自分目線で作業をしていたことに気づかされました。活動内容の報告は議員がどのような人であるかをアピールするものなので、情報を受け取った人にどのように思われたいかを考えるべきだと思いました。この経験から、相手の視点に立って考えるということはSNSのように直接相手が見えないときでも大切であると感じました。私は人と関わる機会の多いこのインターンシップに参加して、相手を考えることの重要性を改めて実感しました。これは将来どんな仕事をするときも常に大切にするべきことだと思うので、日頃から実践したいです。

4．後輩へのアドバイス

藤田議員は、学生時代からさまざまな活動を通じて社会の不条理を感じたそうです。それが国会議員として活躍するに至った原動力だと伺いました。その話を聞き、今の自分が何を感じて行動しているのかを問う、良い機会になりました。

インターンシップは普段の大学生活では学ぶことのできないことが経験できる絶好のチャンスです。私は今回インターンシップに参加してみて、普段関わることの少ない議員さんや議員事務所の方と出会い貴重な体験をすることができました。まだやりたいことが明確に決まっていない方も、少しでも興味があるインターンシップに参加することをお勧めします。インターンシップに参加することで自分自身、またその仕事についてわかることもあるので、将来のことを考える良いきっかけになります。将来について迷っている方は早いうちから参加し、積極的にたくさんの経験をしてみて下さい。

将来の自分のために

NPO法人　ドットジェイピー（藤田幸久議員事務所）

現代社会学科　2年

小　澤　愛　里

1．参加の動機

この議員インターンシップはNPO法人ドットジェイピー様が運営なさっているもので、1年次の春休みにインターンシップに参加してドットジェイピー様のスタッフとなった友人に勧められたことがきっかけで、このインターンシッププログラムに興味を持ちました。加えて、私が政治学や行政学など政治にかかわる学問の講義を中心に履修しており、国や地方の政治についての知識を身につけてより学びを深めたいと思ったことや、夏休みの長期間を活かして何か自分の将来のためになることをしたかったこともインターンシップに参加するきっかけになりました。

2．派遣先の概要と業務内容

インターンシップを受け入れてくださった藤田幸久議員は、日立市出身の国民民主党所属（当時）の参議院議員です。事務所には2～3名の秘書の方々と事務担当の方がいらっしゃいました。事務所には、同じく学部の仲間も派遣されており、業務はほぼ2人で行いました。事務所内では広報版づくりや名刺整理、HPリニューアルに向けての話し合いなどを行い、一方事務所外では秘書の方の挨拶回りや藤田幸久議員が参加なさる式典への随行、広報版の設置などを行いした。また、県議会の傍聴や藤田幸久議員が主催の食事会の受付業務なども行いました。

さらに、ドットジェイピー様が開催なさるイベントに参加し、ほかの議員事務所で活動していた学生とディスカッションをしました。最後のイベントでは活動を通して学んだこと・気が付いたことをもとに人々の政治的関心を高めるプロモーションイベントの企画・提案を行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私が修得したと感じることは3つあります。

1つ目はコミュニケーション能力です。幼いころから人と話すのが苦手で、なかなか話しかけられなかったり話を続けられなかったりしていました。しかし、インターンシップの中で議員や秘書の方々をはじめとして、社長や商工会会長、元市長など多くの方々とお話しし、人と話すことの楽しさや話す際の礼儀やマナーを知ることができました。活動前に比べて、自分から発言する機会が増え、話題を広げられるようになったと感じています。

2つ目は懸命に取り組む姿勢です。やらなければいけないことをやるのは当たり前ですが、結果が同じでもそこに至るまでの過程は人それぞれで、私は結果と同じくらい過程も重要だと思っています。なので、インターンシップの活動でも大切なのはどれくらい一生懸命やれるかだと思っていました。いただいた仕事は積極的に、丁寧に、しっかりとこなし、加えてほかにやっておくべきことを自分から探して取り組むように心がけました。秘書の方々からは、「黙々と取り組んでくれてとても助かっている」というコメントをいただきました。

3つ目はプレゼンテーション能力です。プロモーションイベントを提案する際、パワーポイントを使って5分程度の発表を行ったのですが、事前にインターンシップの受入先にご指導いただきました。そこで学んだスライドや内容の構成の工夫の仕方に加えて、聞きやすい声の大きさや話し方、身振り手振りなども考えてプレゼンテーションを行いました。まだ優れた能力とはいえませんが、この経験を活かして今後はより良いプレゼンができると確信しています。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップを少しでも興味を持っている人は、ぜひ早いうちに参加することをお勧めします。前述のように私は2年生の夏休みに参加しましたが、議員だけでなくさまざまな企業や地域団体の方々とお会いしたり、ほかのインターン生とディスカッションをしたり、プレゼンテーションをしたり、多くの活動から今後の大学での講義や就職活動に活かせる経験や能力をえることができました。こういった将来活用できる貴重な経験ができるという点は、ほかのインターンシップでも同じだと思います。4年間という限られた大学生活の中のたった数日間だけでも、充分に価値のある経験ができます。まずは自分の興味のある分野のインターンシップを探してみてはいかがでしょうか。

自らを見つめ直す

NPO法人　ドットジェイピー（綿引健議員事務所）
現代社会学科　2年
黄川田　梨　花

1．参加の動機

私が綿引健議員のもとでインターンシップを行った動機は2つあります。それは、私が公務員志望であったことと、自分の適正を見極めたいと思ったことです。

私は大学1年生の頃から市役所職員を目指していました。しかし、普段の生活において市役所職員の業務内容を詳しく知る機会は少ないです。そこで、市役所へのインターンも考えましたが、今年は市役所との関わりが深い「市議会議員」の視点から市役所職員の仕事を知ろうと思い、参加を決めました。

また、私が参加した議員インターンシッププログラムでは、自分のやりたい仕事や活動を議員との相談によって決めることができたので、自分の興味関心や向いている仕事は何かを確認することができる機会になると考え、参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

私が同行した綿引氏は、現職の水戸市議会議員の方でした。綿引氏は水戸市議会の民主・社民フォーラムに所属しています。私が携わった業務は、議会･委員会傍聴、一般質問案作成、地元行事運営、議員チラシ作成の4つでした。具体的には、綿引氏が所属する文教福祉委員会や、本会議を傍聴しました。また、この経験を踏まえて、フードデザート問題に関する一般質問案を作成し、綿引氏は本会議で発表してくださいました。地元行事の運営では、水戸市の備前堀灯篭流しの運営に参加し、子供たちと花火セット作りや、灯篭回収を行いました。さらに議員チラシ作成では、綿引氏が来年使用する予定のチラシを作りました。前年度作成したチラシは文章が多く読みづらいという評価があったため、画像や構造図を多用したデザインを意識して作成しました。

また、綿引氏のご厚意で、水戸三の丸ホテルやドローンスクールジャパン茨城水戸校の見学が実現したほか、これら企業の取締役や支配人の方とお話しできました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して修得したスキルは、価値ある質問を作成する方法と、判読性の高いチラシ作成の手法です。

価値ある質問の作成については、一般質問案作成の際に綿引氏より、質問には事実確認を行う単純質問と事実や問題点を踏まえて行う提案型質問があることを教えていただきました。1回の質問で多くの成果をえられるのは、提案型質問であることを知り、実際に水戸市のホームページの配食サービスに関係する部分の改定を提案する内容の質問を作成したところ、水戸市役所側がホームページを改定すると回答してくださいました。このような提案型質問を構築するスキルは、学業においても社会人においても必要とされるスキルになるため、非常に有意義であったと感じています。

また、判読性の高いチラシ作成については、綿引氏のチラシを作成する際に、まず全国の議員のチラシを分析し、有権者にとって読みづらいチラシの傾向を見つけました。その結果、文字の羅列や色の多用など一面あたりの情報量が多いチラシは読みづらく、内容も頭に入りにくいとわかりました。そこで、チラシを作成する際には、テーマカラーを一色に絞り、構造図を使用して読み手の感覚に訴える工夫をしました。また、議員のチラシは三つ折りで投函されることを考慮して、内容の配置を工夫しました。このスキルは、デザイン関係の仕事をする際に役立つと考えています。

4．後輩へのアドバイス

NPO法人ドットジェイピーが提供しているこの議員インターンシッププログラムは、学生ができる活動の自由度が非常に高く、自分の磨きたいスキルがある人や、自分の仕事の適性を考えたいと思っている人にオススメです。

また、どのようなインターンシップにも共通して言うことができますが、インターンをする際は目的意識を持ってインターンに取り組むことが何よりも重要です。単位のため、何となくの参加では、モチベーションは維持できませんし、何より修得できるものが少なくなります。折角の機会ですので、目的意識を持って取り組んで下さい。インターンに取り組みなさんが実りある体験をできるよう、応援しています。

「つたえる」を「つながる」へ

NPO法人　ドットジェイピー（綿引健議員事務所）

人間文化学科　2年

小　川　夏　鈴

1．参加の動機

私はもともと、2年次のうちにインターンシップを経験しておくと良いのではないかと考えてはいたものの、将来やりたいことが全くはっきりしていない状態であったため、どのようにインターンシップ先を選ぶべきか悩んでいました。そのようななか、NPO法人ドットジェイピー（以下、ドットジェイピー）が提供する議員インターンシッププログラムに参加経験のあった友人からの熱心な勧めを機に、同プログラムの説明会へ参加してみました。説明を受けて、分野を絞って特定の企業のインターンシップに参加するのとは違った形で幅広く社会経験を積めることが、同プログラムの特徴であるとわかりました。そこで、希望進路が定まっていない私でも取り組みやすいと感じたため、参加を決意しました。

2．派遣先の概要と業務内容

ドットジェイピーは、若年投票率の向上を目標に、若者に対して政治に触れる機会や一次情報の提供を行っている団体です。同団体が提供する議員インターンシップは、地方議員や国会議員の方とともに約2か月間活動し、社会と政治がどのようなつながりを持っているのかを知ることができるプログラムとなっています。

私が派遣先としてお世話になったのは、水戸市議会の綿引健議員でした。私の活動内容の多くは政策活動であり、具体的には水戸市の定例会の傍聴、綿引氏とご縁のある方が勤めていらっしゃる企業への訪問、綿引氏のチラシのデザイン案作成などを、同じ派遣先となった学生とともに行いました。また地元活動の一環として、活動期間中に開催された備前堀灯篭流しの際、綿引氏及び地域のボランティアの方々とともに、会場の設営をお手伝いさせていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップ期間中、綿引氏の新たな広報用チラシのデザインを、綿引氏の事務所のインターンシップ生で協力して考えてきました。それについての打ち合わせで案をお見せした際、綿引氏が「自分にはないアイデアを出してくれるからありがたい」と言って下さったことがありました。この経験から、世代や価値観の異なる人と交流することによって見落としていた点に気づくことができたり、自分だけでは浮かばなかったようなアイデアが生まれたりすることを学びました。どんな仕事も相手があって成立するのであり、相手の期待や要望抜きに仕事は成就しません。この単純でも大切な関係に、インターンシップで気づけたことは、私にとって大きな収穫です。これからもさまざまな人との意見交換を大事にし、自分の視野や知識を広げていく一助としたいです。

また私は前述のとおり、希望進路が未定の状態でこのインターンシップに参加しましたが、配色や情報量に気を配りながらチラシの作成を進めていくうち、広告関係の仕事に興味を持つようになりました。加えて、綿引氏のご厚意で実現した企業訪問において、ホテルの支配人の方にお話をうかがい、もともと少し気になっていたサービス業への関心も深まりました。議員の方の下に派遣されるというプログラム内容ではありますが、考える事柄が政治や行政の分野に限定されるといったようなことは決してなく、将来の方向性の明確化につながる非常に良い機会であったと思います。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに対して「就活のために大学3、4年次になってから行うもの」という印象を強く抱いている人は少なくないかと思います。しかし、就活が本格化する前の時期でも有意義に取り組むことのできるものがあるということを、私は議員インターンシップを通して身をもって感じました。

インターンシップは、将来の希望進路がある程度定まっている学生が行うものというわけでもなければ、ある一分野の職業を実体験するためだけのものでもありません。先に述べた私の例のように、やりたいことが初めから決まっていないという学生にとってのインターンシップへの参加は、業種にとらわれることなくさまざまな視点を学んで徐々に自分の興味を明確化していくための、十分な有効手段になりえます。幅広く教養を身につけ自分の将来への見通しを持つきっかけが欲しい方には、ぜひインターンシップという選択肢を活用していただくことを強くお勧めします。

インターンシップ報告書（第３部）

PBL型インターンシップ

専門科目「プロジェクト演習」におけるインターンシップ

人文社会科学部地域志向教育プログラム委員長　神田　大吾

茨城大学人文社会科学部で開講されている2年次以上向け専門科目「プロジェクト演習」は、学外協力者からご提案いただいたプロジェクト課題に、1年を通じてチーム単位で取り組むPBL（Project Based Learning）授業です。今年は水戸市役所市長公室交通政策課、水戸市役所市民生活課、福島県富岡町役場、Domaine MITO株式会社から頂戴した課題にインターンシップを組み込んでいただきました。学生チームはそれぞれ、課題提案者様とミーティングを重ねながらプロジェクト課題に取り組み、授業のほぼ半ばに当たる夏季休業期間にインターンシップに参加し、そこで学んだ事柄を各プロジェクト活動にフィードバックして、12月の活動報告会でプロジェクトの成果を発表するという授業です。

学生にとって、職場体験は先ず、自分の間違った思い込みに気づく貴重な機会でした。市役所の仕事が「書類作成や事務処理などのパソコンと向き合うことばかりを想像」していた学生は、庁舎から外に出てイベントや展示の準備をしたり、市民と交流する機会が多いことに驚きました。

また、PBL型ならではの学びもありました。例えば「こみっとフェスティバル」実行委員会に参加して活動するチームは、月に一度の会議で配布された資料をその時は何気なく読んでいましたが、いざ会議資料を作成する仕事をしてみると、どれほどの時間をかけて丁寧に作られた資料だったかを知って感銘を受けました。また、公共交通の活性化を目指して活動する別のチームは、3か月にわたって水戸市の公共交通について色々と調べていただけに、インターンシップで水戸市都市交通戦略会議の議事録を作成した時、「地域の人々は私が思っている以上に水戸市の交通に関して深く考えている」ことを学びました。予備知識があってこその“気づき”と言えましょう。

また、百聞は一見に如かずと言われます。福島県双葉郡富岡町が原子力発電所の事故で大きな被害を受けたことは、学生はもちろん知ってはいましたが、しかし実際に現地でフィールドワークをすると、厳しい現実は学生たちの想像を超えていました。さらにインターンシップで避難生活支援係の職員の方と一緒に仮設住宅を見学し、「実際に仮設住宅の管理をしている人からお話を聞かせていただきました」ことで、見ていた“点”が“線”となってつながり、事故から7年を経てなお復興の途上にあることを学生たちは痛感しました。インターンシップの体験がプロジェクト活動への新たなモチベーションとなり、多くの復興支援イベントを成し遂げることとなりました。

民間企業でのインターンシップには、「経営者のもとで実際に企業活動に携われる」という特色があります。ワインの醸造作業や、県内・県外でのワイン販売業務を体験できたのは貴重な就業体験となり、やりがいと達成感を得ると共に、主体的に自分が動くことの大切さや、チームメンバー内での情報共有の大切さなど、社会人基礎力を培うことができました。

このように学生たちが多くを学び、成長することができましたことは、インターンシップを受け入れてくださった方々のご指導の賜物です。業務ご多忙の中にもかかわらず、皆様が親身になってきめ細かく、優しくご指導くださったことに厚く御礼申し上げます。今後とも引き続きインターンシップにご協力いただければ誠に幸いと存じます。何卒よろしくお願い申し上げます。

付記：授業内容と各チームのプロジェクト活動の詳細は
プロジェクト演習公式ホームページ
http://pbl.hum.ibaraki.ac.jp/project.html
茨城大学人文社会科学部地域志向教育プログラム公式Facebook
https://www.facebook.com/IUChiikipg/
をご覧ください。

人のために働くということ

水戸市役所　市長公室　交通政策課

現代社会学科　2年

荒　牧　瑞　稀

1．参加の動機

私は、将来の就職先として公務員を視野に入れており、人のために働く仕事がしたいと考えています。そのため、このインターンシップは、市役所の仕事を知り、体感する良い機会だと思い、参加を決めました。また、交通政策課は、公共交通機関についての情報発信が盛んになされているイメージがあり、大学でメディアを専攻する者として、情報発信に関する計画・遂行の手立てを学びたいと考えていました。

さらに、「プロジェクト演習」という授業で水戸市公共交通機関の利用促進に向けたプロジェクト課題に取り組んでいるため、交通政策課の皆様に業務を教えていただき、実際に業務を遂行することによって、プロジェクト実行の糧になるのではないかと考えました。また、実際に計画がどのように進められているのか、課題解決のために人がどのように動いているのかを見ることで、「働くということ」についてより深く理解できるのではないかと考えたことも理由の一つです。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は、交通政策の企画及び調整に関する業務や、高齢者・障がい者の方々の移動などの円滑化の促進に関する法律に関する業務などを行っています。

私が派遣期間の5日間で体験した業務は主に3つあります。1つ目は、水戸市都市交通戦略会議という会議の議事録の作成。2つ目は、各交通会社の乗車人数などが記載されているデータ表を、系統ごとに見やすいように色分けをする業務。3つ目は、8月20日開催の「真岡SL乗車体験ツアー」で使用する、受付案内板の作成です。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がこのインターンシップを通して実感したことは、人のために働くということです。この体験をするまで、市民のために、具体的にどのような仕事をするのか、全くイメージがつかめませんでした。しかし、この5日間で、交通政策課の皆様の働く姿を拝見し、印象が変わりました。交通政策課の皆様は、市民のことを本当に第一に考え、一つ一つの事業に真剣に取り組んでいらっしゃいました。特にこのことを実感したのは、交通戦略会議の議事録を作成しているときです。さまざまな交通会社の方々や、市民の意見を聞き入れ、交通政策を調整することは決して簡単なことではありません。この業務を確実にこなしている姿を拝見し、人のために働くということを考えさせられました。自分自身が「人のために」働いていたとしても、本当にその人のためになっているのかが重要であり、一つ一つ段階を踏んで長期的にものごとと向き合うことが、人のために働くということなのかなと感じました。

また、交通政策課の皆様に、働くということを一から教えていただいたり、貴重なお話をしていただいたりと、これから自分の将来を考える上で、糧になるものをたくさんえることができました。

4．後輩へのアドバイス

「百聞は一見に如かず」。まさにこの言葉を痛感した体験でした。自分の想像や、周りの声に惑わされるのであれば、インターンシップに参加するべきだと思います。将来、公務員を志望する人は、自分のモチベーションをさらに向上できると思いますし、公務員を志望していないという人でも、思わぬ発見があるかもしれません。

与えられた業務を確実にこなすことはもちろん大事ですが、仕事だけに目を向けず、実際に働いている人の姿をよく拝見し、休憩時間などの時間に、受入先の皆様との何気ない会話を楽しむことができると、より厚みのある体験ができると思います。

そして何より、自分なりに有意義な体験になるよう試行錯誤することが大切だと思いました。迷っている人は是非参加してみてください！

市役所での仕事を通じて学んだこと

水戸市役所　市長公室　交通政策課

人間文化学科　2年

志　賀　有　紗

1．参加の動機

私は「プロジェクト演習」という授業で、水戸の公共交通機関の利用促進というプロジェクト課題に取り組んでいます。インターンシップで学んだことをプロジェクトでぜひ活用したいと思い、水戸市のインターンシップに参加しました。インターンシップを通して、プロジェクトをより良い方向に向けていけるよう、プロジェクトのリーダーとして必要なこと、人に伝える力、主体的に行動する力、新たな知識や考え方を学びたいと考えていました。また、もともと地域に根差している公務員の業務に興味があったので、ぜひ参加してみたいと思いました。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所交通政策課では、主に2つの業務を行いました。1つ目は、議事録の作成です。実際の会議の音声を聞き、様々な人の意見をWordに起こしました。2つ目は、イベントの案内版の作成です。この案内板は、水戸駅と赤塚駅で使用されました。案内板はPowerPointで作成しました。

3．インターンシップを通して修得したこと

5日間のインターンシップを通して修得したことは3つあります。

1つ目は、人に伝える力です。パワーポイントによるイベントの案内板の作成により修得することができました。この案内板はたくさん人のいる駅で用いるため、どのようにすればよりイベントについて分かりやすく伝わるかということを考えました。実際には一番伝えたいことを大きく表示すること、絵を用いて誰にでも分かるようにしました。

2つ目は、キーボードのタッチが速くなったことです。議事録作成などでパソコンを長時間扱ったためだと思います。インターンシップに参加する前までは、キーボードのタッチが遅く、ミスタッチも多かったのですが、今では自分でも速く打ち込めるようになり、ミスタッチを減らすことができたと感じています。それだけでなく、手元を見ないで、パソコンの画面だけを見て打ち込めるようにもなりました。

3つ目は、水戸市の地域の人々の考えを知ることができたことです。議事録を作成し、さまざまな意見を聞くことができたためだと思います。地域の人々は私が思っている以上に水戸市の交通に関して深く考えていることを学びました。私も水戸の公共交通機関の促進のためにどのようにすれば水戸の公共交通機関の利用者が増えたり、利用頻度が増えたりするのか考えていかなくてはいけないと思いました。それまでも地域に根差した仕事をしたいと考えていましたが、インターンシップに参加したお蔭で、地域の人々にとって安全で安心、快適なまちづくりの一端を担ってみたいと思う気持ちがより強くなりました。

私は5日間のインターンシップに参加して、人に伝える力の重要性、タイピングの速さとブラインドタッチの向上などのパソコンの基本的な操作、そして、より良いまちづくりのために考えていくことの大切さを学びました。

4．後輩へのアドバイス

水戸市役所交通政策課での業務はパソコンを扱う仕事がほとんどでありました。その中でも、Wordを一番多く使用しました。そのため、Wordの基本的な使い方はできておくべきだと思います。

また、インターンシップに参加する際、最初は緊張すると思います。しかし、水戸市役所で働く皆さんはとても優しく接してくれ、業務のやり方なども丁寧に教えてくれます。そして、水戸市役所の雰囲気が和やかなので、徐々に緊張も解けてくると思います。なので、あまり緊張しすぎずにインターンシップに参加してください。インターンシップは将来のことを考える機会になるだけでなく、技術の習得や様々な知識など多くのことを学ぶ機会になると思います。ぜひ、多くのことを得られるようにアンテナを張ってインターンシップに参加してほしいです。

全ては市民のために

水戸市役所　市長公室　交通政策課

教育学部　2年

佐　藤　怜　璃

1．参加の動機

専門科目「プロジェクト演習」で、他の3人とチームを組み、水戸市の公共交通利用促進を目的としたプロジェクト課題に取り組んでいる私にとって、水戸市の交通政策内容は興味深いものだからです。また、水戸市内の学校に公共交通機関を利用して通学していることから、水戸市の交通政策内容に関心を持つようになりました。以前から公務員の仕事を体験したいという強い気持ちがあったことも一つの理由です。市役所での就業体験を通して水戸市内の現状や交通に関する課題を理解し、自らの学びにつなげたいと思い参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

体験した業務は主に3つに分けられます。まず、パソコンを使った事務作業を行いました。例えば、高速ICの交通量やデータを打ち込み、各地域の公共交通利用状況を一目で分かるように編集しました。また、水戸市内で運行している乗合タクシーの乗客人数、利用者の年齢層や利用時間等をエクセルにまとめる作業をしました。次に、交通に関するバリアフリー教室の手伝いをするために水戸市内の公立小学校に行きました。交通政策課の職員の方や小学校の教員の方々と共に、車いすや持ち運びスロープの準備を行いました。また、第4学年の児童たちが車いす体験をする際に乗車のサポートを行い、バリアフリー教室のスムーズな進行ができるよう補助をしました。主に車いすの操縦、児童の見守りをしました。そして、これらの活動を含む施策に対する意見をまとめ、レポートを提出しました。改善点や疑問点について職員の方と意見交換もしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップを通して、市民に寄り添うことの大切さを学びました。それは市報に折り込み広告として配布するプリントを折りたたむ作業をしていた時に強く感じました。私たち実習生の作業に何人かの職員が参加し、一緒に広告を折り始めました。とても丁寧に、そして真剣な眼差しで作業する姿は、広告を手に取る市民に向けられているように見えました。交通政策課の職員の方々の傍で仕事をした私は、職員の方々の仕事に対する熱い思いを感じることができました。今まで私が抱いていた市役所での仕事のイメージとは異なり、交通政策課の職員の方々は団結しているように見えました。チームのように一体となり、市民のよりよい生活を実現するため熱心に仕事に取り組む姿勢は、私の憧れになりました。また、公共交通利用促進のプロジェクトを行っている私にとって、利用者を第一に考えることの重要性を改めて感じました。そして、プロジェクトを成功させようという強い気持ちが一層強まりました。

4．後輩へのアドバイス

職員の方々とコミュニケーションを図ることが大切だと思います。業務に関する不明点は職員の方々に積極的に質問することで、業務を円滑に進めることができました。また、業務連絡だけでなく色々な話も交わすことにより、お互いが打ち解けることができました。最初は話しかけるのに勇気が要りましたが、自分からたくさん話しかけることができてよかったです。課によって職員の数は全く異なりますが、どの業界においてもコミュニケーションは大切なのではないかと思いました。実際に働く職員の方々との交流はとても有意義なものとなりました。私の実習を快く迎え入れてくださった職員の方々に心から感謝しています。

たくさんのことを学んだ5日間

水戸市役所　市長公室　交通政策課

教育学部　2年

粕　谷　紗　雪

1．参加の動機

私がこのインターンシップに参加した理由は、このプロジェクト演習をより深く学ぶために、必要だと感じたからです。私たち「水戸交通屋さん」チームは、水戸の公共交通活性化を目指して活動しています。そのためには水戸の公共交通に携わる、仕事を行っている人と関わり、その仕事を、間近で体験する必要があると考えました。具体的には私たちは、茨城交通の運転士の方々を紹介するリーフレットの作成を行っています。企画を進めていくためにはどのような段階を踏んでいくべきなのか、課題にぶつかったときどのように解決していくのかを見ることによって、自分たちの企画を進めていくためのヒントにしたいと考えたのも理由の一つです。さらに、自分がどのような職種に就くかとは関係なく、「大人が働く職場」を体験することによって、自分の将来の糧にしていければと思い、参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市長公室交通政策課は水戸の公共交通の活性化や課題の解決に日々取り組んでいます。私がやらせていただいた主な業務は、次の通りです。まず、私たちの一番はじめの仕事は、広報誌に織り込むチラシを折ることでした。そして初日の午後から2日目にかけて、過去の会議をまとめたファイルの目次をまとめてExcelに打ち込む作業を行いました。またその日は乗合タクシー「国田号」の乗車人数のまとめも行いました。3日目には千波小学校バリアフリー講習へ参加しました。4日目には、タクシー運転手対象のバリアフリー講習会の見学へ行きました。最終日は、会議資料の中身をチェックし、必要事項の確認を行いました。私が思っていたよりも、いろいろな仕事に携わらせていただき、驚きました。とても充実した5日間でした。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップに参加して学んだことはたくさんありますが、特に強く印象に残っていることは、千波小学校のバリアフリー講習会に参加したことです。将来教師を目指している私にとって、とても貴重な体験でした。少しの時間ではありますが、児童たちが慣れない車いすを押したり、乗ったりします。どのように声掛けすれば安全に、そして考えて行動してくれるのか、難しかったです。またたくさん声をかければよいというわけでもなく、交通政策課の目的としては、児童たちに体の不自由な人はどのように感じるのか気づいてほしいということだったので、こう感じるだろう、こう思いなさいという印象の植え付けにならないように気をつけました。また実際に交通政策課で働く方々を見て、課題や、市民の人々からの声に真摯に応対している姿を見て、誰かのためにチームで協力することを学びました。私たちが何気なく利用している公共交通ですが、こうしたたくさんの人々の努力によって、作られているものだと実感しました。さらに大人としての振る舞いやマナーも学ぶことができました。わずか5日間でしたが、たくさんのことを学べた私にとって大きな5日間となりました。

4．後輩へのアドバイス

何を学びたいのか、しっかり考えてから行くべきだと思います。上記で記したようにこのインターンシップはたくさんのことを学ぶことができます。自分が何のために行くのか明確にしたうえで参加することによって、より多くのことを吸収してほしいです。またわからないことがあったら、ためらわずに質問すべきだと思います。インターンシップに限ったことではありませんが、このような機会は誰でももらえるわけではありません。また、仕事に参加するうえで、よくわからないまま進めるのは相手にも失礼だと思います。交通政策課の方々は、真摯に対応してくださる方々です。積極的に質問しましょう。もちろん自分の仕事をしっかりこなすことも大切ですが、交通政策課の方々との会話を楽しみ、コミュニケーションの中で学べることもたくさんあると思います。頭を柔らかく、こうだと決めつけずに多くのことを学んでください。

水戸を想う

水戸市役所　市民生活課

現代社会学科　2年

大　塚　　萌

1．参加の動機

私は将来、茨城県に就職したいと考えています。特に、市や町に貢献したい、地域に関わりたい、という思いが強いです。そこで、水戸市役所の市民生活課で、市役所の方々が地域に対してどのような思いを持っていらっしゃるのか、実際にどんなお仕事をしていらっしゃるのかを知りたく、インターンシップに参加しました。

また、市民生活課と私たち「こみフェスチーム」は連携して、2月にイオンモール水戸内原で行われる「こみっとフェスティバル2019」に向け、毎月1回会議を行っています。普段、私たちは参加者側ですが、今回は事務局側として参加させていただきました。事務局が会議に向けて、どのような準備を行っているのかを知る良いきっかけになったと思います。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所の市民生活課は、主に市民活動・地域コミュニティなど、水戸市や市民生活に根差した活動をしているところです。市民が安心した暮らしを送れるようにさまざまなことを行っています。業務内容としては①水戸芸術館にて「花の絵コンクール」の展示②こみっとフェスティバル実行委員会準備③その他事務作業です。①について、このイベントは、水戸市住みよいまちづくり推進協議会主催で毎年行われているもので、幼稚園生・小中学生を対象としています。今回は、受賞作品の展示をお手伝いさせていただきました。②について、実行委員会で使用する資料作りやホチキス止めを行いました。また、実行委員会当日は、事務的な説明文の読み上げと会議録作成、Facebookの更新をやらせていただきました。③について、主にホームページの更新と助成金情報の打ち込みを行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップに参加して得たことは2つあります。1つ目は、「市民を想う」ことの大切さです。市民生活課は、水戸市民がより安心して、楽しい暮らしを送れるよう活動する部署です。2日間、市民生活課の方々の活動風景を見て、仕事に対する真剣さに感銘を受けました。ホームページの更新1つとっても、気を抜かず細かい作業を真剣に取り組んでいらっしゃいました。市民のことを想って活動するということは、非常に素晴らしいことなのだと感じました。2つ目は、他者に理解しやすい文章作りです。2日目の午後に「こみっとフェスティバル実行委員会」が開催され、私はそこで、前回の会議の概要と広報活動についての文章を読み上げる担当になりました。文章を作る際に、実行委員の皆さんがしっかりと理解できる文章を考えなければなりません。担当の宮窪千恵様に教えていただきながら、やっと文章を完成させることが出来ました。また、読み上げる際も、ゆっくり周りを見渡しながら読むことが出来たと思います。2日間という短い時間ではありましたが、とても多くのことを学び、濃い2日間となりました。

4．後輩へのアドバイス

今、漠然と市役所に就職したいと考えている人は少なくないと思います。そういう人は、実際に市役所へインターンシップに参加してみることをおすすめします。人の話を聴くだけではよくわからないことも、実際に自分の目で見て、聴いてみると、職場の雰囲気や仕事などがよくわかります。また、水戸市役所に行くと、自分が行った部署のこと以外にも、水戸市のことをより深く知ることが出来ます。たとえ短い期間でも、自分でインターンシップに参加し、確かめてみることをおすすめします。

私のように、今まで全く公務員という職種を考えていなかった人でも、1度インターンシップに参加してみると、就職に対する考え方が変わるかもしれません。私もこの2日間で考え方が大分変わりました。市役所という組織の中に実際に入って仕事をするということは、とても貴重な体験です。皆さんもぜひ、2年生のうちからインターンシップに参加してみてはいかがでしょうか。

「水戸」を市役所の視点から見て

水戸市役所　市民生活課

現代社会学科　2年

小　松　晴　夏

1．参加の動機

私が今回のインターンシップに参加した動機は2つあります。まず1つ目に、水戸市を第二の故郷のように感じていたからです。私は、高校の頃から計5年ほど水戸市に通っていて、魅力的で住みよい土地であることを知っています。そんな水戸市で生活する側ではなく、市民の生活を改善する側の立場に立ってみたいと思いました。2つ目に、将来自分が地域に根ざした職場に就きたいからです。地元である茨城をもっと活性化させたいと考えている私には、市役所の市民生活課という部署は、とても理想的な環境でした。以上2点により、私は水戸市役所市民生活課のインターンシップに参加するに至りました。

2．派遣先の概要と業務内容

受入先である水戸市役所市民生活課は、水戸市役所市民共同部のもとにある8つの課の内の1つの課です。主な業務内容として、地域コミュニティ及び市民憲章の推進、市民組織活動、NPO及びボランティアに係る政策の企画及び調整等に関する業務が挙げられます。

同じ期間にインターンシップを行った人と共に行った業務内容は、Wordを使用しての文書作成作業、こみっとフェスティバルにて行う企画の発案、部署内会議への参加等です。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は主に3つのことを修得しました。1つ目はパソコン入力についてです。Wordの知らなかった機能や、ビジネス文書における文章の書き方をご教授いただきました。今後の文書作成の際に役立てていきたいです。2つ目は人への対応の仕方です。水戸市役所市民生活課の方々は、我々学生に大変優しく接して下さいました。業務内容についての正確かつ丁寧な指示や、質問に対する真摯な受け答え等、我々が動きやすいようにたくさんのご配慮をいただきました。具体的な例を挙げると、資料作成の際は予め変更点が分かるように印がつけられていたことや、常に柔和な態度で接して下さり我々が質問しやすい空気を作って下さったこと、更に私が細かい質問や業務内容の確認をした際も嫌な顔ひとつせずに対応いただいたこと等です。私が今後インターンシップの学生や後輩を受け持つときに、そのような対応を心掛けたいです。最後に3つ目は市役所の視点についてです。参加の動機でも触れました通り、私は今まで水戸市で生活する側としての視点しか持っていませんでした。市民生活課の方のお話や、自分が実際に会議に参加したことで、市をより住みやすい場所にしようという思いや考えを肌に感じることができました。初日の朝、市民生活課についてご説明いただいたときの真剣な眼差しや、実際に市民の方と誠実に接する姿を間近で見ることができました。そんな貴重な体験を経て、僅かな期間ではありましたが私も少しだけ「市役所の視点」を持てたのではないかと思います。以上3点が私がインターンシップを通して修得したことです。

4．後輩へのアドバイス

私は今回のインターンシップを通して、質問することの大切さと、仕事を肌で感じることの重要性を学びました。まず前者について、是非皆が行く際には物怖じせず、どんどん質問をしてほしいです。気になったことや作業内容に不安を感じた時など、わからないまま進んでしまうのは大変勿体ないことだからです。まさに「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」だと思って臨んでください。また、実際に働いている方から直接話を聞ける絶好の機会です。あとで後悔することのないよう、予め質問したいことをまとめておくこともお勧めします。次に後者について、今の時代、業務内容自体はインターネットで調べるとすぐにわかってしまうでしょう。しかし、ただ調べて仕事をわかった気になるのと、実際に行って体験するのとでは大きく「わかった」の意味が変わります。自分の目で見て、自分の体で仕事を体験するほうが必ず自分の為になります。少しでも迷う気持ちがあるのならば、是非インターンシップに行ってみてください。

市役所で学んだこと

水戸市役所　市民生活課

現代社会学科　2年

庄　司　果　織

1．参加の動機

私は、「公務員になりたい」という思いで参加したというよりは、「プロジェクト演習」という授業の一環で、市役所・市民生活課の方々と関りを持ったことが参加のきっかけでした。関わっていくうちに市役所の具体的な仕事内容、市民生活課とはどのような課なのか等、知らないことがたくさんあったため、実態を知りたいと思い参加いたしました。

2．派遣先の概要と業務内容

私が参加させていただいたのは、水戸市役所の市民生活課です。市民の方々と関りを持ち、水戸市をより良くするために市民の方々と協働し、推進していく役割を担っています。

業務内容は、展示会の準備、NPO・ボランティア団体が運営するイベントの会議資料・議事録作成、SNSでの情報発信などです。特に印象に残っているのは展示会の準備です。内容は、実際に芸術館に行き、市内の保育園・小学校などから「花いっぱい」をテーマに描いてもらった絵を市民の方々と協力して、展示するというものでした。市役所の中だけでなく、外に出て活動するということが新しい知見でした。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、市役所の仕事内容は、書類作成や事務処理などのパソコンと向き合うことばかりを想像していました。そのため、市役所の仕事にあまり関心を持っていなかったのですが、実際は、市役所の外に出て、イベントや展示などの準備、市民の方々との交流、SNSでの情報発信など多種多様な仕事内容でとても魅力的でした。特に市民生活課は、市民の方々との交流が多い課です。展示会の準備の際、市民の方々から笑顔で「ありがとう」という言葉をいただきました。とても嬉しく、市民の方々の役に立ちたい、水戸市をより良くしたいと思うことができました。

また、たとえ小さな仕事でも熱心に取り組むことが大切だと学びました。私は今まで「準備」は、ある程度やれば良いだろうと、いい加減に思っていました。しかし、円滑な会議を行うためやイベントを成功させるためには、「準備」がとても重要になってきます。この準備がしっかりしていなければ、本番はうまくいきません。これは、様々な面においても当てはまることだと思いました。

与えられた仕事の中にWebやFacebookでの情報発信がありました。「誰が見ても分かりやすくする」ということが難しいところでした。文字ばかりでは見る気がなくなってしまいます。しかし、情報量が少なくても相手に伝わりません。「相手のことを考える」という力が身につきました。市役所の方々を見て感じたのは、この「相手を思いやる気持ち」です。丁寧な対応、準備を抜かりなくすることなど、根底にあるのは、「相手のために」という気持ちだと思います。こういったことの積み重ねが、市民の方々の信頼を得ることにつながっているのだと感じました。

最後に今回のインターンシップは、元気な挨拶、お礼の言葉、真面目に取り組むことなど、当たり前のことを見つめなおすきっかけにもなりました。これらのような小さなことでも、できなければ社会人として失格だと思います。当たり前のこと、人を思いやる気持ちなど、大切なことを修得できたインターンシップでした。

4．後輩へのアドバイス

たとえ公務員志望でなくても積極的に参加すべきだと思います。市役所の方々はとても優しく、丁寧に指導してくださいます。水戸市についての歴史やビジネスマナー、市民の方々との交流など、経験しておくべきことが学べました。

また、上記でも述べましたが、挨拶やどんな仕事にも熱心に取り組む姿勢など、当たり前のことができているのか、自分を見つめなおすきっかけにもなります。相手からの指示を待っているだけでなく、自ら仕事を探すということも大切です。そうすることで、より市役所の仕事を知ることができると思います。

インターンシップを通して、是非、自分を成長させてください。

インターンシップを通して学んだこと・感じたこと

水戸市役所　市民生活課

現代社会学科　2年

関　森　ちあき

1．参加の動機

私は、将来の目標が明確でなく、どのような職業に就きたいのかもはっきりしていませんでした。そこで、興味のある職業の一つである公務員の職務を経験したいと思い、参加を決めました。私は、公務員という職に対して、市民の生活を守る･収入が安定している、などといった漠然としたイメージしか持っていなかったので、実際の現場での職務や雰囲気を体感したいと考えました。

また、人と直接関わることが好きで、生まれ育った茨城で働きたい、茨城に貢献したい、という気持ちがあったので、市民と直接関わることができ、かつ、暮らしに直結する行政活動に関わることができる水戸市役所でのインターンシップを希望しました。

2．派遣先の概要と業務内容

主に市民生活課では、市民活動・市民コミュニティ・消費活動の支援・指導・運営、市民センターなどの管理、市民と行政の協同活動を行っています。市民の暮らしと深く関わっているのが市民生活課です。

2日間のインターンでは、①来年の2月に行われる「こみっとフェスティバル2019」で行う企画の提案や資料づくり、②フェスティバル参加団体の募集チラシを施設へ配布、③水戸市消費生活センターでの、同センターに関する資料の袋詰め作業などを行いました。市役所内での業務と、外部の施設に出向き仕事をする両方を経験できました。①については、毎年、フェスティバルで行っているゲームであるスタンプラリーのリニューアル案として、みとちゃんを探せ！というゲームを提案し、企画しました。そこでは、自分の考えやアイデアが形となって作られていく過程を経験することができました。②では、ボランティア会館MIOSや三の丸庁舎へ出向き、こみフェスの紹介とチラシの設置を行いました。③は、市民の方々の配布する資料の袋詰めを行いました。改めて市役所職員の方の業務内容の幅の広さを実感するとともに、結構な数を袋詰めしたので、終わったときは達成感を感じることができました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して、言われたこと・指示されたことのみをやるのではなく、その先を考えて行動し、他にやることを自ら探し見つけ出すことの大切さを学びました。最初は、初めての市役所での業務で何に手を出してよいのかわからない部分もあり、受け身になってしまいました。1日目の後半から、2日目にかけては、自ら行動することを心掛けましたが、難しい部分もありました。しかし、職員の方に自分がやることはあるか質問し、積極的に動くことを意識すると、多少なりとも自分の行動に変化があることがわかりました。今、置かれている状況を理解し、課題を見つけ、解決策を自ら見つける力を付けることが大切だと実感しました。上司の方の指示を待っているだけでは、自分の成長に繋がらないと思います。普段の生活から、自分ができることを考えるクセを付けていきたいと思いました。

4．後輩へのアドバイス

私は、水戸市役所以外にも、政治系、農業系の職業分野のインターンシップにも参加しました。それぞれの職務内容に違いがあるのは勿論ですが、職場の雰囲気がまるで違いました。これは、インターンシップに参加していなければ分からなかったことだと思います。今、興味がある職業がある場合は、是非インターンシップに参加してみてください。肌で職場の雰囲気を感じることは、将来の就職先を考えるうえで非常に大切なことだと思います。インターンシップは就職活動に出る前の第一歩だと思っています。頭の中で、将来どうしよう、なにしよう、と悩んでいるだけでは答えを見つけることは困難です。まずは、その場に行って経験し、体感することで将来の道筋が見えてくることもあります。勇気をもってインターンシップに参加してみましょう。また、インターン生を受け入れてくれることは、当たり前なことではなく、有難いことです。感謝の気持ちを持って取り組んでみてください。

市民活動の窓口を実際に経験して

水戸市役所　市民生活課

現代社会学科　2年

田　岡　真美子

1．参加の動機

私は受講している専門科目「プロジェクト演習」において、「こみっとフェスティバル」(2月に行われるボランティア団体の催事）の企画・運営に携わる課題にチームを組んで取り組んでいます。その運営を行っている水戸市役所市民生活課様が普段どのようなお仕事をしているか知ることによって何か自分たちの活動に活かせることがないかと思い、チームでインターンシップに参加しました。また、私は以前から市役所という職場に興味を持っていました。しかし、実際にどのような仕事をしているのかについては知りませんでした。今回、水戸市役所市民生活課様に派遣させていただくことで、市役所がどのような仕事をしているのか、自分にこの職種はあっているのかなどを確かめようと思い、参加することにしました。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸市役所市民生活課は、その名の通り、市民生活に関する仕事をする課で、水戸市内の市民活動のお手伝いをしたり、消費生活の問題を解決したりします。インターンシップの1日目はまず、小中学生対象の絵画コンクールの出展のお手伝いに参加させていただきました。このコンクールは水戸市住みよいまちづくり推進協議会が主催で、水戸市は後援をしています。出展場所の水戸市芸術館に行って、主催者の方々と協力し、展示の準備をしました。その後、「こみっとフェスティバル」の実行委員長様と翌日行われる会議の打ち合わせをし、資料を作成しました。また会議で資料を読む際にわかりやすくまとめた読み原稿を作成し、会議に備えました。また市民生活課が運営する「こみっと広場」というホームページのイベント情報の更新を行いました。

2日目はこみっとフェスティバル実行委員会の会場設営を行いました。会議では、昨日作成した読み原稿をもとに資料の説明をしました。会議終了後は、議事録の作成を行いました。またこみっとフェスティバルのFacebookを更新しました。最後に任された仕事は、市民生活課の運営するホームページ「こみっと広場」内にある助成金のページの更新でした。市民の皆様が助成金をうまく活用できるように、様々な助成金の情報を、わかりやすくまとめました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップに参加する前は、市役所の仕事内容も、市民生活課がどのような課であるかも全く知りませんでした。しかし実際に仕事をさせていただくことで、市民生活課では、市民活動の手助けだけでなく、市民の方々と一緒になって活動しているということがわかりました。市民活動について特に印象に残ったのは、市民生活課は、本当に市民の皆様のことを考えて活動しているということです。こみっとフェスティバル実行委員の会議では、行政側がやりたいことではなく、当事者である市民の私たちがやりたいことができるようにご尽力されていました。担当の方は「行政だけではなく、市民の皆様の意見をできる限り反映させることで、より良いものができる。」とおっしゃっていました。私たちが普段何気なく過ごしている生活の中にも市役所の方々の仕事があるのだなと感じました。インターンシップに参加したことで、市役所は市民に寄り添って活動しているのだと気づくことが出来ました。

4．後輩へのアドバイス

自分の興味のある職業があるのなら、インターンシップに参加することをお勧めします。なぜなら、自分の持っているイメージと現実は違うことがあるからです。また、インターンシップに参加することで新たな発見もあります。さらに、将来の自分の働いているイメージもしやすくなります。最初、私はインターンシップに参加することに対し、緊張していました。しかし、派遣先の皆様は、とても温かく迎えてくださいました。また、インターンシップに参加したことで、今やっている勉強や、取り組んでいる課題に対してもやる気がでました。もしも参加するか否かで迷っているのなら、勇気を出して参加することをお勧めします。

企画と福祉という仕事を経験して

福島県富岡町役場　企画課、健康福祉課　富岡町社会福祉協議会

人文コミュニケーション学科　3年

大　貫　史　織

1．参加の動機

私は自分の進路を明確に決められていません。公務員として働くか民間で働くかも決めかねています。そのため、プロジェクト実習Dのインターンシップを通して、自分の進路を決めることに役に立つのではないかという思いから参加しました。また、社会人の方の働く姿を間近で見ることや実際に業務を体験することで、職業の正しい理解に繋がるのではないかと思いました。

2．派遣先の概要と業務内容

富岡町役場企画課では、『広報とみおか』や公式キャラクター・とみっぴー等を用いた広報から、統計調査や町政懇談会等に至るまで幅の広い業務を行っています。同、健康福祉課福祉係では、児童や障がい者の福祉にかかわることから戦傷病者や交通遺児にかかわることまで扱っています。また、2日目には健康福祉課福祉係の方を介して、富岡町社会福祉協議会で受け入れていただきました。富岡町社会福祉協議会（以下、社協）は民間の非営利組織であり、昭和43年に法人として設立されました。地域福祉の推進を目的として様々な福祉サービスの提供や相談活動等を行っています。

インターンシップは3日間でした。初日の企画課広聴広報係では企画課に関するご説明をいただいた上で、『広報とみおか』の郵送のお手伝い、町内視察への同行、とみっぴーのFacebook原稿作成等を体験しました。2日目の社協では、民生委員児童委員協議会定例会に同席したり、個別訪問へ同行したりしました。3日目の健康福祉課福祉係では、障がい者の状況や障がい福祉制度についての説明、児童手当制度に関する通知の封入作業、障がい者手帳や義足等の補装具について、資料を用いてご説明をいただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

公務員と社協の職員の仕事をイメージでしか捉えていませんでしたが、仕事や職場の雰囲気まで知ることができたことは大きな収穫だったと思います。公務員というと長時間パソコンに向かっているイメージがありましたが、封入作業から役場の外での仕事まで業務内容は多岐にわたり、仕事の幅の広さを実感しました。社協においてもデスクワークだけでなく、町民の方や周辺地域の方と様々な形でかかわる仕事もしていることを知りました。職場の雰囲気について、上下関係はあるもののコミュニケーションを大切にしていることがわかりました。組織で働く中でコミュニケーションは必要ですが、仕事の話だけでなく雑談もできる関係が築かれていることは魅力的だと思いました。

また、富岡町についてより知ることができました。職員の方や町民の方からお話をうかがった際に、富岡町への通勤や富岡町に戻ってきてからの日常生活についての生の声を聞くことができました。活動の中でそのような話を聞く機会はほとんどなかったため、富岡町で働くことや住むことへの理解を深めることに繋がったのではないかと感じています。

さらに、主体性を持つことの重要性を感じました。インターンシップ中に自分の目的は何か、どのようなことを学びたいのかを自分の中で明確にして仕事に臨むかどうかによって結果が異なると思います。また、そのように臨めれば積極的に質問することにも繋がり、インターンシップでの学びに差が出てくると感じました。そのため、主体性は重要だと思いました。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップに参加することで初めて見えてくることがあり、これはプロジェクト実習の活動でも得られないものです。そのため、プロジェクト実習の活動だけでなくインターンシップも経験したい方はインターンシップも経験できるプロジェクトチームを選ぶことをお勧めします。また、私の場合、社会人の方の貴重な時間を割いていただいているという自覚が足りない部分がありました。皆さんがインターンシップに参加される場合には、その自覚を持って業務に取り組んでほしいです。

視点を変えて分かったこと

福島県富岡町役場　教育総務課、産業振興課

人文コミュニケーション学科　3年

戸　谷　実花子

1．参加の動機

私は前学期からプロジェクト実習Dを受講しています。この授業では、福島県双葉郡富岡町にある文化交流センター「学びの森」を拠点として活動しています。「学びの森」はかつて町民の皆さんが集まり、賑わっていましたが、東日本大震災で被災し、それに伴う原発事故の影響で避難せざるを得なくなりました。現在は一部地域を除いて避難指示が解除されましたが、以前のような活気は戻ってきていません。そこで、このプロジェクトでは「学びの森」を町民の皆さんのコミュニティの場として再び活性化させることを目標にしています。そして、日々の活動にあたり富岡町役場の皆様には大変なご尽力をいただいております。

私は本が好きだということもあり、以前から図書館の業務に関心を抱いていました。また、それとは別に、私の実家が自営業だったということもあり、震災後、富岡町でかつて営業されていた方々がどのように事業再開をされているのか非常に興味深く思いました。以上の私の関心をふまえ、今回のインターンシップが実現しました。

2．派遣先の概要と業務内容

1日目にうかがった教育総務課生涯学習係では、文化交流センター「学びの森」の管理、運用をはじめとし、町の文化財の保護や管理、イベント開催といった業務を担当しています。初めに「学びの森」などに保存してある文化財や資料を見学し、東日本大震災の時に被災したJR夜ノ森駅の駅舎から運ばれてきた看板などの確認作業を行いました。そのあとは富岡町で開催された祭の雑誌掲載用の記事の校正作業、「学びの森」の館内アナウンスを行いました。

2日目、3日目にうかがった産業振興課商工係では、公設民営の商業施設「さくらモール」の管理、事業再開支援や事業誘致、町内循環バスなどの交通業務を行っています。私は、一部業務を委託している商工会の見学をし、各所でお話をうかがうなどしたあと、在京の避難者の方への広報の封入作業、「さくらモール」での会議の見学をしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

今回のインターンシップは富岡町での活動を既に4ヶ月ほど継続してのものでした。ですので、とりわけお世話になっている、教育総務課の業務内容などある程度把握しているつもりでいました。しかし、実際に業務を担当する側になり、外から見える仕事だけがすべてではないとわかりました。例えば、雑誌掲載用の記事の校正を行いましたが、その記事を書かれたのも教育総務課の方です。記事は町内で8年振りに行われた祭についてのものなのですが、町としての復興への想いが伝わるものでした。ほかの例としては産業振興課での「さくらモール」の管理があげられます。「さくらモール」は一般企業が入る施設ではありますが、町が作ったもので、官民一体となり営業をしています。このように役場の業務は窓口業務だけではないことを実感し、町のための仕事は多岐にわたるものだとわかりました。

インターンシップ参加以前は、役場というと事務的で固い印象がありました。しかし、実際に組織の内側に入ると、町に出向いて声を聞くなど、町民の皆さんを第一に考える役場の皆様の真摯な姿勢がうかがえ、自らの考えを改める良い機会になりました。また、富岡町は一部地域を除き避難指示が解除されてからまだ日が浅いです。そのため、町民の皆さんから様々な要望があがっています。しかし、現状では全ての要望を聞き届けることは不可能です。職員の皆様は、その葛藤のなかでも、最大限の努力を尽くそうとしています。その姿勢は、ほかのどんな仕事を行う上でも忘れてはならないものだと思いました。

今回のインターンシップを通して、今までの大学生としての視点と異なる、富岡町役場としての視点を体感することができました。この視点は今後も富岡町で活動する上で活かされるものになると思います。富岡町役場は普通の役場とは違い、様々な課題がある大変な現場であると思いますが、その中に身を置くことで一般市民の側からは見えない仕事、想いが見えました。

4．後輩へのアドバイス

初めてお会いする方々や初めての状況で緊張すると思います。しかし、緊張や遠慮をしすぎていても自分が持っている力を最大限に発揮できなくなります。また、遠慮していては体験できないこと、見えない視点もあるかと思います。せっかく用意していただいた機会ですので、学べること、吸収できることはたくさんあるのに越したことはありません。積極的に自ら動いていくのが良いでしょう。

業務の体験から得た就職への一歩

福島県富岡町役場　住民課、健康福祉課

人文コミュニケーション学科　3年

永　田　典　子

1．参加の動機

もともと将来の選択肢として公務員を考えていましたが、具体的にどのような職種に興味があるのか、はっきりしていませんでした。そこで、自分の将来を考えるためにも役場のインターンシップに参加して役場の現状を知り、実際の業務を体験することで、自分自身のやりたいことを知りたいと思いました。それにより、今後自分がどういうことを学んでいく必要があるのかについても、具体的なイメージがつかめるのではないかと思いました。

2．派遣先の概要と業務内容

福島県双葉郡富岡町は、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故により、まだ多くの地域が帰還困難区域に指定されています。震災から7年を経た現在もなお、多くの町民がいわき市と郡山市を中心に避難生活を続けており、通常の少子高齢化過疎地域とは異なる「過疎問題」にも直面しています。富岡町役場は、一般的な町役場業務とともに震災復興に関するたくさんの業務を担っています。

今回のインターンシップは2日間で、私が当初から希望していた住民課と健康福祉課に1日ずつ受け入れていただきました。

初日の住民課では、午前中に住民係の職員さんから窓口業務の説明を受け、実際にパソコンを使用し利用者の方との対応の一部を体験させていただきました。午後は避難生活支援係の職員さんに同行し、仮設住宅の見学をさせていただくとともに、実際に仮設住宅の管理をしている人からお話を聞かせていただきました。東日本震災から7年が経ち、仮設住宅が現在どのような状況にあるのかを知ることができました。

2日目の健康福祉課では、まず健康福祉課全体に関するご説明を受けた後、福祉係で資料作成のお手伝いと住民の方へ配布する封筒への押し印作業を行いました。どちらも指導員として職員さんが常について下さり、助言をいただきながら作業を行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私がインターンシップを通して修得したことは、初対面の方といきなり一緒にお仕事をするときの接し方です。学生生活では、常に同じ友人と一緒にいることが多いため、初めて会う方と1日一緒に行動することは新鮮で多くの学びがありました。加えて仕事の一部に参加させていただくにあたって、相手を不快にさせない距離感や接し方を考えることの重要性を知りました。

また、実際に業務を体験することで役場や住民の方の現状を垣間見ることができ、そこから自分が何をしたいのか･何に興味があるのかに気が付くことができました。とくに住民係の窓口業務の体験では、自分が意外にも人と接することが好きであることを知りました。また、福祉係で書類作成の手伝いや封筒の押し印作業をしたときには、パソコンに向かって作業をしたり、同じ作業を繰り返したりしても思いの外集中力が続くことがわかりました。自分自身の意外な一面に気づくことができ、実際に業務を見学し体験する大切さをも実感しました。

4．後輩へのアドバイス

私にとって今回のインターンシップが充実した日々になったのは、富岡町役場の職員の方々のご配慮のおかげです。インターンシップに参加することは緊張すると思いますが、受け入れ組織の方々は親切に対応してくださいます。そのため、気になったことは勇気を出して質問してみると自分の視野を広げることに役立ちます。

また、実際の作業中だけではないさまざまな場面で学校生活ではなかなか得られない多くの発見があると思います。お昼休みや休憩を職員さんと一緒に取る機会があれば、積極的にご一緒させていただくことをお勧めします。

インターンシップは限られた時間で行います。皆さんにとって有意義な活動になることを祈っています。

コミュニケーションの大切さ

福島県富岡町役場　健康福祉課、教育総務課

人文コミュニケーション学科　3年

野　平　知　里

1．参加の動機

私は、将来的に公務員、特に地方公務員の職に就きたいと考えています。ですから、市役所や役場の業務内容を学べるようなインターンシップを行いたいと考えていました。そこで、インターンシップが組み込まれているプロジェクト実習Dを受講しました。富岡町役場でのインターンシップを通して、役場での業務内容や、仕事をしていく上で必要となってくること、心構えなどを学びたいと考えました。

2．派遣先の概要と業務内容

インターンシップは2日間実施しました。実施場所は福島県双葉郡富岡町役場です。

1日目は健康福祉課福祉係でお世話になり、障がいや子ども福祉に関する手続きや業務内容、また、業務を行う上で心がけていることをご指導いただきました。また、町内を案内していただき、実際に一件、町民の訪問に同行しました。

2日目は教育総務課生涯学習係でお世話になり、古い文献や東日本大震災当時の看板など、様々な史料を見学し、東日本大震災当時から今に至るまでの過程や史料の復元、管理について学びました。また、富岡町文化交流センター「学びの森」内で実施されたコンサートの準備の手伝いを行いました。また富岡町文化交流センター「学びの森」内の設備などの見学も行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

私は、富岡町役場でのインターンシップを通して多くのことを学びました。その中でも一番重要だと感じたのはコミュニケーション力です。役場の方々の話をうかがったり業務を見学させていただく中で、役場の方は町民との会話であったり、県などとのやりとりであったり、人と人の間に立って業務をこなすことが多いという印象を受けました。また、自身の考えを的確にわかりやすく伝える力、住民の方々とコミュニケーションをとって信頼を築くことの大切さを学びました。役場はデスクワークが中心だと思っていたので印象が変わりました。

業務内容に関しては、1日目は、私が興味を抱いていた福祉について深いところまで学ぶことができました。ひとえに障がいといってもさまざまな福祉手続きがあることや障がいの種類にあわせ一人一人にあった対応があることなどが分かりました。障害者手帳の交付に関しても種類があるということ、町民の方に届くまでの過程などを学びました。

2日目は、史料の扱い方や生涯学習に関する知識を普段であれば学べないところまで得ることが出来ました。

今回学んだことは、これからの就活に活かしていきたいと考えています。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップ当日は、時間厳守はもちろんですが、少し余裕をもって行くとよいと思います。ほとんどが初めて赴く場所であると思うので、多少道に迷ってもよいように余裕を持つべきです。

また、現地では担当の方以外にも会った方には笑顔で挨拶をすることが大切だと思いました。受入先の方は忙しい中インターンシップを受け入れて下さっているので、感謝の気持ちを伝えるべきであるし、その空間、場所において受け入れてもらえる、更には、顔を覚えてもらう意味でも挨拶は大切であると思います。実際に私も、1日目に笑顔で挨拶をした方に2日目に逆に向こうから挨拶をしていただけるということもありました。インターンシップを受けるにあたってもコミュニケーションの大切さを実感したので、ぜひ、今後インターンシップを受ける方はコミュニケーションをとることを意識するといいと思います。

最後に、私はガチガチに緊張していたせいで上手く言葉が出てこないという失敗もあったので、できる限りリラックスして、一つ深呼吸をしてみるといいかもしれません。

自分たちができることとは何か

福島県富岡町役場　産業振興課、企画課

人文コミュニケーション学科　3年

羽田野　里　菜

1．参加の動機

私は将来、メディア関係の仕事に就きたいと考えています。しかし、具体的プランが見えていない状態でした。今回のインターンシップでは、自分の将来を見つめ直し、今後のプランをしっかりと考えるため、自分の適性をしっかりと分析し、自分が働く姿を想像できるように知識を得たいと思いました。また、役場で働くということがいかに住んでいる人たちの支えになっているのか、そのことを支える側になって考えたいとも思いました。行政サービスを受けている側だけではわからない考えや対策をしっかりと学び、客観的な分析をできる力を得たいと思ったのです。

2．派遣先の概要と業務内容

福島県双葉郡富岡町の役場であり、私が派遣された産業振興課商工係は主に事業再開の支援を行っています。また交通や観光についても事業を行っています。もう一つの企画課では、企画政策係・まちづくり係・広聴広報係に分かれています。私が行ったのは主に広聴広報係での業務で、町民の人たちにいかにすばやく正確な情報を伝えるかを考えて業務を行っています。1日目は産業振興課商工係についての説明を受け、交通についての会議を見学しました。2日目は、町の商工会への挨拶と商工会についての説明を受け、町の現状について町をまわりながら説明を受け役場に戻ってから、様々な立場の人から話を聞くことができました。3日目は、企画課にて資料の印刷や広報誌の整理を行い、町役場の隣にあるふたば医療センター付属病院にてドクターヘリの運航式の撮影に同行しました。また、企画に限らず今後の就職やものの考え方に役立つお話しをして頂きました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップで学んだことは、就職のことに関することだけではありません。もちろん、役場という職場の知識がない私は、役場の内部がいったいどのような仕組みになっていて、具体的にどんな仕事をしているのか、しっかりと学ぶことができました。しかし、それだけではありません。仕事に対する基本的な知識がいかに重要であり、それをいかに活かしていくのかがとても重要なことであるということを、身をもって感じました。自分の知識をいったい何のために使うべきなのか。誰のためにどういったかたちで、またどの知識がどの考え方が最善なのかを自分で選ばなければなりません。例えば、事業を始めるといっても色々事情を抱えた人がいます。事業を再開しようとしているのか、新規で始めるのか。また、計画がきちんと進められているのか、まだの段階なのか。相談にきてくれた町民の方の声にきちんと耳を傾け、その人にあった適切な対応をしなければなりません。そのためには、自分が「わからない」では話になりません。また、知識があるだけでもダメで、その知識を誰に向けるべきなのか適切に使い分けなければなりません。資料の準備にしても、自分の知識を出すだけではなく、常に相手の顔を思い浮かべ、その相手に向けて発信していかなければならないのです。当たり前のことですが、しかし私は一番難しいことだと考えます。常にこれらを意識し続けるのは大変で、それをこなしていくには、常に自分に何ができるのか目標を持っていなければならないのです。目標は高く、それに向かって少しずつステップを踏むことで、いつかその自分の目標達成が誰かの笑顔につながるのです。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップは就職のための活動かも知れません。それが動機でインターンシップに参加する人が大半かなとは思います。しかし、インターンシップに参加する意義はそこだけではありません。自分の今のレベルがいったいどれぐらいなのか、自分の力量に対しての気づきが得られます。現場にその身を置くことで、いったいどれだけの知識が自分にはあるのか、しっかりと知ることができます。私は実際、インターンシップは自分の就活に直結する活動だと考えていたため、何もわからない自分は何が学べるのか不安でした。しかし、今回のインターンシップで想像以上の学びを得ることができました。また、富岡町でプロジェクト活動をしている以上、現状をしっかり学んでおく必要がありました。それに関しても町役場の皆様にたくさん教えて頂き、さらに自分がやっている活動の意義を再確認し、自信を持つことができました。私はこのインターンシップを決して忘れることはなく、3日間で学んだたくさんのことは他の誰にも負けないほどの力になると確信できました。もしも皆さんが迷っているならば、思い切って飛び込んでいくべきです。

楽しんでもらうには何が必要か

Domaine MITO　株式会社

現代社会学科　2年

岸　　朱　里

1．参加の動機

専門科目のプロジェクト演習でDomaine MITO株式会社から「ワインツーリズムでまちを元気に」という課題をご提案いただき、チームで企画し控えていたワインツアー（東京発着の水戸を巡るバスツアー「和in水戸」）をより良いものとするため、Domaine MITO株式会社でのインターンシップに参加しました。ツアーに参加していただいた方に楽しんでいただくためには、またお客様に良いものを提供するためには、何が必要か、どのような準備をしなければならないのかを学びたかったため参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社とは、2016年夏からワインの醸造を水戸の中心市街地で始めた「まちなかワイナリー」です。ワインを飲むだけでなくワイン造りも体験するというのがコンセプトで、体験ツアーを随時開催中の企業です。

インターンシップでは、除梗・破砕という収穫したぶどうをつぶし　枝などを取り除くワインの醸造体験や、アペリティフという食前酒などワインについての体験に加え、よいとこプランというツアーではツアーを見学させていただき、昼食の準備や千波湖のデッキでの会場準備などの運営も経験させていただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

インターンシップを通して、参加者の方に楽しんでいただくには、まずそのことについて、今回は特にワインについて「自分が一番詳しくあるべき」であるということを学びました。インターンシップでワインの醸造体験やワインの勉強をさせていただいたことにより、ツアー当日の醸造体験で順番を待っている参加者の方との会話のネタになり、コミュニケーションを図ることができました。ワインについて以外にも「どのようなことやっているの？」などと声をかけていただいたので、インターンシップで体験したこと、学んだことが、コンテンツについて一番詳しくあるべきということにつながってくると思いました。また、ツアーを執り行ううえで、内容を凝るだけでなく雨天時の対策や、参加者の方が安心して楽しんでいただける環境づくりや事前の準備が大切だということを学びました。上で述べたよいとこプランというツアーに参加させていただいたことで、環境づくりや事前の準備というツアーコンテンツ以外にも視野を広げられ、周りを見ることにつながったと感じました。これらの準備や運営すること（裏方の仕事）に徹するだけでなく、積極的に参加者の方とコミュニケーションをとることも大切なことであるということも学びました。インターンシップで体験し学ばなければこれらの気づきはなく、内容だけがただ詰まったツアーとなり、参加者の方に楽しんでいただけなかったと思います。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップでは自分が何について学びたいのかということを念頭に置きながら活動することが大切だと思います。何も考えずにただ参加させていただくだけだと、大事なことや身になることをせっかく伝えていただいても聞き逃してしまったり、どう生かせるのかという想像がわきにくいと思います。インターンシップでよいとこプランというツアーに参加させていただいた際に、スタッフの方がどう動いているのか、時間配分はどのように構成されているのか、ということを念頭に置いていたので、それらの点に注目しながら活動に参加させていただき、ツアーに生かすことができました。これをしていなかったらインターンシップではなく、ほとんどただのツアー参加者になってしまっていたと思います。

したがって、今日はこれについて学ぼう、特にここに力を入れて聞こう、と少しでも考えることでアンテナを張ることができ、受け入れていただく企業のことや、今後の活動に生かせることがより詳しく見えてくると思います。

ワインを通じて学んだこと

Domaine MITO　株式会社

現代社会学科　2年

鈴　木　　葵

1．参加の動機

私は、普段の授業で観光や地域振興に関することを学んでいます。そのため、プロジェクト演習の8つのプロジェクト課題の中でも「ワインツーリズムでまちを元気に」という課題に最も興味を持ちました。自分もまちづくりに貢献してみたいと思ったことが、Domaine MITO株式会社様のインターンシップに参加を決めた大きな理由です。インターンシップの一つは、Domaine MITO社の取締役社長である宮本紘太郎様と、県内外の他の会社の方々との意見交換会への参加です。社会で行われている打ち合わせの流れや雰囲気を実際に体験してみたいと思い、参加致しました。もう一つは、きたかんマルシェ（東京の恵比寿で行われた、北関東3県が出店したイベント）にてワインの販売です。そこでは、収穫から醸造まで行っているDomaine MITOのワインを、実際にお客様のもとに届けるために参加致しました。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社様は、水戸市街地で初めての試みであるまちなかワイナリーを行っている会社です。葡萄の栽培・ワインの醸造までを自らの手で行い、販売することを目指し、2015年に立ち上げられました。また、地域とのつながりも大切にされているため、ワインを通してまちづくりに貢献することも目指しており、ツアーやイベントも盛んに行われている会社です。

座学のインターンシップでは、宮本様からワインや会社についてのお話・宮本様と他の会社の方々との意見交換会を拝見しました。意見交換会では、これからワインづくりに乗り出そうと試みている方が、宮本様からのアドバイスを伺うというものでした。ワイン関係者の紹介や、今後のワイン業界についてなどが話し合われていました。また、きたかんマルシェではワインの販売を行いました。ボトル・グラスワインの販売とともに、試飲も行いました。

3．インターンシップを通して修得したこと

意見交換会でまず最初に感じたのは、仕事をするうえで人とのつながりは大切であるということです。今回、新たにワインづくりを試みている方は、元から宮本様とお知り合いだったのではなく、ご紹介を受けて訪問されたとのことでした。そして、意見交換の場にはワインづくりとは関連がない職種の方もいらっしゃいましたが、その方々も含め活発な話し合いが行われ、次々と話が進んでいきました。多くの情報が飛び交う、とても興味深い機会でした。このことから、人脈を広げることは自分の視野や可能性を広げる為に大切であることが分かりました。何かを始めるとき、自分一人の知識と技術で達成できることには限界があり、周りの方々から経験談やアドバイスを伺う必要が出てきます。その際に、自分から動くこと、とりあえず行動をしてみることが重要であることを学ぶことが出来ました。

また、きたかんマルシェでは、お客様とのコミュニケーションを取り方やイベントの流れなどを学ぶことができました。ワインを売る流れとしては、まずは試飲で足を止めてもらい、その時間でワインの説明をします。そこで興味を持ってもらった方に、グラスワインやボトルワインをおすすめしていくものでした。北関東三県の活気や、イベントの賑わいを実際に体験し、自分自身も楽しんで参加することが出来ました。

4．後輩へのアドバイス

Domaine MITO株式会社様はワインを売ることだけではなく、ワインをきっかけとして水戸に興味を持ってもらい、水戸の商店街の活性や街づくりにつなげることを目指しています。宮本様からは、インターンシップ以外のところでもSWOTを用いた水戸の分析や、水戸の歴史なども教えていただきました。そのため、私自身も、「水戸とはどのようなところなのか、良い点・悪い点はそれぞれどこなのか。」を常に意識しながら活動することができました。新たな視点から、水戸を見つめ直すことが出来たのではないかと思います。社会経験も兼ねながら、今後の水戸のまちづくりについても考えるきっかけとなり、とても有意義な体験をすることが出来ました。

地域活性化の取り組みに学ぶ

Domaine MITO　株式会社

法律経済学科　2年

青　木　玲　奈

1．参加の動機

私は「プロジェクト演習」の授業でDomaine MITO株式会社様と連携してワインツアーを行い、その一環としてインターンシップに参加させていただきました。

プロジェクト演習で「ワインツーリズムでまちを元気に」という課題を選んだ理由としては、醸造体験やワインについての学びもあるため、楽しそうだと感じたこと、ワインについて学んでみたかったということが挙げられます。また、経営者の方が直接インターシップを行って下さいました。私は経営学を専攻しているため、経営者のもとで実際に企業活動に携われることに魅力を感じました。個人的に、地域活性に取り組む団体の活動に関わるなら、自治体ではなく私企業の活動に関わりたいという願望もあった、というのももう一つの理由です。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社は2016年夏からワインの醸造を始めた、日本有数の“まちなかワイナリー”（泉町会館裏）です。ワイン造りだけでなく、ワインツアーを行ったり、多くのイベントでワイン販売を行ったり、水戸市の飲食店でワインを提供したりしています。また、「一口オーナー」という制度もあり、収穫･醸造体験やリリースパーティーへの招待もしています。

そんなDomaine MITO株式会社でのインターンシップでは、醸造体験（ブドウをつぶす作業）を行いました。また、ワイン造り・流通・起業についての座学ではワイン造りの現場のDVDを見たり、ヨーロッパでのワインの広まりを学んだり、普段なかなか知ることができない会社の仕組みについて学んだりしました。また、麻布や恵比寿、水戸ホーリーホック試合会場などでのワイン販売の手伝いでは、お客の呼び寄せや、ワインについての説明をしました。

3．インターンシップを通して修得したこと

地方活性化の実例を見ることができました。例えば、ツアーなどを行うことで県内に人を呼び寄せるだけでなく、加工（醸造）を水戸市で行うことで表示を“水戸ワイン”にすることを可能にしています。それは茨城県の観光資源の創造に寄与していると言え、地域活性化の一例です。そのような実例を見ることで、地域で取り組む事業にも視野が広がりました。また、地域活性化についての考えも深まったと思います。

また、これはワインの製造業の方ならではの特徴であると思いますが、経営者としてのワインへの情熱を感じられました。それは、経営に興味がある私にとって刺激になりました。知識習得については、ワインや会社の仕組み、販売についての知識を得ました。特に、醸造体験をさせていただいたり、販売の現場に行ったりしたため理解が深まったと思います。

また、インターンシップを経験して、自分の行動も変化しました。代表取締役の宮本紘太郎様は私たち学生の考えや思いを大切にしてくださるため、積極性が求められました。話し合いでは自分から積極的に意見を出すようになり、また、自分から進んで行動を起こすようになったと思います。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップ中はどこの企業や自治体、団体でも自分の積極性が求められると思います。主体的に動くことで自分がインターンシップを経て得たいもの（例えば積極性などを身につけたい、自分の興味を知りたい、その業界の実際と自分が思い描いている活動は合致するか知りたい、など）が得られるのではないかと思います。また、ただインターシップに参加するだけでなく、インターンシップに行く前に目的や目標を掲げることで学びがあると思います。

インターンシップからツアーへ

Domaine MITO　株式会社

法律経済学科　2年

小野瀬　篤　美

1．参加の動機

私はプロジェクト演習の一環でこのインターンシップに参加しました。プロジェクト演習には、大学生のうちにしかできないことやいろんなことを体験しよう、やるか迷ったらやってみようと考え、この授業の履修を決意しました。

今年私たちのチームsucSeedがこのインターンシップに参加したのは、10月に都内の人を呼んで茨城・水戸の魅力を広めるためのツアーをDomaine MITO株式会社の代表取締役の宮本紘太郎様と協力しながら進めていたときでした。インターンシップで体験したことや学んだことなどさまざまな知識を吸収し、よりよいツアーにするためというのが参加の動機です。

2．派遣先の概要と業務内容

受入先のDomaine MITO様は、ワイナリーが注目されている今、ワインを水戸のまちなかで醸造している株式会社です。醸造だけではなくぶどうの栽培や販売も行っています。この特殊性や話題性を生かして水戸を元気にするため、新たなコミュニティを作ることを目的にしています。今回私は、9月15日の「よいとこプラン」の運営補助と同月23日のワインの座学に参加しました。水戸市観光課とDomaine MITO様で企画された「よいとこプラン」は事前の打ち合わせに同席したり、ツアー当日に参加者が行う工程の準備や片付けの補助をしたりしました。また、ワインの座学については作り方や種類などのワインに関することだけではなく、ぶどうのことや流通について宮本様からご教授いただきました。

3．インターンシップを通して修得したこと

このインターンシップを通して、ツアーに関する側面と個人的な側面の2つの側面からそれぞれ大きな収穫がありました。まず、ツアーについてでは自分たちがやろうとしているツアーを具体的にイメージが持てるようになりました。実際に参加者と接することで参加者が求めていることや他県からみた水戸の特殊性が見え、ワインに対してさらに興味がわいて多くの知識を得ることが出来ました。ツアーを実施するために活動することが非常に忙しく大変でしたが楽しくなりました。自分たちからだけの見方からだけではなく改めて参加者目線を意識できるようになりました。このような意識だけではなく、ツアーの段取りや工程の流れ方など吸収してツアーに生かせたことが多くあります。次に、個人的には名刺交換の仕方やメールでの所作などの社会に出てからやる行動が少々身についたことです。LINEを主に使い、名刺をやりとりすることのない大学生が日常ではやることのないことばかりで失敗したこともありましたが、数をこなしていくうちに少しずつこの能力が体得できたのではないかと思います。

4．後輩へのアドバイス

私からは2つのことをアドバイスしようと思います。

まず、インターンシップだけではなく、プロジェクト演習にもあてまはる話ですが、情報共有が難しかったです。情報共有は、決まった事柄だけではなく、それまでに至ったプロセスや事務連絡も含みます。チームの人数が多ければ多いほど情報の捉え方が増え、さらにその場にいなかった人に対して正確に過不足なく伝えることは非常に難しかったです。なので、報告・連絡・相談はとても大事な作業ですが、もうひとつ、認識の確認も行うといいなと思います。

次に、プロジェクト演習でもインターンシップに参加することも、興味はわいてもなかなか行動に移せない人が多いと思います。しかし、迷ったら、もうやってしまいましょう。大学での時間は限られているので、この活動のせいで時間がかかったり面倒なことがあったりします。ですが、実際にやってみると、頭で想像していたことがことごとく、ほとんど覆され、面倒なことや不安であったことが案外困難なことではないことが多いです。特にインターンシップではその環境に入りに行くので、社会人の仕事を体感できて楽しいとも感じることができるでしょう。

かけがえのない経験

Domaine MITO　株式会社

法律経済学科　2年

重　富　優　希

1．参加の動機

私は、学生が主体となって活動する通年科目であるプロジェクト演習という授業を通して、Domaine MITO株式会社様のインターンシップに参加しました。授業への参加を決めた理由は、大変そうだけれど貴重な体験ができるに違いないと思ったのに加え、以前から、大学生のうちにしかできない活動をしてみたいと考えていたからです。

また、授業の中でもDomaine MITO株式会社様のご提案を選択したのは、「ワインツーリズムで水戸を元気にする」というテーマに魅力を感じたからです。

2．派遣先の概要と業務内容

水戸初のワイナリーであるDomaine MITO株式会社様は、2015年に立ち上げられた新しい会社です。ぶどうの栽培、ワインの醸造まで全てを自らの手で行い、販売することを目指して水戸市の中心市街地で2016年の夏から醸造を始めました。ぶどうの栽培、ワインの醸造・販売を同じ地域で行っている“まちなかワイナリー”は、全国的に見てもとても珍しいそうです。

今回のインターンシップでは、Domaine MITO株式会社様が企画に携わっている、よいとこプランという水戸をめぐるツアーに一緒に同行させていただいたり、恵比寿ガーデンプレイスで開催された、きたかんマルシェというイベントでワインの販売をさせていただいたりしました。きたかんマルシェとは、ご当地のグルメ・お酒・食品・工芸品など、水戸、前橋、宇都宮、高崎の「名物」が一同に楽しめる物産フェアのことです。

3．インターンシップを通して修得したこと

よいとこプランでは、実際のツアーに同行させていただいたことで、後に控えていた自分たちのツアーのイメージを膨らませることができました。本番ではどんな役割が必要か、どんなトラブルが起こりうるかなどを考えるうえで、大変参考になりました。

きたかんマルシェでのワイン販売では、モノを売ることの難しさを知りました。自分が売る商品のことをよく分かっていなければ、お客様に魅力を伝え、購入していただくことは難しいと感じました。最初のうちは大きな声で呼びかけをするのがなんとなく恥ずかしかったのですが、次第に慣れてできるようになり、楽しいと感じるようになりました。自分がワインの特徴などを説明してお客様が購入してくださったときは、とても嬉しかったです。

また、全てのインターンシップにおいて、メールでのやり取りをする機会がありました。このプロジェクトに参加するまでは、社会人の方にメールを送ることはほぼありませんでした。そのため、最初のうちは一通送るのにも非常に時間がかかっていましたが、数をこなすうちに少しずつスムーズに送れるようになりました。この授業に参加しなければこのような機会は得られなかったと思うので、参加を決めてよかったと思います。

4．後輩へのアドバイス

インターンシップも組み込まれているプロジェクト演習という授業は、大変さもありますが、それ以上にやりがいと達成感があります。また、かけがえのない同じチームの仲間も得ることができます。プロジェクト演習では、インターンシップ先の企業等とは一年を通じて関係性を持つことになります。そのため、通常のインターンシップよりも深い学びや気づきがあるのではないでしょうか。ぜひ、プロジェクト演習を履修して、インターンシップに参加してみてください。

ワイン流通の概要とマーケティング

Domaine MITO　株式会社

人間文化学科　2年

廣　木　彩　乃

1．参加の動機

プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱという授業で、私は水戸の活性化を目的としたワインツーリズムの企画をしています。今回、そのプロジェクトに協力して下さっている企業の方がインターンシップも受け入れて下さることとなりました。代表取締役社長の宮本紘太郎様は、一度商社で働いたのちに、ご自身でDomaine MITO株式会社を起業なさった方です。そのような様々な経験をお持ちの方から話を伺うことで、自らの視野を広げ、新たなものの見方を得たいと思い、インターンシップに参加しました。

2．派遣先の概要と業務内容

Domaine MITO株式会社は、茨城県水戸市泉町にある「泉町会館」にて初めての試みとなるワイナリーをオープンさせました。茨城や水戸近郊の果樹園で栽培された葡萄を用い、ワインを製造・販売しています。全国的にも珍しい都市型のワイナリーを茨城の新たな魅力として発展・発信していくための活動もなさっています。

インターンシップでは商社の総合職が用いる目標登録・評価シートの記入や、SWOT分析、4Pなどの手法を用いたマーケティングの理解などのワークショップも交えつつ、ワイン流通の概要やマーケティングについての知識を学びました。

3．インターンシップを通して修得したこと

業務・業績上の取り組みは定量と定性という2つのものの見方で評価されます。例えば商社の場合、売上の具体的目標値やその他の数値的データが定量的な取り組みとして評価されます。それに対し、数値で表すことができない取り組み、具体的には売上目標値を達成するための手段の工夫や、その他仕事に対する積極的な働きかけ、そのプロセス・結果が定性的な取り組みとして評価されます。

ワインの流通には、主に生産者・卸売業者・小売業者の3つの業者が関わっています。さらにこの3つの業種内でも商売の仕方や流通への携わり方のバリエーションは様々です。例えば同じ卸売業という業種であっても、卸売業者によってそれぞれ得意とするターゲットや商売の仕方、目的が異なっています。主に駅ビル内のお店をターゲットとして商品を卸す卸売業者は、駅ビル内という立地、特色を生かし電車内で手軽に飲めるカップワインや一般の人が手に取りやすい価格帯のワインなどを多く取り扱っています。それに対し、主に百貨店をターゲットとして商品を卸す卸売業者は、百貨店に買い物に来る客層、年齢層などに合わせて、市街地のスーパーマーケットでは取り扱っていないような価格帯の高いブランド性があるようなワインも多く取り扱っています。このように、それぞれの業者はそれぞれの立場から、顧客のニーズと自分たちの強みを分析し、活かしながら流通に携わっていることを学びました。

また、マーケティングを行う際には現状の分析が重要となります。その際に用いる数多くの手法のうち、SWOT分析と3C、4P、AIDMAという四つの手法を教わりました。特にSWOT分析と4Pについては、ワークショップを交えて理解を深めました。SWOT分析では、S＝強み、W＝弱み、O＝機会、T＝脅威といった観点から現状を分析します。ワークショップでは、ワインの生産者と卸売業者がそれぞれ都市部で商売を行う場合と、地方で商売を行う場合について双方の特徴の違いについて理解しました。4Pについてのワークショップでは、Place、Product、Price、Promotionという4つの観点から水戸駅ビル、京成百貨店などのワイン売り場を実際に訪れ調査したあと、それぞれの売り場の特徴をまとめ、店によって異なるワインの売り方、流通への関わり方について理解を深めました。

4．後輩へのアドバイス

既に希望の職種や業種が決まっている人もいると思いますが、一度視野を広げて様々な職種・業種の方から話を聞くことで得られるものがあると思います。直接就職には結びつかなくても、インターンシップで得た知識やものの見方は、勉学やその他の活動の中で、今後非常に役に立つと思います。

編集後記

今年度もインターシップがそれに関わった皆様のおかげで大過なく終了しようとしている。今プログラムを取り巻く環境は冗談ではなく国家レベルで「疾風怒濤」であり、本当にこれでよいのか迷ってばかりである。ただ間違いないのが「学生ファースト」の姿勢を忘れないことではないだろうか。教職員のみなさま来年度もなにとぞよろしくお願いいたします。（井澤　耕一）

今年度、初めてインターンシップ委員を担当しました。担当した学生を見ていてもっとも驚いたこと、それは、12月に行った成果報告会でのみなさんの表情が、７月のガイダンスのときとは比べものにならないくらいに落ち着いていたことです。インターンシップでの経験が、社会人の入口に立つ皆さんの血肉となっていることを改めて認識した次第です。ご指導いただいた職員の皆様に、心より御礼申し上げます。（添田　　仁）

インターンシップ中、学生から、毎日、日誌が届き、仕事や学んだことが書いてある。それに応え、助言やコメントを書いていると日付が変わる。疲れているであろうに、気付きや学びでぎっしりだ。読んでいると日々、成長が感じられニヤリ。担当教員の密かな楽しみだ。（村上　信夫）

当方は、この業務に携わることで、学生が主体的に活動に参加する様子を目の当たりにすることができました。印象的だったのは、学生の意欲に応じて活動の幅を広げて頂いた受け入れ先が多かったことです。本学の学生のポジティブな姿勢を見越して対応いただく関係が構築されていることが理解できたほか、活動を通じて視野を広げようとする、あるいはインターン先が果たしている社会的役割を見極めようとする態度の重要性を、あらためて感じた次第です。インターンシップにも、こうして本学の学風が反映されることは、喜ばしいことでした。（今村　一真）

専門科目「プロジェクト演習」のインターンシップレポートが、今年もまた報告書に掲載されています。委員会のご配慮に感謝申し上げます。学生の皆さん、学部で実施されているインターンシップの全てがこの一冊で分かります。どうぞ勇気を出して、インターンシップに参加してみてください。（神田　大吾）

インターンシップでは、様々な“気づき”や“発見”があったのではないでしょうか？勇気をもって一歩前に踏み出すことにより、新たな展開・可能性が拓けることがあります。そして、それはあなた自身を大きく成長させます。キャリアセンターは、あなたの“勇気”を本気で応援します。是非お話を聴かせてください。（小泉　崇人）

【スタッフ】

■人文社会科学部

・学務グループ　　清家　佑華

■キャリアセンター

・センター長　西川　陽子

・専任教員　小磯　重隆

・インターンシップコーディネーター　菊池美也子

・キャリア支援課課長補佐　小泉　崇人

塚田　和男

・就職支援係

鹿志村やよい　石崎三代子　武藤　理也

茨城大学人文社会科学部